

二 參考資料

(一) 和辻哲郎氏の「日本精神史研究」に收められてゐる「お伽噺としての竹取物語」の中から、本文の段に關して文
化史的意義を指摘してゐる條を引用する。

そのあとに最後の段が来る。そこでは現實の世界が全體として超自然界に對照させられてゐる。春頃から月を見ては泣いてゐた姫が、
いよ／＼八月の月の頃になつて、翁に自分の素性を打ち明けこの世を去ることを告げる。自分は月の都の人である、宿命でこの世へ降
りて来たが、今は歸るべき時になつたと。そこで翁をはじめ帝その他の人々の嘆が始まる。姫をこの世に留めようとして現世のあらゆる
るでだてをめぐらす。昇天の當日には二千人の兵を派して翁の家を衛らせ。築地の上に千人、屋の上に千人、(これは物理的自然に於
ては不可能であるが、心理的には可能である。)母屋のうちは女どもに守らせ、かぐや姫は塗籠に入れて姫が抱いてゐる。翁は塗籠の
戸口に番をする。しかしいよ／＼大空から迎ひの群が来ると、人間の守りは何の力もない。姫はやす／＼と外に出る。さうして靜かに、
「あわてぬさま」で、せき立てる天人を制しつゝ、翁と帝とに遺書をかき、昇天の支度をして、飛ぶ車に乗つて立ち去る。——この段
の描寫は特に巧妙である。翁の悲しみも、年老いたる翁を見捨てる姫の悲しみも、また昇天を禦がうとする夜、興奮してのゝしり騒ぐ
人々の有様も、極めて躍如として描かれてゐる。殊に天よりの迎へが到着して、天上界と地上界とが全然重り合つた場面の描寫は際立
つて巧みである。天よりの人々は地より五尺離れて立ち竝んでゐる、地上の兵士は力萎えて呆然としてゐる。飛ぶ車を屋の上によせる。
塗籠の戸が自ら開く、格子も自ら開く。姫は立ち出でて泣き伏した翁にいふ、私も心ならず歸るのです、見送つて下さい。翁は、「何し
に悲しき見送り奉らん、我をばいかにせよとて棄てゝは昇り給ふぞ、具して率ておはせぬ」と泣く。天人が羽衣の箱や薬の壺を持つて
くる。一人の天人が、地上の食を取つて心地悪いであらう、壺の中の不死の薬を召せ、とすゝめる。姫は一寸嘗めて、少しをかたみに
地上の衣に包んで置かうとする。一人の天人がそれをとめて羽衣を著せよとすると、姫は、「一寸待つて。それを著ると氣持が變る、
まだ一言云ひ残したい、」と云ひながら帝への手紙を書き初める。天人は「遅くなる」と心もとながるが、姫は、「物知らぬことなの給

ひそ」とひどく落ちついてゐる。——我々はこれらの描寫を見て、それが平安朝貴族の生活からあらゆる形象を借りてゐることを否む
わけには行かぬ。しかしこれはいかなる方面から見てもこの時代の「世態」の描寫ではなくして、全然空想の世界の描寫である。さう
してこの段に竹取物語全體の重心がある。そこには淨土の幻想が、即ち彼岸の世界の幻想が、力強く浸透してゐるけれども、生きた信
仰として働く佛教の色彩は注意深く避けられてゐる。羽衣を身に著けるとともに地上的な物思ひが、現世の煩惱が、立ちどころに消え
失せるといふやうな考は、奈良朝の神仙譚にはなかつた。しかし佛菩薩もなくて天人のみなる月の都、老いもせず、思ふこともな
く、しかも「父母」といふもののある當世の國、それは佛教的な空想ではない。戀があり夫婦があり親子があつた海神の國が、地上的
な不完全さを漸次拂ひ落し、煩惱なき淨光の土の觀念を漸次取りいれつゝ、遂に海底の國より天上の世界に發展して来たのである。こ
の世界の空想を基調と見ずしては、竹取物語は正當に鑑賞されることがあるまい。

なほまた我々は、この作が物語の最古のものである故を以て、同時に幼稚であると考へてはならない。それは文章の簡勁、描寫の的
確、構圖の緊密に於て、平安朝盛期の物語に優るものを持つてゐる。その眼界に於ても、後のものよりは廣く大きいと云へる。たゞし
かし、お伽噺としてのこの作の様式は、この後により後繼者を持たなかつたらしい。むしろそれは、天平時代以來展開したお伽噺文學
の流れの絶頂であつて、この時に突如として現はれたものではなからう。これが物語の源流と見られるのは、お伽噺としてのこの作の
うちに世態小説の芽を含んでゐるといふに過ぎぬ。この作が「世態小説の道」を開いたと見らるべきでない。

(二) 竹取物語の註釋書の主なるものは左の如くである。

田中大秀 竹取物語解 六卷

佐々木弘綱 竹取物語俚諺解

今泉定介 竹取物語講義

吉川秀雄 新釋竹取物語精解

七 都鳥

一 解題

一 本文

伊勢物語の中から、第九段と第八十二―三段とを抄出した。

伊勢物語は歌に業平の作が多く、事に業平らしい點が少くないので、古來「在五將の日記」(衣狭)などと呼ばれ、竹取物語と並んで平安朝初期に於ける國文學の雙璧と稱せられてゐる。早くから上流の間にもてはやされ、又歌書の一として永く後代に愛誦せられ、平安朝文學研究に於ても、古今・源語と相並んで行はれてゐた。

二 作者

篇中、在原業平の歌を中心とした物語が多く集められてゐる所から、古來、作者を在原業平とする説が行はれてゐるけれども、賀茂真淵は歌の中には行平・元方・友則・忠岑・直幹等の作が載つてゐることを證として、作者不明を主張してゐる。近年に至つても、業平の歿後に於て何人かが業平の家集又は歌日記の如きものを中心として編成したものであるとの説もあれば、さうではなくて、業平以外の逸名氏の作であるといふ説もあつて一定しない。尙、成立年代についても業平自記説・古今集成立以前説・後撰集成立以後説等が存する。

名稱についても、「伊勢人は僻事す」といふ諺に由来するといふ説、伊勢齋宮の記事があるからといふ説、伊勢の御の

作に係る故となす説、「えせ物語」の轉音となす説等があるがこれ亦決し難い。

在原業平は在五中將又は在中將とも呼ばれる。平城天皇の皇子阿保親王の第五子。母は桓武天皇の皇女伊登内親王で、兄行平と共に在原の姓を賜はつた。貞觀年中右馬頭となつた。元慶元年右近衛權中將、從四位上となり、同三年藏人頭となり、同四年(一五四〇)五月歿した。享年五十六。業平はその妻が紀有常の女で、惟喬親王の御母がまた有常の妹であつた爲に親王と親交があり、親王の立太子にも奔走したが遂にその意をはたさず、藤原良房は清和天皇を位に即け奉つて外戚となり、更に養子基經の妹高子(長良の女)を後宮にすゝめようとした。業平の東下りはこれらの事件に關係あるものと考へられてゐる。既に業平が京に歸つて幾何もなくして惟喬親王は出家せられ、諸事意の如くならず、爲に放縱不羈の生活に陥つたが、親王に對する眞情は切々たるものがあつた。

尙、業平は傳説的美男として考へられ、小説・謡曲・演劇等、業平を題材としたものが多い。(一八一頁「惟喬親王」の項及び二二三頁「在原業平」の項参照)

三 採擇の趣旨

竹取物語と並んで平安朝初期の代表作品に接しさせ、日本文學の形態的展開史に於て重要な位置を占める歌物語の傑作を讀ませようとして擇んだものである。尙、當時の新しい國字による簡古な表現の妙味をも體讀させたい。

二 教材としての研究

一 註解

【都鳥】ミヤコドリ 都鳥の名を有する鳥に、二通りある。

(一)動物學の方でいふ「みやこどり」で、鷓目、千鳥科

に屬する。體背面は一樣に黒色で眼下に白點があり、腹

面は白色、尾羽は基部が白く末端が黒い。嘴は黄赤色で

甚だ長く脚は赤色である。東シベリア・カムチャツカ・朝鮮等で繁殖し冬期南支那や我が國の各地に渡來する。併し我が國では近時著しく減少し殆どその跡を絶つた。

(二)古來文學的に名高いもの。動物學でいふ「ゆりかもめ」で、(一)とは全く異なり、鷗目、鷗科に屬する。やゝ小形の美麗な鷗で、冬期は後頸と耳羽が褐色を帯び翁が銀白色を呈する外、地色はすべて白色であるが、夏羽では頭部が全部黒褐色となり、たゞ眼の周圍だけが白い。翼の初列風切は白色・黒縁、次列風切は灰色で先端黒く、嘴と脚とは美しい暗赤色を呈する。ヨーロッパ・アジアに廣く分布し、我が國では樺太・千島方面で繁殖して各地の河海や濠渠に多く飛來し、冬期は臺灣まで南下する。東京附近で見られるのは主として冬期である。こゝは(二)で、本文の物語以來著名となつた。

【昔、男ありけり】

伊勢物語の多くの篇の冒頭にある言葉。當時の作物語の冒頭におかれた「今は昔」「いづれの御時にか」な

定の決意を表すに用ゐる。「いはじ、いはじ」こゝは(一)。

【東】アヅマ 京都より東の方の諸國の總稱。東國。吾妻。(七〇頁「あづまはや」の項参照)

【住むべき國】 住むに適した國、或は所。

【べき】 適當の意を表す。

【もとより】 (一)初から。元來。もとから。(二)いふまでもなく。勿論。こゝは(一)。

【友とする人】 友人。友達。仲間としてゐる人。

【一人二人して】 一人二人一緒に。

【して】 (一)ありて。(二)を以て。(三)にて。(四)によつて。こゝは(三)。

【惑ひ行きけり】 まよつて行きました。

【惑ふ】 (一)分別に苦しむ。途方にくれる。(二)正しい道を行きかねる。まごつく。(三)とちがへる。考へちがへる。(四)よくないことを思ふ。こゝは(一)。

【八橋】 ヤツハシ 現愛知縣碧海郡知立町の一部。往昔は

どと同じ性質のものである。

【男】 歌によつて考へて、古來業平であらうとされてゐる。

【えうなき】 かひのない。不用な。無益な。

【えう】 要 (一)趣意の第一とすること。かなめ。肝腎。(二)要すること。必ずと要むること。必要。こゝは(二)。

【えう】は「やく」(益)の音便であるとする説もあるが、古寫本の多くが「えう」で、「やう」は無いから、「要」とするのが穩當であらう。

【思ひなして】 思ひ量つてそれであると定めて。

【なす】 (一)仕事をあつかふ。する。行ふ。(二)此のものをかへて彼のものとする。こゝは(二)。

【京】 キャウ 都。帝王の宮殿のある所。こゝでは京都。

【あらし】 をるまい。住むまい。

【じ】 (一)動作を推量して打消す意に用ゐる。「よもまことにはあらし」(二)第一人稱の動作について否

官道がこのあたりを通過したといふ。大日本地名辭書に「今、知立町の東に牛田・八橋の二村あり、合はせて牛橋と改む。八橋と駒場村の間、遇妻川の邊に昔橋ありしと傳へ、土人は駒場の一堆丘(古松五六株を生ず)の側なる芝生をさして、古の杜若の茂りし跡と説く」とある。「かきつばた」は今では位置を變へて無量壽寺の境内に、初夏には昔ながらの花を咲かせてゐる。

この伊勢物語の記事によつて、八橋は以後「東國」の歌枕となり、又、八橋の侘びた趣は夙に茶庭や普通の庭園に寫されるに至つた。更科日記に「八橋は名のみにして橋のかたもなくなにの見所もなし」と見えてゐるから、長元年間には既に絶えてしまつたらしい。尙、新釋には「これは大なる澤にてその水左みぎりなる數々の小川にながれわかれたれば、田つくる人のかよはんために、木をはしにかけたるがそのわたりに八つありけるゆるゑにやつ橋と所の名にいひなしたる也」とあり、「伊勢物語古意」「よしやあしや」にはその想

像圖が掲げられてゐる。

【水ゆく川】 水の流れてゐる川。川。

【ゆく】 種々の意を有するが、こゝでは、流れる意。

【蜘蛛手】 クモデ 蜘蛛の肢のやうに八方へ放射状に出てゐるさま。

【澤】 サハ 水が溜り、草の生ひしげつた低地。

【邊】 ホトリ (一)程近い所。あたり。そば。(二)水際。ふち。岸。(三)都を離れた所。かたわなか。こゝは(一)。

【おりゐて】 馬から下りてゐて。馬から下りてやすんで。

【餉】 カレヒ又はカレイヒ 乾飯の義。(一)干した飯。ほしいひ。旅行・行軍などに携へて糧としたもの。(二)後には、旅の食。辨當。こゝは(一)。

【燕子花】 カキツバタ 杜若とも書く。鳶尾科、あやめ屬の多年生草本。水邊に自生し或は栽培される。高さ六〇—九〇釐。葉は廣き劍狀で長く中肋脈を缺く。初夏、大形の花を花莖の頂に開き、花色は紫碧・白紅等がある。外花被は大形で下垂し、内花被は狭小で上向する。本州

各地に見受けられる。「はなしやうぶ」とは、内輪の花蓋が傾上し、葉も潤く、中央の肋脈を有しない點で異なり、又花期も稍早めである。異名—かいつばた・かほよぐさ・かほよばな・かほばな。

【すゑて】 おいて。

【旅の心】 旅情。旅の心持。旅心。

【からころもの歌】 著馴れた著物の身にも心にも適ふやうに、日頃馴れ親しんだ妻を都に残して來たので、遙々山川を隔てて別れて來た旅をしみじみと思ふことである。

古今集、霧旅歌に、在原業平朝臣として、次の詞書と共に同じ歌が出てゐる。

東國の方へ友とする人一人二人いざなひ行きけり、三河國八橋といふ所に至れるに、其の川のほとりに杜若いと面白く咲けりけるを見て、木の蔭に下りゐて、かきつばたといふ五文字を句のかしらに据ゑて旅の心を詠まんとて詠める

【ほととぶ】 水分をふくんでふくれる。ふやける。

【行き〜て】 進みに進んで。續けて行つて。「行く」を重ねて、時間的・距離的にその持續を示してゐる。

【宇津の山】 ウツのヤマ 静岡縣安倍郡と志太郡との境界に在る。明治九年隧道を通じた。

新風土記に次の記載がある。
宇都山は内屋郷に在り、此峠今も官道なり、さて此山を越る事、伊勢物語にはじめて見えたれ共、其時は間道にして、驛路にあらざる事、伊勢物語の辭にきこえたり、此山の官道になれる、何れのとときと云事さだかには分りがたしといへ共、延喜式を考ふるに、遠江國初倉の驛より、此國小川の驛、夫より横田驛を記せり、此古道はうつの山よりは一里南ばかり東南の方、日本坂を越えて往來せるとし。

【我が入らむとする】

【我が】 物語の主人公と作者自身とが一體となつた表現法。

【入る】 (一)はいつて行く。中に到る。(二)日月の影

【ほととびにけり】

涙の多く落ちたさまを誇張的にいつた。新釋に「ほととびにけり」は拾穂抄にいへるごとく俳諧(たはぶれおどけ)なり」とある。

【からころも】 (一)支那又は朝鮮風の衣服。(二)めづらしく美しい衣。(三)「著る」「裁つ」「反す」「裾」等の枕詞。こゝは(三)。「からころもきつゝ」は「なれ」の序。

【なれにし】 著物に馴れた意と妻になれた意とをかけたある。

【つまし】 「つま」は「妻」と衣の「褌」とかけてある。「し」は強めの助詞。

【はる〜】 「遙々」の「はる」を、衣の縁から「張る」にかけてある。

【來ぬる】 「來ぬる」を「著ぬる」にかけてある。

【なれ】 「つま」「はる」はいづれも「衣」の縁語。

【みな人】 すべての人。

が没する。こゝは(一)。樹木の小暗く茂つた細道である故にいつたのであらう。

【蔦】 ツタ 地錦とも書く。葡萄科、つた屬の攀緣藤本。莖には吸盤を具ふる卷鬚を有し、樹木・岩・壁等に附着して上昇する。葉は卵圓形又は心臟形で互生、長柄を有し掌狀に三裂するか又は三小葉から成り、粗鋸齒を有する。初夏、葉腋に淡黄綠色の小花を總狀に綴り、後、黒色に成熟する球形の小漿果を結ぶ。山野に自生し、或は觀賞用とされる。秋日紅葉する。北海道・本州・九州・琉球・臺灣に分布。

異名—なつづた・こうえふづた・にしきづた。

【かへで】 楓 雞冠木・槭とも書く。楓科、楓屬の落葉喬木。枝條は無毛、葉は膜質で長柄を有し、全形は圓狀で心脚、通常七乃至十一個の裂片に分れ、各裂片は鋭尖頭で鋸齒縁である。繖形狀房房状或は圓錐形花序で、花後果翅を生ずる。果翅は一六〇—一八〇度に開く。花候は四五月頃、花色は暗紅色である。秋の紅葉を愛でて觀賞

用とされ、又、材も種々に利用される。

異名—もみぢ・かへるでのき・いはとべに。

楓にはその種類が約百三十種あつて、我が國の山野に自生するものが約五十種位、その他栽培の變種なども極めて多いが、一般にこれ等を總稱して楓又はもみぢといつてゐる。その大部分は秋期の紅葉又は黄葉を以て著名である。

【すゞろなるめを見る云々】

さはあるまじきめを見るといふことで、都にわたならば、このやうに心細いことはあるまいのに、道を知らないあづまの方に來たから、「わが身にさはあるまじき心細きめを見る」ことかなと心のうちに都を出たのをくやくしくおもふ意。

【すゞろ】 (一)何のわけもなく心のすゞむさま。(二)さやうにはすまじきことをなすさま。(三)わけもなく。理由もなく。無造作に。こゝは(二)。

【め】 こゝでは、その時そのことに出會つたこと、場

合、の意。

【修行者】 スギヤウザ、又はシニギヤウジャ・スギヤウジャ 佛道を修行する爲に行脚する僧。

翼讀^{四五}に「修行はもと行住座臥と通じ、又身口意の三業と涉れども、日本の俗、昔より山林抖擻の身となりて、托鉢遊行するを修行者といふなり」とある。

【見し人】 知つてゐる人。見たことのある人。

【その人】 心に思ふ人。

【つく】 依頼する。託する。ことづける。

【駿河なるの歌】 今この駿河の宇津の山に旅してゐる身は、現實には勿論、夢の中に於てさへも誰にも(逢ひた人に)逢ふことが出来ないことであるよと恨んだ歌。上二句は所を示すと共に「うつゝ」の序に兼ね用ゐたもの。

昔は人を夢に見るのは先方の人の思ふ心が通つて來るのだと考へられた。

古今六帖二に「駿河なる宇津のお山の現にも夢にも見

ぬに人の戀しき」とある。

【うつゝ】 現の約。眼ざめてゐる時、心のたしかなことにいふ。現實。

【人に】 一般の人をいつて、それとなく親しい人をさす。神宮文庫本では「に」が「の」になつてゐる。さうなると怨む氣持が直接に現れて來る。

【富士の山】 不盡・不二・布士・富慈にも作る。(九六頁「不盡山」の項参照)

【五月】 サツキ 早月。阜月。早苗月。仲夏。

【つごもり】 月隠の略。(一)月の光の全くかくれて見えぬやうになること。(二)陰曆にて月の下旬、又は末日の稱。こゝは(二)。

【時しらぬの歌】 時節を辨へない山は富士の山である、この五月の末に一體何時だと思つて鹿子斑に雪が降つてゐるのであらうか。

古今六帖一に「雪」といふ題の下に、同じ歌が出てゐる。

「かのこまだら」 鹿の毛色の斑点で、茶褐色に白い點の散在してゐるものをいふ。

【こゝにたとへば】 こゝ(京都)にあるものにととへていへば。こゝでいへば。

【比叡の山】 ヒエのヤマ (一二三頁「比叡」の項を見よ)

【二十】 ハタチ (一)十の二倍。(二)二十の年齢。二十歳。

【形】 ナリ (一)なりたるさま。物の形。さまかたち。形状。(二)からだつき。身なり。服装。こゝは(一)。

【鹽尻】 シホジリ 鹽をつくる爲に海砂を山形にもり、それに海水をかけては乾かすもの。

【隅田川】 スミダガハ 古くは墨田川・角田川・住田川とも書いた。今は荒川の下流で、東京市の東方を流れて東京灣に入る。

古くは利根川の下流で水利も多く、武藏と下總との國境をなす川であつた。今も兩國橋の名があるのはこれが爲である。當時は今と異なり、利根川は埼玉・足立、兩郡の東境を南流し、荒川・入間川を併せて隅田川と

なつた。隅田川は崖岸が廣遠で橋を造ることが出来ず、渡舟によつて通行人の便を計つてゐた。堯惠法師の北國紀行に「利根・入間二川落ち合へる所にかの古き渡あり」と見え、今の荒川は昔の入間川であり、渡

の場所も示されてゐる。當時荒川は入間川と別であつたが流路を變じて入間川に合し、遂にその名を奪つたのである。後に利根川も亦流路を變じ、渡良瀬川の下

流太日川(今の江戸川)に合し、更に東流して常陸川(今の利根川本流)に合するに及び、隅田川は荒川と入間川との合流の川末となり、武藏の國境も亦東漸し、僅かに兩國橋の名のみを留めるに至つた。

【思ひやれば】 遠く都の方を思ふと。

【おもひやる】 (一)思ひをやる。氣をはらす。心をやる。(二)遠く思ふ。思ひをはす。こゝは(一)。

【わびあへるに】

【わぶ】 (一)思ひわづらふ。思ひなやむ。當惑する。(二)慰む方なくて心細く思ふ。たよりなく思ふ。はか

なむ。(三)さびしく思ふ。さびしく暮す。(四)こまる。つらく思ふ。迷惑に思ふ。(五)見すばらしくある。貧

しげである。(六)容易くなし得ない。わづらふ。もてあつかふ。(七)閑寂を楽しむ。こゝは(一)。

【渡守】 ワタシモリ 渡しを守る人。轉じて、渡舟を漕ぐ人。渡舟の船頭。

【ものわびしくて】 何となく淋しくて。

【もの】 形容詞・名詞・動詞に添へて何となくさうである意を示す。

【わびし】 「わぶ」から轉じたものであらう。意味は

「わぶ」に準ずる。類例―「荒ぶ・荒び・さびし」「戀ふ・戀ひ・こひし」

【京に思ふ人なきにしもあらず】 (身をえうなきもの)にして都を出て來たとはいへ(都に思ひ残してゐる人がない)でもない。

【さる折しも】 そのやうな折柄。こゝでは、京の方をなつかしく思つてゐる折から。

【さる】 「然ある」の約。「ある」「いはゆる」と同種類の語。(一)その如くにてある。そのやうな。(二)然るべき。その値うちある。(三)或。某の。某。

【折しも】 その時に當つて。をりから。ちやうど。折も折。

【嘴】 ハシ くちばし。

【鳴】 シギ 鶺鴒の轉で、羽音繁き意といはれる。鶺鴒とも書く。(鳴は國字で、田の鳥を意味するといふ。) 鶺鴒、鶺鴒科に屬する大部分の鳥の總稱。中・小形の涉禽で、羽色は一般に地味。嘴は多くは細長く真直であるが、彎曲するものもある。翼は長くて長途の飛行に堪へ、又性質が敏捷で飛翔も迅速である。概して沼澤等の濕地に棲息し、春秋の渡りの時我が國を通過する。種類は極めて多いが、普通「しぎ」類と「たしぎ」類とに大別される。併し我が國で昔から「しぎ」と呼ばれるのは主に後者であり、たしぎ類に「鳴」を、他のしぎには「鶺」を當てて區別する人もある。

たしぎ類は主に水田や澤等に棲み、肉が美味で最良の獵鳥とされてゐる。頭は角形で眼が後方に位し、嘴は極めて長く眞直で且柔軟である。地色は背面は黒褐・赤褐等、腹面は白色で、これに黄褐・赤褐・黒褐・白等の斑紋が散布してをり、眼を過つて黒・褐等の斑條がある。たしぎ・やましぎ・おほちしぎ・たましぎ・あをしぎ等がこれに屬する。我が國內地には秋飛來して春去り、古來各地に普通である。

【これなむ都鳥】これが有名な都鳥です。

〔なむ〕文中にあつて「ぞ」よりも稍婉曲に物事を指示する助詞。文末の活用言は連體形で結ぶ定めであるが、その活用言は往々省略せられる。

【名にしおはばの歌】都といふ名をもつてゐるのならば、都の事はよく知つてゐようから、お前に物を尋ねよう。都鳥よ、私のいとしく思つてゐる都の人は健在でゐるかどうか。

古今集、羈旅歌に在原業平朝臣として、次の詞書と共に

に同じ歌が出てゐる。

武藏の國と下總の國との中にあるすみだ河の邊に到りて都のいと戀しうおぼえければ、暫し河の邊におりて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなと思ひわびてながめ居るに、渡守、はや舟に乗れ、日も暮れぬといひければ、舟に乗りて渡らむとするに、皆人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず、さる折に白き鳥の嘴と脚と赤き、河のほとりに遊びけり、京には見えぬ鳥なりければ、皆人見知らず、渡守にこれは何鳥ぞと問ひければ、これなむ都鳥といひけるを聞きてよめる

〔名にしおふ〕「名におふ」に同じ。

〔し〕は強めの助詞。(一)名として負ひもつ。名のる。

(二)名高い。有名である。こゝは(一)。

〔こと問ふ〕(一)物いひかける。いふ。語る。(二)問ふ。聞く。たづねる。(三)訪ふ。おとづれる。とぶらふ。こゝは(二)。

【舟こそりて】舟の人が悉く。舟中の人が残らず。

【惟喬親王】コレタカノミコ 文徳天皇第一皇子。

御母は名虎の女更衣紀靜子。文徳天皇には四皇子がゐらせられ、第四皇子惟仁親王は藤原良房の女明子の御腹であつた。天皇の御心には惟喬親王を皇太子にたてようと思し召されたが、良房の權威を憚り給ひ、未だ決定されなかつた。天安元年惟喬親王は特に勅して帶劍を聽し、四品を授けられたが、同二年天皇の崩御後、良房はかねての志により惟喬親王を退け、女の御腹なる惟仁親王を皇位に即け奉つた(清和天皇)。そして惟喬親王は貶せられ太宰帥とならせ給ひ、彈正尹・常陸太守・上野太守に遷らせられ、貞觀十四年の秋剃髪し給うた。十六年封百戸を増賜の時表を上つて辭せられたが許され給はなかつた。寛平九年(一五五七)二月、不遇の中に薨せられた。御壽五十四。官を辭して後、山崎の傍なる小野里に住まはれたので小野宮と申し、又水無瀬宮・木原親王とも申し奉る。(作者参照)

【皇子】ミコ (一)天皇の御男子。天皇の御子孫。(二)親

王に同じ。こゝは(一)。

【山崎】ヤマザキ (一二五頁を見よ)

「山崎のあなたに」といつたのは、山崎は淀川の舟のつく所で、西の國に行く人をもこゝまでおくつたりなとして、名高かつたから、とり出していつたのである。日本後紀卷七に、山崎津・難波津とならべしるされてゐるのでも大津だつたことはわかる。

【水無瀬】ミナセ 現大阪府三島郡島本村廣瀬の古稱。

山城の大山崎村と接し、兩者を通じて俗に山崎驛といふ。東は淀川を隔てて男山に對し、西北には山嶺を控へ、水無瀬川はこゝに至つて淀川に合する。惟喬親王の宮址は明らかでない。

【宮】ミヤ (一)皇宮。禁裏。御所。(二)伊勢の大廟、その他特別の神を祀る神社の稱。(三)皇后・中宮・皇子・皇女並びに皇族の御殿。(四)皇族家、特に親王家の稱號。こゝは(三)。

【右のうまのかみ】右馬頭。右馬寮の長官。こゝは在原業

平をさす。

業平は貞觀年間に右馬頭になつてゐた。

【率て】 幸て 引きつれて。伴なつて。ひきゐて。

【狩は懇にもせで】 花盛の折故鷹狩を本氣にしないで。

【狩】 カリ 鷹狩のこと。

宣長は、こゝに狩に來たともなく急に狩とあるのは櫻がりの意味で櫻を見あるくことであらうといつてゐるが、これに對して新釋は次の如く評してゐる。

こゝに狩の事をゆくりなくいひ出でたるやうなるは、みなせ、交野は名だかき御狩ばなれば、みこの宮のこゝにあるも狩におはするためなるべく、年ごとの櫻の花ざかりにおはしますも狩のついでに花を見給ふことにて、こゝにおはしますは鷹狩し給ふにけれたる事ゆゑに、上に狩の事をいはざる也。ゆくりなくいひ出でたるにはあらず。所がら也。

【懇】 ネモゴロ (一)眞心を以てすること。手厚いこと。懇切なこと。(二)互にしたしみ合ふこと。昵懇。こゝは(一)。

【大和歌】 ヤマトウタ 我が國固有の歌。「からうた」に對しての稱。和歌。

【かゝれり】

【かゝる】 とりかゝる。著手する。

【交野】 カタノ 片野とも書いた。現大阪府北河内郡枚方町・山田村・牧野村・川越村に互る平野。

この地を天之川・穂谷川・舟橋川の三水が並行して貫流し、淀川に注ぎ、川沿ひの丘陵の邊は古く遊獵地で鳥立原・百重原・渚岡原等の稱がある。

桓武天皇延暦二年行幸、御遊獵があり、爾後禁野となつた。

【渚の院】 ナギサのキン 現大阪府北河内郡牧野村渚に在つた。この地の西雲寺を院址といふ。

古意には次の如くある。

こは水生みなせより河内國の交野に到りて狩し給ふ也、こゝは天皇の御狩場なれど、未だ其頃には禁ぜざりしか、又一の皇子なれば心にまかせて遊び給ふか。さて其所の渚の院はたびた

び御狩ある故に離宮めきたる院のありしにやこの親王のは既に水生にあれば又はあらかし。

又、土佐日記の二月九日の條に、

斯て船引上るに渚の院といふ所を見つゝ行く。その院、昔を思ひやりて見ればおもしろかりける所なり。云々

【挿頭】 カザシ 「かみさし」の略。昔草木の花や枝を髪に挿したるもの。

【世の中の歌】 世の中に全く櫻といふものがなかつたなら、春の人の心はどんなにのんびりしたものであらう。雨につけても風につけても、思ひ浮かばれるのは櫻である。櫻の花ゆゑに雨につけ風につけて人の心を惱ませることであるよ、と櫻に對する愛情を裏面から歌つたものである。

古今集、春上に「渚の院にて櫻を見てよめる 在原業平朝臣」として同じ歌がある。

【たえて】 更々に。一向に。一圓に。少しも。

【散ればこそその歌】 散るからこそ櫻の花はますく結構で

ある、憂い無常なこの世で何物が久しい事があらうか。

古今集、春下に「題しらす、讀人しらす」として「残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ」とある。

【いとど】 「最々」の約。彌々。甚だしく。いよゝ。ますます。

【めでたし】 (一)愛すべきさまである。賞すべきである。(二)うつくしい。結構である。(三)祝ふべきである。(四)人に欺かれ、又はのせられ易い性質である。こゝは(一)。

【うき世】 憂きことの多く、はかない人生。こゝでは「憂世」と「浮世」とを兼ねてゐる。

【憂世】 一世の中を憂きことの多いのにつけていふ語。【浮世】 一世の中をはかないものとみなしていふ語。(二)轉じて、當世。

【その木の下は】 そのキノモトは

【まうで】

【まうづ】「まわいづ」の音便。(一)「至る」「来る」の謙語。参る。参上する。(二)参詣する。こゝは(一)。

【まつりける】

【まつる】 動詞に添へて敬意を表す。

【おもひの外に】 案外に。

親王は文徳天皇の第一皇子でゐらせられながら、遂に太子にもお立ちにならず、まだ若い御身で御出家遊ばされたのをいつたのであらう。

【御髪おろさせ給ひて】 剃髪なされて。僧におなりになつて。

三代實録に「貞觀十四年七月四品彈正尹惟喬親王寢疾。頓出家爲沙門」廿九歳とある。

【御髪】 ミグシ 「髪」の敬語。

【小野】 ヲノ 現京都市左京區小野町。比叡の西麓。

惟喬親王の小野宮址は明らかでない。

【正月】 ムツキ 睦月。端月たしげ。初春。

【拜み奉らむ】 ヲガミタテマツらむ

【拜み奉る】 こゝは御機嫌を伺ふ、又は御目にかゝる意。

【しひて】 押して。

雪がたかくてあゆみかねたけれど、志が深いから強ひてあゆんで御室に参上したのである。

【御室】 ミムロ (一)御住所。(二)神を安置する室、即ち神社。こゝは(一)で、親王の御庵室をいふ。

【つれづれと】 (一)つくづくと物を思ひつゞけるさま。

(二)なすこともなくものさびしいさま。こゝは(一)。

【侍ひて】 サブラひて

【侍ふ】 「さもらふ」に同じ。「さ」は接頭語。「もらふ」は「守る」の延言。(一)伺候する。はんべる。(二)

「あり」の謙語。はべる。(三)他の語に添へて丁寧の意を表す。こゝは(一)。

【古へのこと】 水無瀬・交野の狩のことなどであらう。

【聞えけり】 申し上げた。

【聞ゆ】 (一)「言ふ」の敬語。申し上げる。(二)奉る。

まわらす。こゝは(一)。

【さても侍ひてしがな】 そのまゝ伺候してゐたい。

【さても】 「さて」に感動助詞「も」の添はつたもの。

(一)然ありて。そのまゝで。(二)さるほどに。かくて。

こゝは(一)。

【がな】 希望の助詞。

【おほやけ事】 公事。(一)公に仕へること。政治。公務。

(二)宮廷の儀式・節會等の稱。(三)定まつた一通りの形式。官府むきの一通りの形式。こゝは(二)。

正月だから公事が繁いのである。

【え侍はで】 伺候してゐることが出来ないで。

【忘れてはの歌】 皇太子にも立ち給ふべきであつた親王のかういふ山里につれづれとおはす御有様を見奉つて、忘れては夢ではないかとさへ思ふ。この山里に雪を踏み分

二 解釋

1 主題 在原業平の事蹟として知られてゐる著明な話二つ。

2 構想

七都鳥

けてお尋ね申し上げようとは豫想しなかつたの意。

古今集、雑下には「在原業平朝臣」として次の詞書と共に出てゐるが、この物語ではその場で詠んだことにして心持を深めてゐる。

惟喬のみこのもとにまかり通ひけるを頭おろして小野と云所に侍りけるに、正月にとむらはんとてまかりたりけるに、ひえの山の麓なれば雪いと深かりけり。しひてかのみむろにまかりいたりて拜みけるに、つれづれとしていと物かなしくて、かへりまうてきてよみておくりける

挿圖「八橋」(尾形光琳筆) 本文の第二節に因んだ光琳筆「伊勢物語圖」(紙本著色)を帝國美術院附屬美術研究所原版から複寫したもので、傳光琳作「八橋時繪硯箱」と共に有名な作である。(原圖は東京帝室博物館藏)

(1) 東下り(初—六三ノ七)。

イ 住むべき國をもとめて。

ロ 八橋。

ハ 宇津の山。

ニ 富士の山。

ホ 隅田川。

(2) 惟喬親王に侍ひて(六三ノ八—終)。

イ 水無瀬の宮。

ロ 小野の宮。

3 敘述

〔昔、男ありけり〕——業平を中心とした歌物語の集められたのが伊勢物語であるといふ立場からすれば、「男」は業平をさすこといふまでもない。がそれを業平とせず、又その時を何時とも確言せず、漠然と「昔」といひ、「男」といつてゐるところに、物語的態度が示現してゐる。又「ありけり」の「けり」は冒頭の一節四章句のすべてに於て、その章末に反復せられてゐる所であり、特に以下の章末は三つとも「行きけり」であつて、すべて句切の短いのと相俟つて簡古な味を醸成してゐる。

〔からころもの歌〕——當時の機智的・遊戯的な作歌の傾向が窺はれる。そしてさういふ折句としての單なる技巧の底に、當時の旅行者としての實感が動いてゐて、眞實味を出し得てゐる。

〔みな人餉の上に涙落してほとびにけり〕——歌をきいて一行の人々が皆涙を落したといふやうなことは如何に當時の旅とはいへ、誇張があるに相違ない。況や「餉の上に」落し、その餉がほとびたといふに至つては、誇張のつもりで誇張してゐることは明らかである。こゝに土佐日記やその他の作品と共通な意義が認められた。即ち平安朝の人士は、悲哀や不安をいふにも、尙且その表現に於ては機智を弄し、洒落を用ゐてゐる。そしてそこに、都會人らしい、また有閑生活を送つてゐる人々らしい、知性の誇が現れてゐる。これもその一例には相違ない。併しそこには後代のそれとは異なつて牧歌的な美が認められる。

〔京にその人のもとにとて、文書きてつく〕——當時の社會生活がまざく／＼と感ぜられる一節である。そして原始的な形態の共同生活の實相が人間生活を興趣深くせしめてゐる。現代はかういふすべてを制度と設備で満たしてゐる。それで事務的には便宜を得られるやうになつたが、人情的には遙に共同意識が薄らいで來てゐることが考へさせられる。

〔駿河なるの歌〕——切々たる思郷の情が具體的な焦點を得て表現せられてゐる。

〔時しらぬの歌〕——「時しらぬ山はふじの嶺」といきなり感情を投げ出して置いて、「いつとてか」と咎め、「かのこまだらに」と状態を敘し、「雪の降るらむ」と疑つて驚歎してゐるのであつて、そこに意識の躍動のひた／＼と實感せられるものがある。

〔なほ行き／＼て〕——最初に「行きけり」を三つ繰返して始められたこの段が、「行き／＼て」(六一ノ四)になり、更に「なほ行き／＼て」になつてゐるのである。この三つの「行き」を見通すことによつて、この文の筋の運びが明確になるであらう。

〔かぎりなく遠くも來にけるかな〕——隅田川に來ると、そこを渡る前に、その邊にむれゐて思ひやるといふことが既に

當時の都の人の旅愁を示し、郷愁を語る事實である。それが「皆人もわびしくて」と寂しがり、「京に思ふ人なきにしもあらず」と懐しみ、「かぎりなく遠くも」と歎かせるのである。一語一句に旅のわびしさが泌み出てゐる。

〔名にしおはばの歌〕——一つ山を越える度に、また一つ川を渡る毎に、都から離れてゆく寂しさを思はざるを得ないのが當時の旅である。しかも今渡らうとしてゐるのは國境の川であり、時は夕暮である。いつもにもまして都が戀しく、親しい人が懐かしまれたであらうことが思ひやられる。しかるにこの歌に詞書ほど感情が泌み出てゐないのは都鳥といふ名によつて作歌の動機が成立した歌である爲であらう。たゞ古代の歌だけに、粉飾のほひのない所はとるべきであらう。

〔世の中の歌〕——櫻花に對する愛惜の深さを、却つて春の長閑けさを奪ふものとして表した所に、意表に出た思ひつきがある。尙、親王の御身の上を慨く寓意があるものと考へさせられる。そして歌が歌であることよりも、歌が物語の一部分をなし來つてゐることが明らかに認められる。

〔散ればこそこの歌〕——何人の作であるにしても、さきの歌に對する返歌としての意識から成立したものであらう。しかしこの歌に至つては、櫻をよんだ歌としては感じられないで、全く寓意の歌として感じられる程に理智的で、感情のゆらぎが乏しい。惟喬親王御出家の事實に關聯して考へられるのもその所以である。

〔忘れてはの歌〕——「忘れては夢かと思ふ」は眞實感のじみ出た、しかも手際のいゝ句である。殊に結句の「とは」と間接ではあるがよく呼應を保つて、全體の統一を力あらしめてゐる。惟喬親王と在原業平との話を心に置いて讀むと一層よく理解せられる。

三 批評

伊勢物語はまた在五中將日記と呼ばれるほど、在原業平の事蹟を傳へ、その作歌の多くを中心に置いてゐる作であるが、本文に採られた東下りと惟喬親王とのことはわけてもその著しい事蹟として傳へられてゐる。隨つて解釋に於ては「昔、男ありけり」の「男」や「右のうまのかみなりける人」を在原業平とすることによつて相互に關聯がつき、性格の一貫が一層よく迎られる。

尙、歌物語の代表作としての面目と、物語の原始的形態ともいふべき簡古愛すべき表現とは本文によつてもその一斑が理解せられるであらう。

更に各篇の中心をなす和歌の部分と、地の文をなしてゐる物語の部分とが、眞に渾融し、響應してゐる趣致は他に類例がない。この點に著目すれば、この物語の詩的色彩は一層豊潤を加へて來るであらう。

三 備考

一 指導の問題

(一) 歌を中心とし、歌の詞書を延長した物語の添はつたものが伊勢の形態的特質である。あらゆる文學形態が和歌から發展してゐるといはれてゐる日本文學に於ては、本書は和歌から物語への展開過程を跡づけるべき重要な作品である。この點に於て、歌がその篇の中心的位置を確立してゐるものと、物語が歌をひきすつてゐると思はれるものとの吟味は解釋上重要な意義を有してゐる。のみならず、伊勢の地の文をなしてゐる物語の部分は、そのまゝに詩的表現をなし、これが和歌の部分と相俟つて一種の諧調美を構成してゐる。これを味ははせることが本課指導の上に肝要と思はれる。

(二) 文學形態に著眼すれば敍上の如く竹取物語と異なつた性質を發揮してゐる伊勢物語であるが、その表現の簡古稚拙に於て、また態度が機智を用ゐ、言葉の洒落を弄ぼうとしてゐる點に於ては同じく平安朝初期の作品たる通有性を有するであらう。かういふ點も要核だけは把握させることが必要であらう。

特に口から耳への文學であつた上世文學と時間的に近いだけに、讀む物語ではあるが、文字的であるよりも言語的である。随つて音讀によつてその言語美が表現せられるまで讀みの習熟をさせることが重大な任務でなければならぬ。この點は教室以外の作業として、生徒各自にさういふ學習作業の妙趣を把握させたいものと思はれる。

二 參考資料

(一) 平安朝初期の代表作品としての竹取物語と伊勢物語の特質に關する五十嵐氏の所論を新國文學史から左に引用する。

散文の方では、此の期の末に『竹取物語』『伊勢物語』が現はれた。『竹取物語』に對しては、はかなき物語で、骨子は性誕無稽、趣向は平板、人物の性格も更に出來て居らぬなど云つて、一掃し去る文學史家もあるけれども、吾等は『竹取物語』を以て、筋のある小説の魁をなした點から見ても、漁色に放心した當時の遊冶郎たはれに對する諷刺と見ても、穢土の下界を厭離し蔑視して天上の高きに憧る理想を歌つたものとしても、象徴的に肉戀を實行した事フタニツクコトを寫したものと見ても、立派な品位と深き意義とを兼ね備へた滑稽物として、物語小説の源頭を飾つた點から見ても、理想的なると共に一面當時の寫實なる點から見ても、印度の神話を換骨した點から見ても、文章が簡潔で力のある點から見ても、誇るに足る作であると思ふ。

『伊勢物語』は作者はわからぬが、大體、業平が多くの女に戯れた戀愛生活の中、興味あるスケッチを寄せ集めたものと見られる。從來多く歌人の參考とし、人情の教訓書とし、簡勁にして美はしき文章の手法として重んぜられて來たが、櫛の齒式小説の鼻祖としても、大いに面白いものである。西鶴に興味を見出だすものは『伊勢物語』を閉却することが出來ぬ。我が小説の源頭に組織脚色のあ

る『竹取物語』と相並んで、無組織、無趣向なる、断片的なる、拵はぬ、感じた所だけを書いて餘計な添加や、繋ぎや、穴埋めをしない、大分近代的な一種の小説、『伊勢物語』の現はれたのは非常に面白い現象である。

(二) 伊勢物語の註釋書の主なるものは左の如くである。

- 北村季吟 伊勢物語拾穂抄 五卷
- 釋 契 沖 勢語臆斷 五卷
- 賀茂眞淵 伊勢物語古意 六卷
- 藤井高尙 伊勢物語新釋 六卷
- 佐々木弘綱 伊勢物語俚言解 二卷
- 今泉定介 伊勢物語講義
- 小林榮子 伊勢物語活釋

八 宇多の松原

紀 貫 之

一 解 題

一 本文

土佐日記のうちから、出發・途中・京入りの主要な部分を抄出したものである。

土佐日記の土佐は土左とも書かれ(前田侯爵家所藏定家自筆本)、又「貫之が記」とも呼ばれた。紀貫之が土佐守としての任期をへ、承平四年(一五九四)十二月二十一日出發以來、翌五年二月十六日京に歸るまでの日記體の紀行であつて、海路の不安と亡兒追懷の悲とが中心になつて、經路の自然や人情の種々相が軽いユーモアを交へて表現せられてゐる。

古來、平安朝初期に於ける假名文による文學作品の一として、また假名文による日記・紀行の最初の作品として注目せられてゐる。

二 作者

紀貫之。平安朝の初期和歌隆興期に出た歌人・評論家で、父は紀望行(望之)。時文及び一女の二子があつて、天慶九年(一六〇六)に八十六歳(?)で歿した。寛平の御代既に宮中歌合の一歌人として列してゐるが、延喜五年には勅撰集撰進の詔により、紀友則・凡河内躬恆・壬生忠岑等と共に古今和歌集二十巻を撰し、序を附して奏上し、自作の和歌を入ること百一首の多きに上つてゐる。次いで同七年には大井川御幸に供奉し、九題九首の歌を奉り且その序を書いた。又土佐

守在任中にも新撰和歌の編纂に當り、歸京後に土佐日記を補修した。著作は以上の外に、後撰集・拾遺集・新勅撰集等の勅撰歌集に歌を載せられ、家集として貫之集がある。彼は歌人といふよりもむしろ學者で、情熱や感覺よりも知識と思索に長じてゐた。随つてその歌は多く理に勝つた作で、直觀の鋭さや溢れるやうな熱情は認めがたい。土佐日記を通じて見ると、愛兒の死を悲しみながらそれが觀念的で、實感の描寫がない。

官位は御書所みよとごのあづかり預より越前權少掾・内膳典膳・少内記・大内記・加賀介・美濃介・大監物・右京亮・土佐守・玄蕃頭・木工權頭に歴任し、從四位下に至つたのみである。併し彼の和歌史の上に遺した足跡は相當に大きい。のみならず古今集の序が文學評論の先驅であり、土佐日記が和文の日記・紀行の魁であつた點に於て、獨創に乏しかつたとはいへ、文學史上の功績は著しいものがある。

三 採擇の趣旨

竹取・伊勢につぐ平安朝初期作品の一例として、また日記・紀行の最初の作品としてこゝに採り載せた。日記・紀行形態の文學作品として文藝的教材であると共に、國文學史概説の資料として、文化的教材でもあらしめたい。

二 教材としての研究

一 註 解

【宇多の松原】 ウダのマツバラ

これについては山田博士が「文學」(昭和十年一月號)に「これも地理辨に他説・自説をあげて香美郡の赤岡から岸本

の間の海濱の松原であらうといふが、これが大體穩かな説であらうと私も思ふけれど、積極的の證據といふものが一つも無いのである。土佐の海岸は古來變動の

少くないことは著しい事である。恐らくはそれらの變動の爲に、地名も残らなくなつたものであらう」といつてゐる。赤岡も岸本も現在町である。

【男もすといふ日記云々】 男の人の書くといふ日記を女の私も書いて見ようと思つて書くのである。

作者は當時女文字といはれた假名文で書く爲に、假りに女人に擬して書かうとしてゐるのである。

【す】 ある動作・作用を漠然と表す動詞。

直ぐ下の「し」「する」もこの「す」の變化である。

【日記】 ニキ 日々の出来事・感想・體驗などを日次を逐うて筆録するもので、これに公的なものと私的なものがある。公的なものには官廷の日記と、官廳の日記との二種があり、私的なものには漢文で書かれた廷臣の家記と、假名で書かれた文學的日記との二種がある。

【その年】 某の年。

こゝでは朱雀天皇の承平四年（一五九四）。香川景樹

の説に従へば、貫之はこの時七十三四歳である。

【十二月の二十日あまり一日の日】 シハスのハツカあまりヒトヒのヒ 十二月二十一日。

【十二月】 シハス 師走。極月。臘月。藪月。窮月。

【一日の日】 何日の日といふのと同じ言ひ方である。

【戌の時】 イヌのトキ 宵五つ時。今の午後八時。

天智天皇の十年新天文臺に漏刻（水時計）を置き、鼓や鐘を打つて一般に時を知らせた。一晝夜を分けて十二辰刻とし、打鼓の数は夜半に九つ、一刻を経る毎に一つを減じて八つ、七つ、六つ、五つ、四つとなり、正午には再び九つに戻つて同じことを繰返して四つに至つた。同時に時と方位とを結びつけて、夜半前後を子の刻、午前二時前後を丑の刻、午前四時前後を寅の刻と稱し、以下これに準じた。長慶宣明曆採用（貞觀三年）以後王朝時代に於ては、一晝夜を四十八刻或は五十刻に分ち、隨つて一辰刻は四刻或は四刻六分の一に當り、子の初刻・丑の初刻・寅の初刻等には、それ

ぞれ九つ、八つ、七つと鼓を打ち、各辰刻間には一、二、三、四とその刻數だけ鐘を打つたと傳へられる。

【門出】 カドデ 我が家の門を出でて、旅或は戦などに行くこと。旅立。出立。

【その由】 その次第。

【由】 (一) 由来。いはれ。(二) 由るべ。因縁。(三) 手段。口實。(四) うはべの様子。形式。(五) 旨。儀。次第。

【物に書きつく】 日記に書きつける。

【物】 感じてはゐながら、まだ知識的には明確になつてゐない對象をいふ。また既に知識の對象になつてゐても、わざとそれをぼかしていひ、それによつて品位あらしめようとする場合に用ゐられる。

【或人】 貫之自身をかく第三人稱にしたのである。

【縣の四年五年はてて】 縣に於ける國司の任期が満ちて。

【縣】 アガタ (一) 上代に於ける皇室の御料地。(二) 縣主の支配地。(三) 地方官の任國。(四) 轉じて、任國

の官人の稱。(五) 田舎。地方。こゝは(三)。

【四年五年はてて】 ヨトセイツトセはてて 延長八年貫之が國司に任ぜられてから、承平四年その任の果てるまで満四年、足かけ五年となる。當時の國司の任期については、日本紀略に「弘仁六年七月、諸國司遷替以四年爲限」とある。

【はつ】 (一) 極みに至る。をはる。つきる。(二) 死ぬ。こゝは(一)。

【例の事ども】

後任國司への事務引継ぎ等の上で例になつてゐるさまさまの事柄であらう。

【解由】 ゲユ 解由狀の略。

「解由狀」とは、王朝時代、中央並びに地方の官人が解任・交替する際に、前任者の在任中、公事の雜意即ち無責任のなかつたことを證記して、新任者から前任者に與へる文書。前任者はこれを太政官に進り、以て在任中その責を盡くしたことを證示するのである。而し

て若し前任者に雜念があれば、新任者は解由状を與へることが出来ない事情を録した不與解由状を與へるの

土佐國司解 申與前司解由事
 守正五位下
 右去年月日任、同年同月日官符、同年同月日著任、同年月日得替解任、爰依無雜念、與解由、付某名前也、申上如件、謹解
 長元元年五月五日 正六位上行少目
 從五位上行守 正六位上行掾
 從五位下行介 正六位上行掾

因幡國司解 申進上不與前司解由狀事
 合壹卷
 右不與前司守正五位下行侍從藤原朝臣宗成、解由狀、限内勘録、附脚力秦成安進上如件、謹解
 元永三年十一月九日
 從六位上行少目秦宿禰
 守從五位下藤原朝臣時通
 正六位上行大掾田口朝臣
 正六位上行大掾紀朝臣

である。これには前任者・新任者ともに署名して、脚力を以て太政官に進ることになつてゐた。解由状の史に見えてゐるのは、地方官たる國司の解由が主で、その書式は延喜式に見えてゐる。上に掲げたのは朝野群載の例である。

【とりて】 後任者から受取つて。

【住む館】 スむタチ 國司の官舎。

紀氏の遺跡については、紀氏舊蹟記に「土州官府の跡は長岡郡日吉村ひえ（今の長岡郡國府村比江）にあり、高知城を東に去る二里餘、官府の跡より東一町餘を御門の前といひ、寅卯の方二町餘に舊礎あり。東の方四町ばかりに貫之觀月松、南の方三町ばかりに寶塔寺跡、公廨屋敷の跡、西南の方十町ばかりに國分寺あり。北に日吉山、その半腹に日吉社あり云々」とある。「官府の跡」は俗に内裏屋敷と稱し、現今は中央が纔かに小土隴として残つてゐる外は、殆ど一面の水田となつてゐる。「御門の前」は官府の門の跡で、舊礎は長さ

九尺六寸、幅六尺四寸、柱穴の徑二尺餘寸、その中にまた徑四寸、深さ三寸ばかりの小穴がある。

【船に乗るべき所】

季吟は抄に、國府の館を出て、舟に乗るべきたよりのよい家にまづ移つたのだといつてゐるが、後に一月三十日の條には「けふ舟にのりし日よりかぞふれば、みそかあまりこゝぬかになりけり」とあつて、これは十二月二十一日からかぞへてのことであるから、この日直ちに船に宿つたものとする創見や解の説に従つてよいであらう。

【べき】 さういふことになつてゐるの意。當然。

【かれこれ】 彼此 誰も彼も。

【よく具しつる人々】 近く召使つてゐた人達。

【よく】 (一)手おちなく。ねんごろに。十分に。(二)上手に。たくみに。(三)少しの違もなく。丁度。(四)やゝもすれば。(五)困難なことに堪へて。(六)他人の悪行を見ていふ語。よくもまあ。こゝは(一)(五)な

どの意で、「具するのが常であつた」位の意。

【具す】 伴なふ。引連れる。

【とかくしつゝ】 何やかやしながら。あちこちしながら。

【のゝしる】 (一)聲高にいひ騒ぐ。喧しくいひ立てる。

(二)ほめはやす。盛に噂する。(三)聲高く悪口し、又は叱りつける。どなる。しかる。いやしめていふ。けなす。

こゝは(一)。

【和泉の國まで平かにと願ひ立つ】 和泉の國までの海路の平安を祈つた。

【藤原言實】 フヂハラノトキサネ 國司の屬官であらう。傳未詳。

考證に「父祖しるべからず土佐の國人なるべし」とある。

【船路なれど馬のはなむけす】 陸の旅ではなく船路の旅ではあるが馬のはなむけ(送別の宴)をした。

【馬のはなむけ】 「はなむけ」に同じ。餞別。こゝでは送別の宴である。

旅立つ人の馬の鼻をその行先の方へむけてやつて無事を祈つたので、「うまのはなむけ」といふ語が出来たが、後にはこの語は單に「送別の宴」「餞別」の意となつた。

こゝで「船路なれど」といふのは、馬は陸のもので、船旅に「馬のはなむけ」とは面白いとたはむれたのである。

【酔ひあきていとあやしく】 酔つてしまつて平生のやうではなくなつて。

【あく】 飽く

【潮海のほとりにてあされあへり】 しほ(鹽)は魚肉のあざ(餞)るのを防ぐものであるのに、人々はその潮海(しほ)のほとりであざ(戯)れあつた。

【あさる】 (一) 餞る・餞る 腐る(魚肉にいふ)。(二) 戯る たはむれる。ふざける。される。

こゝは「戯る」を「餞る」にかけ、「潮海」を「鹽」に通はせて、海邊で酔態を演じたことを洒落れていつた。

【八木康教】 ヤギノヤスノリ 傳未詳。(次項参照)

【この人、云々】

創見に「この人國にありては身がら重き人にて、かりそめの課役などにならず召出でて、つかふつらの人にもあらざる也といふ。されば餞のさまもさすがに禮をつくして昨日などの打とけてあざれし類にはあらぬを、是ぞ正しきやうにてといへる也」とある。

【守がらにやあらむ、云々】

この解釋には二説があつて、(一)は創見に「さて之は國守のをさめ正しきからにやあらむと記者の譽るになしてほこりていへり。されば『かみがらにやあらむ』は『心あるものは』といふにかゝるなり」とあるものであり、(二)は考證に「これは紀氏みづから謙遜のことば也」として、「守がらにやあらむ」を「見えずなるを」にかゝるものとして解するものである。

【守がら】 カミがら 守に相應したること。守が守であるによつておこること。

【がら】 (一) からだ。身體。「大柄」(二) 物事の容子をいふ語。しな。くらむ。「國柄」(三) その容子につれて相應したのをいふ語。「時節がら」(四) 布帛・織模様・染模様などの品質・大小・美醜をいふ語。「地柄」こゝは(三)。

(三)の「がら」は他の「がら」とは性質が異なり、副詞となつて「の故」の意をもつが、こゝの「がら」は助詞「から」(故)の連濁と見るべきかもしれぬ。

【國人の心の常として】 (國司に對する) 地方人の一般的な傾向として。

【國人】 クニビト (一) 土著の人。(二) 國民。人民。

こゝは(一)で國司につかへる人々をさす。

【今はとて見えずなるを】 (國司の任にある間は媚びへつらつた人も、いざ任期が果てると)もうその要はないといつて、送里もせず餞別にも來ないのに。

【心ある者は】 眞實の心のある人は。

【恥ぢずなむ來ける】 薄情な人々のあざけり笑ふのを恥と

せずに来た。

【これは物によりて云々】 これは康教が正式な餞別をしてくれた爲に、物質的な意味から喜んで賞めるのではない。眞實を賞めるのである。

【講師】 コウジ (一) 文武天皇以後、諸國の國分寺に在つて僧・尼を統率し、佛教經典の講説を掌つた僧の職名。

初め國師といつたが、桓武天皇の御代にこれを講師と改めて、國毎に一人を置き、國司と同じく、京都から赴任した。(二) 法會のとき、高座に登つて佛典を講説するもの。こゝは(一)。

【講】 カウ(漢音)・コウ(吳音)

【ありとある】 あらゆる。あるかぎりの。

【酔ひしれて】 酔つて正體なくなつて。

【しる】 痴る 心愚になる。惚ける。

【一文字をだに知らぬ者しが、云々】 一といふ字さへ知らぬ者が、足だけは十文字に踏んで遊ぶ。

【し】 代名詞「し」(其)から出た意味を強める助詞。

その接續關係は極めて自由である。

【大津】 オホツ 現高知縣長岡郡大津村の地。

國府の舊蹟より西南凡そ六軒。當時は湊であつたであらうが今は海岸より四軒も入つた陸地で、昔の状を見る事が出来ない。地理辨には「昔この郷のあたり、浦戸より此方入海廣く曳ておしなべたる潮なりしが、よりよりに潮あせて處々に堤を築き、田地となしけるより、今は大津、鹿兒崎も名のみにて、一平の田面となりしなり、今も大津村の隣に中島、和田、常通寺島、田邊島など名を負へる村々のあるも、もと海際なりしによれるを思ふべきなり。かくて日記に『船にのるべき所へわたる』とあるは、今は大津村の中なる、鹿兒崎の東北にあたりて船戸と稱ふ地あり、之、いにしへは國府より出で、乗船せられし所なりといへり」とある。

【浦戸】 ウラド 今、その場所を明らかにしがたい。(現

在の吾川郡浦戸村とは異なる。)

地理辨に「大船出入の港口なり」とある。

【國にて遽に失せしかば】 土佐の國で急病で亡くなつたので。

【遽に】 ニハカに 解に「急病にてときこゆ」とある。

【いでたちいそぎ】 出發の用意。

【いでたち】 旅路にいでたつこと。門出。旅立。

【いそぎ】 (一)いそぐこと。(二)いそがしく支度をすること。準備。こゝは(二)。

【何事もいはず】 よろこぶべき旅立であるが、女子のことで鬱々として何事も口に出ない。

【悲しむ】

【悲しむ】 「悲しむ」に同じ。

【つとめて】 (一)前夜事があつてその翌朝。明日。(二)曉。早朝。こゝは(一)で、こゝには省略されてゐる八日の記事のつゞきとしていつてゐるのである。

原文八日の記事は次のやうである。

にあつた泊で奈半利川の河口にあつたといふ。

【泊】 (一)船の泊る所。津。港。船著。(二)旅で宿る所。やどり。やどや。(三)泊ること。宿ること。(四)宿直。こゝは(一)。

【國の境のうちとはとて】 國の境界の内はお見送りしませうといつて。

【境】 (一)土地の區劃。境界。(二)物事のわかれめ。

きは。(三)その土地の内。境土。

こゝは(一)とするものと(三)とするものと二説あるが、守部が直路に「こゝに國のさかひと云へるは、土佐一國の界を云ふにあらず。「大湊紀行」に『こゝは長岡郡、國府一郡の内なれば、國の界の内といひ、東はかがみの郡へうつりて、界を異にすれば、かくは云へるなり』とある如し』といつてゐる如く、長岡郡と香美郡との境の意であらう。

【橋季衡】 タチバナノスエヒラ 土佐の國人か。傳未詳。

【長谷部行政】 ハセベノユキマサ 貫之に仕へた人で

八日。さはる事ありて、なほ同じところなり。今宵月は海にぞ入る。これを見て業平の君の、「山の端にげて入れずもあらなん」といふ歌なんおぼゆる。もし海邊にて詠ましかば、「波たちさへて入れずもあらなん」とも詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある人詠めりける。
照る月の流るゝ見れば天の河出づる湊は海にざりけるとや。

【大湊】 オホミナト

山田博士は「文學」(昭和十年一月號)に「これについては種々の説があつて、鹿持雅澄の地理辨に古來の多くの説と自己の考とを載せてあるけれども、積極的に、その大湊が現在の此所であるといふことも、又此所であつたといふことも、今日では如何なる人も斷言し得ないのであつて、地理辨の説が穩かであらうといふに止まる程度のものである」といつてゐる。地理辨の説といふのは、現香美郡前濱村とするものである。

【奈半の泊】 ナハのトマリ 現在の高知縣安藝郡奈半利町

八 宇多の松原

あらうか。傳未詳。

【御館】 ミタチ 國司の官舎。(一九六頁「住む館」の項参照)

【たうびし】

「たうぶ」 「たぶ」の延。給ふ。他人の動作に添へる敬語。こゝでは作者は自分を第三者として書いてゐるから敬語を使つたのである。

【心ざし】 (一)心の向かふこと。心に定めた目的。心に立てた信念。(二)厚意。深切心。(三)志を表して物を贈り又は事を爲すこと。(四)亡者の忌日に香奠返しとして物を贈ること。こゝは(二)。

【これより】 大湊から、の意。

【まに／＼】 まゝに。そのまゝに打ちまかせさるさま。

【舟の人も見えすなりぬ】 陸から舟の人を思ひやつていつた言葉。

【かゝれど】 かやうではあるが。かうではあるが。

【思ひやるの歌】 思ひやる心は海を越えてゆくが、文をやる方法がないので、彼方ではその心知らぬであらう。

がいかに長閑さうに住んでゐる。どうもあの鶴どもはあの松を千歳の友達の如く思つてゐるやうだ。

【うれ】 草木などの末端。梢。うら。

【どち】 (接尾) 同志。つれ。なかま。互に同類などをいふ。

【べらなる】 「べらなり」の連體形で「ぞ」の結。べきやうである。さうなる様子である。「べらなり」は「べし」の語根に接尾語の「ら」が付き、更にそれに「に」と「あり」とが複合して成つた語。古今集時代の語法で、拾遺集以後には殆ど見えない。

【とや】 とかやの義。といふことである。他人のことの如くにぼかしていつたのである。

【この歌は、云々】 歌といふものは大方實際の景色より優れてゐるものであるが、この歌は所の景色より劣つてゐるの意。

【天氣】 テケ 「ていけ」の約。天氣に同じ。

土佐日記、正月二十六日の條には「ていけのことにつ

八 宇多の松原

【文】 手紙。考證には、文に踏をかけてあるといつてゐるが、やゝこじつけのやうに思はれる。

【いくそばく】 「いくそ」「いくばく」に同じ。どれほど。何ほど。數限りなき意にいふ。

【もごとくに】 松の根もとごとくに。

【鶴】 ツル 鶴目、鶴科に屬する涉禽。體大きく頸・脚極めて長く、嘴は強大で眞直。翼は三列風切羽のみ特に長く一見尾と誤られる。たんちやう(狹義の鶴。頭上の皮膚赤く裸出し、頸と風切羽の一部が黒い外は全身純白)。まなづる(主色は灰黒)・なべづる(小形で主色灰黒)等の種類があり沼澤地や海濱の濕地に群棲する。東亞の北方で繁殖し、本邦内地は越冬地で昔時は多數渡來したが、現今では鹿児島縣の一部を除く外跡を絶つた。

【たへずして】 こらへきれずに。

【舟人】 フナビト (一)舟の中の人。船客。(二)舟子。船頭。こゝでは(一)の意で、貫之自身をさしてゐる。

【見わたせばの歌】 宇多の松原を見渡すと、松の梢毎に鶴

けて祈る」とある。

【楫取の心に任せつ】 舟路での行動は天氣模様によつて大部分決定されるものであるが、天氣の如何は楫取が最もよく知つてゐるものであるから、それに天氣の判断を任せ、隨つて舟の行動についての一切を任せてしまつた。

【楫取】 カヂトリ 略して「かとり」、又音便で「かんどり」ともいふ。舟の楫を取つて漕ぐ者。

【男もならはぬは】 男でも、かゝる旅に慣れないものは。

【ねをのみぞ泣く】

「ねをなく」 哭を泣く・音を泣く 聲を立てて泣く。

【のみ】 一あつて二なき意を示し強意に用ゐられる。

【かく思へば】 かう思ふと。さうかと思ふと(それとは異なつて)。

尙、この「ば」は船客の不安な思ひと船頭等の「何とも思へらず」とを對照させて、上文と下文とが對等の關係にあるのを示したものとしてみても解せられる。

【思へらず】 思つてゐない。「思ふ」の已然形に、完了の

助動詞「り」の未然形が付き、更に打消の助動詞「ず」が重つたもの。

「り」の未然形・已然形・命令形は古い形。

【ようさつ方】「ようさりつかた」の略。夜。晩。よさり。ようさり。よさりつかた。ようさりかた。

【山崎】 ヤマザキ 現京都府乙訓郡大山崎村。

乙訓郡の南限に位し、攝津の山崎(今の大坂府三島郡島本村山崎)と隣接する。中世兩者の區別の爲、大山崎莊と稱した。淀川及び西國大道通じ、北に天王山、南に淀川を距てて男山が聳え、京都の南塞に當る。故に平時は運漕の要津をなし、戦時は攘奪の險隘となつた。(二五頁参照) 貫之はこゝに上陸して京に向かつた。

【小櫃の繪】 コビツのエ 創見に「小櫃は今の繪櫃なるべく見ゆ。附註に『或人の云、女兒のもてあそび物に、小櫃に丹青にて繪をかく也。今も京都にて三月上巳、九月九日などわらべもてあそぶ也』といへり」とある。

あるじせぬ所

【必ずしもあるまじきわざなり】 必ずしもしなくてよい行爲である。

【立ちて行きし時よりは、云々】 赴任して行つた時より歸洛の時の方が、人々は何かと好意を見せて語つて来る。

【返りごと】 (一)返事、即ち、返禮・贈物の報。(二)返言、即ち、復命・返辭・返答等の意がある。こゝは(一)。

【夜になして】 夜になるのを待つて。

【桂川】 カツラガハ (二八頁を見よ)

【飛鳥川】 アスカガハ (二八頁「飛鳥」の項を見よ)

【ひさかたの歌】 この桂川の水も、その水底にうつる月の影も昔のまゝで少しも變つてゐないなあといふ意。

【ひさかたの】 (一)「天」の枕詞。(二)轉じて、天空に關係のある「雨」「月」「星」「雲」「夜」などの枕詞。

(三)また轉じて、「日の光」「月の都」などを略して、「光」「都」の枕詞。又、光から轉じて「鏡」にもかゝる。意味については諸説あるが要するに不明である。

八 宇多の松原

【まがりの法螺のかた】 法螺貝の形をした勾餅の恰好。

【まがり】 和名抄「糰餅、形如藤葛者也和名萬加利」延喜式に「勾餅」とある。(七四頁「三重の勾なして」の項参照)

【賣り人の心をぞ云々】 小櫃の繪も、まがりの法螺のかたも變らないが、それを賣つてゐる人達の心は如何であらうか、測り知れぬといふのである。人情の變りやすいのを思ひ合はせてゐるのである。

【とぞいふなる】 こゝも他人のことの如くぼかしていつたのである。

【島坂】 シマサカ 現京都府乙訓郡向日町。

名勝志「島坂、土人云、向日明神南、町端、石塔寺南有_二小坂_一此所也」

【人あるじしたり】 或人が饗應をした。
【あるじ】 主人設けの略。饗應。馳走。ふるまひ。主人が奔走して食料を求め、酒饌を設けて客を迎へること。名義抄「饗、あるじ」枕草子「方違に行きたるに

【月に生ひたる】 桂は月の中に生えるといふことから、「月に生ひたる」を「桂」の序詞とした。

【天雲の歌】 土佐の國からは天雲の如くはるかに思はれたこの桂川を今はその水にちかに袖を濡らして渡つただなあ意。

【天雲の】 「はるか」「たゆたふ」「行く」「奥」「よそ」「たどきも知らず」等にかゝる枕詞。

【浸づ】 ヒヅ ひたす。ぬらす。

【も】 さへ。までも。

【桂川の歌】 桂川の水は我が心に通つてゐるわけではないが、都に入る我が心の嬉しさはこの川の水と同じやうに深く流れるやうである意。

【京の嬉しきあまりに】 京の地に足を踏み入れた嬉しさのあまりに。

【家】 貫之の邸址については無名抄に「貫之が年頃住みける家のあとは、勘解由小路より北、富小路よりは東の隅

なり」とある。

【いふかひなく】言のほか。言つても甲斐のない程の意。
【いふかひなし】(一)言つてもかひがない。いひがひがない。(二)役に立たない。いくぢがない。賤しく、見すばらしい。

【こぼれ壊れたる】破れくづれてゐる。

【こぼる】くづれる。やぶれる。こはれる。

【壊る】ヤブる。こはれる。

【さるは】「然あるは」「しかあるは」の意であるべきであるが、中には「又」「扱」「そこで」「所で」「就いては」といふやうに筆端を改める趣があり、又、「所が」「しかも」「そのくせ」といふやうに、反戻的な趣で次を起して來るものもある。このやうに相反した意味の出て來る理由については説がある。

【池めいて窪まり、水づける所あり】池の如く低くなり、水の溜つた所がある。池が池とも見えなくなつたことをいふ。

【めく】名詞に添へてその體に見えるさまを表す。

【水づく】水にひたる。水分が含まる。みづく。

【五年六年のうちに、云々】わづか五年六年のうちに松の枝までなくなつたことの意外さを表す爲に、千年も経つたのであらうかといつて、暗に隣人の無責任を咎めてゐるのである。

【おほかた皆荒れにたれば】概ね荒れ果ててしまつてゐるので。

【あはれとぞ人々いふ】何といふことだらうと誰も誰もい

つた。
【思ひ戀ひしきがうちに】戀ひしく慕はしく思ふなにかも。

【いかゞは悲しき】如何ばかり悲しいことであらうか(はかり知られない)。

【いかゞは】「いかゞ」の意。「は」は特に取り立てて感歎の意を強めてゐる。「いかゞ」は副詞の「いかに」と助詞の「か」との結合した「いかにか」が、音便で

【密かに】

人々の歸京の喜の中に亡き兒を悲しむことを他の人々に氣兼ねたのをいつたのである。

【心知れる人々】心を知つてゐる人々。心を知り合つてゐる人々。貫之とその妻とをさす。

【人々】は三條西家本には「人と」とある。

【うまれしもの歌】この家で生まれた子さへともに歸らぬに、この家に前にはなかつた小松が生ひ出でゐるのを見るのは悲しいことであるよ、の意。小松を見るにつけて亡き兒のことが思ひ出されるのである。

【えつくさず】書き盡くすことは出来ない。

【え】能く。堪へて。下に必ず打消の助動詞又は反語の助詞を伴ふ。

【とまれかうまれ】「ともあれかくもあれ」の約。いかやうにもあれ。

【とくやりてむ】筆にまかせて書き散らしたものであるから、人目につかないうちに早く破りすてよう、の意。

【いかんが】となり、更に「ん」が略されたもので、或は反語の意を表し、或は疑問の意を表す。こゝは形の上からは疑問と見るべきであるが、前後の關係上感歎の意を表してゐる。下に來る活用言の連體形で止めたのは「いかゞ」に對する結である。

【舟人もみな子たかりてのゝしる】舟に乗つて來た人も、旅の留守中にみな子供が出來たり、それが成長したりして澤山より集つて喜び騒いでゐる。

【たかりて】この原文は、「いだきて」が普通行はれ、(考證)又「たかりて」を取るものも「だかりて」として抱くの延などと考へてゐる。(創見)「いだきて」を取れば論はないが、「たかりて」を濁つてよめば「抱かるゝ」の約つて自動詞四段となつたものと考へる外はない。(大言海)今は原文を生かして「群れ集る」の意と解しておく。この原文は前田家所藏定家自筆本によつたもの。別に解には「ねたがりて」の誤寫かなどともいつてゐる。

〔やる〕 破る やぶる。
 〔てむ〕 完了の助動詞「つ」の未然形に未來の助動詞「む」の重つたもの。(一)「む」よりも強く意志を表す。後撰集「櫻花今日よく見てむ吳竹の一よの程に散りもこそすれ」(二)適當の意を表す。徒然草第一七〇段「心づきなき事あらん折はなかなかそのよしをもいひてん」こゝは(一)。

二 解釋

1 主題 土佐守の任が果てて京へ歸るまでの見聞と感慨。

2 構想

- (1) 門出の日記(初―六七ノ一)。
- (2) 途中の日記(六八ノ一―七〇ノ一〇)。
- (3) 京入りの日記(七〇ノ一―終)。

3 敘述

〔男もすといふ日記といふものを、女もしてみむとてするなり〕——貫之が女に擬して書いた日記であることはいふまでもないが、何の爲に女に擬したかといふことは文化史的問題である。即ち當時の新國字は女文字といはれたほどまだ

男子には用ゐられなかつた。その爲に、何事にも先驅者であつた貫之も、さすがにこれは女に擬して試みたのである。

〔かれこれ知る知らぬ送りす〕——かれ・これを重ねた上に、「知る人」「知らぬ人」を重ね、助詞ぬきで「送りす」に至つてゐる。「送りす」といふ述語の構造も亦ぶつきらぼうで、全體的に古拙な敘法が面白い。

〔これは物によりてほむるにしもあらず〕——八木康教の餞別を讀めたから、そしてそれは心も物も備つた餞別であつたから、軽い氣持で、半ば洒落のやうにかくいつたのであらう。

〔一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字に踏みてぞ遊ぶ〕——言葉の洒落であることはいふまでもない。いつの世にも都會人は洒落を好むものと見える。併しこの古い和文の中にこれを見出すのは、又一種珍しく親しい心持がする。

〔海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えすなりぬ。岸にもいふことあるべし。舟にも思ふことあれどかひなし〕——女に擬した筆法である爲に、「海のほとりにとまれる人」と「舟の人」と何れをも客觀し、「岸にも」「舟にも」の如く第三者的句法を用ゐてゐる。そしてよくその情景を描出してゐる。

〔賣り人の心をぞ知らぬとぞいふなる〕——この言ひぶりは、その基底に、當時の人々、わけても作者の思想の型が存立することが理解せられてゐないと、十分に納得することが出来ない。即ちこの作者の「人はいさこころもしらす故郷は花ぞ昔の香にほひける」(古今集、春上)に示されたやうに、昔のまゝに變らないで存在するものを見るにつけて、人の心の變りやすいのを慨くといふやうな思想の型が一般的に存するので、「小櫃の繪」「まがりの法螺のかた」の變

挿圖「紀貫之」 傳藤原信實筆「三十六歌仙繪卷」(佐竹義春侯舊藏)の内。
 挿圖「土佐より京への船路」 貫之らの土佐から京都への旅程圖で、線で圍つた地名は本文中にあらはれるものである。現在それと知りうるものはそれを、又不明のものは大體地理辨によつて(浦戸・大湊・宇多の松原等)書きこんだ。

らないのであるのを見るにつけて「賣り人の心をぞ知らぬ」といつて見たのである。しかし事實さう慨いたのでもなく、怨じたのでもないから、「とぞいふなる」と一般化してゐる。

〔立ちて行きし時よりは、歸る時ぞ人はとかくありける。これにも返りごとす〕——當時の世相を示す語であつて、地方官の經濟生活と世人の待遇がこれによつて異なることを穿つた語句である。「これにも返りごとす」は七二頁一〇行の「たより毎に、物は絶えず得させたり」、同頁一二行の「いとほつらく見ゆれど、心ざしはせむとす」などと併せて考へて、作者のこまかい氣持が反映してゐて興味がある。

〔夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ〕——夜になるのを待つてといふ場合を「夜になして」といつてゐる所に、主觀的立場が示されてゐる。

〔桂川月の明きにぞ渡る〕——この簡勁な敘法が却つて多くを感ぜしめる。その他、「夜更けて處々も見えず」とか「京に入り立ちて嬉し」とかいふのもこの類で、巧んだり、洒落れたりした箇所よりも、かくの如き簡淨な筆法により多く作者の力量が示されてゐる。かういふ觀照の力が缺けてゐたら、技巧のすべては無意義になり了るであらう。

〔とまれかうまれ、とくやりてむ〕——書きつけた日記に價値がないからいはれた謙退の氣持であるのか、それとも、他人に讀ませる爲に書いたものではなく、全く書く爲に書いたものであるから、かくいつたものであらうか。かういふ私的なものの文末に置いた常套的な言ひ方である。

三 批評

平安朝文人の例にもれず、機智の發露としての言葉の洒落が中々頻出してゐる。併しそれは一つの表現様式であつて、時代的な特質といへよう。作者の個性的なものの發現としてのこの日記の本質は、海の旅の不安や失つた幼兒への追懷を

基底とした生活感情の示現に存する。この明るさと明るさの底に潜むものの力とがこの作品の眞價たるべきものである。

三 備考

一 指導の問題

平安朝文學の初期的作品の一例として、竹取・伊勢に相次ぐ成立を有し、日本文學最初の日記文學として、又紀行文學として、一新形態を樹立した記念的作品である。

この點に於て、時間・土地と共に推移しゆく事件・心境の展開の様式を學ばせることが大切であると共に、平安朝初期の文學が何れも和歌を中心とした分化であり、發展である關係上、その文學的價値に於ても、和歌がすぐれてゐるのが一般的であるのに、これは、その形態に於ては同じく篇中多くの和歌を有しつゝもその文學的價値はあまり高いものではなく、却つて散文の部分に觀照力の牙えを示すやうな内的な律文的表現が見出される。こゝに新しい散文誕生の黎明が認められるといつてよいであらう。

尙、作者は言語的諧謔を弄する一面に於て、一事一物に感傷してゐる。併しその何れもが情熱に乏しい。随つて竹取のやうな奇もなければ、伊勢のやうな自由さもなく、著しく平板・稚拙である。けれども、この作品の價値はむしろその平淡・簡樸な趣致に見出させることが大切な指導であらう。

國文學史的問題の提示にしても、形態的特質の指摘にしても、それが各自の熟讀による直接的把握を根柢としないならば、さういふ指導は、よく出来ても單に生徒を物識りにするだけで、悪くすれば、眞の理解に入ること却つて躓かせる結果に陥ることさへあり得る。この點に於て、この種の文にあつては、特に反復熟讀に指導の中心を置かなくてはならぬ

であらう。

二 參考資料

(一) 藤岡作太郎博士著「國文學全史 平安朝編」の中から、土佐日記の解説に關する部分を左に引用する。

貫之は、延長八年、土佐守となりて赴任し、六年の後、承平五年、任滿ちて歸途につく、土佐日記は、その年十二月二十日、國府を出立せるに筆を起して、翌年二月十六日、京の故宅に著くに文を結べる旅中の日記なり。しるすところによれば、十二月二十七日、大津を船出し、海岸を縫ひては、風をうかゞひ、浪をはかり、少しく進み、久しく滯り、二月六日やう／＼難波津に著し、それより淀川を浜り、十五日、山崎にてはじめて舟を捨て、その翌日、京に入れり。景樹は、古今集を撰べる時貫之の四五六歳なりとし、これによりて數ふれば、その日記をかきたるは、七十三四歳の頃なるべしといへり。或は曰く、この日記は唐の李翱の來南錄などを見て作れるものかと、この説必ずしも信すべからず。日々の記事を録するは、わが國の慣習なり、しかも多くは漢字を以て記されたるを、今は假名もて記す。假名は女文字ともいひて、普通は女の使用するものなれば、貫之もこれを記すに、舟中の女の風してかきたるなり。一篇のうち亡兒の悲、海賊の恐るところに存することを忘るべからず、全文滑稽を以て成れることをも思ふべしなどは、既に先達の教へて人のよく知るところなれば、更めてこゝに細説せず。

土佐日記の原本は貫之の自筆本といふもの、京の蓮華王院にありしかど、散佚し、藤原定家がこの本を寫し、もの世に傳はりて、證本となれるなりといふ。この本、今、前田侯爵家の庫中にあり。定家以來、文學大に衰へ、人麿を尊重しながら、萬葉を知らず、貫之を崇仰すといへども、その歌と古今集序とあるを知つて、土佐日記は學者文人の口上に上ること稀なりき。江戸時代に至りて文藝復興し、この書を読むものまた漸く増加す。聞書はその註釋のはじめなるべく、元和、寛永の頃の著ならん。ついで人見卜幽の附註、北村季吟の抄等あり。古文研究の勃興するに至りて、抄註益々多し、中にも最も價值あるは考證と創見とにして、考證は文化十二年、岸本由豆流の手になり、創見は天保三年、香川景樹の著にかゝり、一は事實の考證に努め、一は意義の闡明に力をつくせり。

(二) 土佐日記の註釋書の主なるものは左の如くである。

- 北村季吟 土左日記抄 二卷
- 加藤宇萬伎 土佐日記解 二卷
- 富士谷御杖 土佐日記燈 八卷
- 岸本由豆流 土左日記考證 二卷
- 香川景樹 土左日記創見 五卷
- 橋 守部 土佐日記舟の直路 二卷
- 鹿持雅澄 土佐日記地理辨
- 福島成行 土佐日記地理考

九 古今集抄

一 解題

一 本文

古今和歌集の中から撰者の歌及び前代歌人の歌を抄出した。

古今和歌集二十卷は、春・夏・秋・冬・賀・離別・器旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體・旋頭歌・誹諧歌等に分類せられ、歌の總数は約千百首である。最初は、續萬葉集と呼ばれ、ついで古今和歌集と改められた。「古」は萬葉集以後を、「今」は撰集當時をさし、萬葉集以後當時に至るまでの歌を集めたものとの意である。

この集には和漢兩様の序がある。假名序は紀貫之、真名序は紀淑望の筆である。この貫之の手に成つた序は、分類と共に後世に與へた影響が大きい。

異本が多く、(一)元永本、(二)清輔本、(三)俊成本、(四)定家本(イ貞應本、ロ嘉祿本、ハ嘉禎本)等がある。

二 撰者

醍醐天皇の延喜五年(一五六五)に、紀貫之・凡河内躬恆・壬生忠岑・紀友則の四人に勅して、その家集と、萬葉集に入らなかつた古歌、及びそれ以後の名歌を集めさせられ、承香殿の東なる所で撰ばしめられた。撰者の中では紀貫之が最も有力に働いたものと思はれる。随つて貫之の思想が撰歌の上にも編纂の上にも著しく出てゐるのみではなく、彼の作が

全體の一角を占めてゐる。何れにしても、後の勅撰集の撰者と異なつて、社會的地位が低いのは、地位ではなく歌人としての力量によつたものであることを示してゐる。

この集の編纂の仕方は、後の勅撰集の模範となつてゐる。萬葉集の長歌・旋頭歌はその價値を失ひ、辛うじて形式を止めてゐるに過ぎない。

三 採擇の趣旨

平安朝に於ける代表的歌集として、又、勅撰和歌集の第一集として、更に又、萬葉調・古今調・新古今調の如く併稱せられる、歌調の一代表としての古今和歌集の一端に接しさせる趣旨で擇んだ。

二 教材としての研究

一 註解

【紀貫之】キノツラユキ 歌人・評論家。三十六歌仙の一人。性質が學者的・思索的であつたから、その歌も穩健で、特色がない。古今集に採られた歌には、理性と意志とに鼓舞されながら合理的な表現によつて押通さうとする傾向が見え、後撰集に採られたものには主觀的傾向を加へ、内省と精進とによつて境を深めようとした態度が見える。

勅撰集に入つた歌は、古今集百一首・後撰拾遺集百三一首・新古今集三十三首・新勅撰集以下凡そ百二十九首、總計凡そ四百四十二首、私撰集に入つたものは、新撰和歌集四十五首・金玉集八首である。家集に貫之集があり、萬葉集抄の著がある。又有名な「古今集和歌序」を作つて歌論の端緒を開き、土佐日記によつて日記・紀行文の魁をした。(前課作者参照)

「三十六歌仙」は大納言藤原公任が選んだと傳へられる三十六人の歌仙(和歌に堪能な人の稱)。——柿本人麿・大伴家持・在原業平・猿丸大夫・紀貫之・壬生忠岑・素性法師・坂上是則・藤原興風・源重之・大中臣頼基・源公忠・藤原朝忠・源順・平兼盛・小大君・中務・藤原元眞・山部赤人・僧正遍昭・小野小町・紀友則・凡河内躬恆・伊勢・藤原敏行・藤原兼輔・源宗子・齋宮女御・藤原敦忠・藤原高光・源信明・清原元輔・大中臣能宣・藤原仲文・藤原清正・壬生忠見。

【袖ひぢての歌】 夏秋の頃、暑さに堪へられないで涼をとらうとして、袖の濡れるのも知らないで、手で掬ひ上げた水であるが、それが永い冬の間の寒さに凍つてしまつてゐた。それを、立春の今日の風が、もとの水に吹きとがすことであらう。

題詞に「春立ちける日よめる」とある。

【ひぢて】 濡らして。

【ひづ】(漬づ・沾づ) は水に漬く。ひたる。濡れる。

の木立は、外の山とは違つて、梢ばかりでなく下葉までも、残るところなく皆色づいたことであるわい。

題詞に「もる山のほとりにてよめる」とある。又、家集には「竹生嶋へまうづる時、もる山といふ所にて」とある。

【時雨】 シグレ 「しぐれの雨」の略。秋冬の交に陰晴定めなく時々降つてくる小雨。霖。液雨。

【もるやま】 守山 「漏」と「守」とを懸けていつた。

【守山】 は現滋賀縣野洲郡守山町。中山道の古驛で、野洲川の邊にある。保元物語には森山、東鑑には杜山に作り、何れも「もりやま」と訓んでゐるが、古くは「もるやま」と稱したものと思はれる。

【下葉】 シタバ 草木の下の方についてゐる葉。

【凡河内躬恆】 オホシカフチノミツネ 歌人。三十六歌仙の一人。寛平六年に甲斐権少目となり、延喜五年古今集撰修の事に與り、同七年丹波権大目、同十一年和泉權掾となつた。歌は多く客観的で、特に敘景に優れてゐる。

【むすびし水】 掌で掬ひ上げた水。

【むすぶ】(掬ぶ) は掌ですくひ波む。すくふ。

【凍れる】「凍る」に完了の助動詞「り」がついて、下に體言の略されたもの。

【春立つ今日】 立春である今日。

【立春】は曆の語で、二十四節氣の一。陰曆では正月節、陽曆では二月三日頃に當る。

【二十四節氣】(又は二十四氣)——五日を一候、三候を一氣、二氣を一月とし、四時、十二月、一年で二十四氣、七十二候となる。——立春・雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨・立夏・小雨・芒種・夏至・小暑・大暑・立秋・處暑・白露・秋分・寒露・霜降・立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒。

【や】 係の助詞で疑問の意はすくなく詠歎に近い。

【らむ】 多少疑惑を含めた推量の助動詞で上の「や」に對應する。

【白露もの歌】 白露も時雨も、はなはだしく漏るこの守山

機智縦横、多涙多恨、とつさの感興を寓して躍動した情緒がある。歌の體は新味を帯び、當時まだあまり試みられなかつた名詞止の形式をとつたものが少くない。

勅撰集に入つた歌は、古今集五十八首・後撰集二十三首・拾遺集三十四首・新古今集十首・新勅撰集以下凡そ六十九首、合計凡そ百九十四首、私撰集に入つた歌は新撰和歌集十首・三十六人撰十首・金玉集六首である。家集に躬恆集がある。

【春の夜の歌】 春の夜の闇といふものはさて／＼譯のわからぬものである。梅の花を隠さうと思つて暗さに包んだところで、色だけは見えなくなるけれど、香まで隠れてしまはうか、隠れはしない。

題詞に「春の夜うめの花をよめる」とある。

【あやなし】 (一) 分明でない。(二) 筋が立たない。譯がわからない。(三) 役に立たない。甲斐がない。こゝは(一)に(三)の意味をかけたもの。

【こそ】 係の助詞で、「ぞ」「なん」より強い。

〔ね〕 打消の助動詞「ず」の已然形。こゝは「ねど」の意味を有して下につゞいてゆく。

〔やは〕 係の助詞で疑問を表す「や」に意味を強める助詞「は」を重ねたもの。

〔隠るる〕 上に係の助詞「や」があるので連體形で結んだ。

【道知らばの歌】 秋がどこへ去るのか、秋の去る道を知つてゐたならば、跡を追ひ尋ねても行かうものを。この散る紅葉を道の神へ幣として手向けて、秋は旅立つていつてしまつた。秋の去つた道知らぬ故、尋ねて引き留めるよしもない。

題詞に「同じつごもりの日よめる」とある。

〔も〕 感動・詠歎の意を表す助詞。

〔ぬさ〕 幣 神に祈るのに奉る物。又被に出す物。古は木綿・麻をそのまま用ゐたが、後には織つた布・帛を用ゐた。旅行の時などは種々の紙又は絹を細かに切つて、ぬさ袋に入れ、道のほとりの神に奉るのを例

寛平御時后宮歌合・寛平菊合・是貞親王家の歌合の作者である。

勅撰集に入つた歌は、古今集四十五首・後撰集九首・拾遺集二首・その他凡そ八首、合計凡そ六十四首である。家集に友則集がある。

【雪ふればの歌】 雪がふつたので、木々には思ひがけなく花が白々と咲いたわい。今本當の梅の花を折りたいたのであるが、さあ、どれを本當の梅の花と見分けて折つたものであらう。

題詞に「雪のふりけるを見てよめる」とある。

〔わきて〕 わけて。とりわけて。ことに。こゝでは見分けての意。

〔折らまし〕 折つたものであらう。

〔まし〕は推量の助動詞で、實際に反した事を假りにさうと定める意味といはれるが、木枝増一氏は文語法精説でこの歌等を引いて、「まし」を「む」と同種の未來助動詞として、「む」に比してやゝ遲疑する點が

とした。みてぐら。にぎて。ごへい。

〔いにけり〕

「いぬ」(往ぬ)は行畢るの義かといふ。(一)往き去る。立去る。(二)過ぎる。歴る。(年月にいふ)。(三)死ぬ。(四)己が家に歸る。

「けり」は過去の助動詞で、詠歎の意を含む。

【紀友則】 キノトモノリ 歌人。三十六歌仙の一人。宮内權少輔有友(一説有常)の子で、貫之の甥(從兄弟)に當る。寛平九年土佐掾に任じ、同十年少内記に、延喜四年大内記に進み、同五年古今集撰修の事にあづかつた。歿年・享年を詳にしないが、古今集卷十六にその死を悼む貫之・忠岑の歌がある所から推定して、古今集撰修中に歿したらしい。年齢に就いては六十歳に近かつたらうといふ推定説がある。歌人としては貫之と名を齊しうし、その歌数は貫之に比して少いが、歌風は流麗・典雅で諧調の優れたものが多い。父も亦歌人で、古今集卷十六には、父の歌を集めて惟喬親王に奉つた由が見えてゐる。

あるといつてゐる。

【五月雨にの歌】 さみだれの音を聞きながら、何となく心細くて、さまざまに物思をしてゐると、時鳥が、夜更の空に鳴くが、どちらへ鳴いて行くのであらうぞ。

題詞に「寛平御時、きさいの宮の歌合のうた」とある。二首のうちの一首である。

〔物思ひをれば〕 たゞ漠然と何といふことなく思ひに沈んでゐると。(六「かぐや姫」指導の問題参照)

〔ば〕 条件を示す「ば」ではなく、事の起つた場合を示す。

〔時鳥〕 ホトトギス 杜鵑とも書く。杜鵑目、杜鵑科に屬する鳥。背面は暗灰青色を呈し、翼の風切羽は灰褐色で内瓣に白色の横斑があり、尾は黒地に數條の白斑をまじへ先端は白い。下面は喉と上胸は灰青色で、下胸は白地に細い黒斑があり、腹と下尾筒は黄褐色。嘴は暗黒色で口角と嘴縁は黄色、脚は黄色である。「くわくこう」に似てゐるが大きさが著しく小さい。

自ら巢を營まず、卵を他鳥の巢に寄託する奇性があり、主に鶯の巢を利用する。その雛は早く孵化して他卵を排棄し自己のみ親鳥の哺育を受けて成長するのである。

ヒマラヤ地方・支那・本州南部等に繁殖し、臺灣・支那・印度等で越冬して四月頃内地に渡來する。

古來、或はその初音を愛で或はこれを月に配して詩文の材とされ、又聲の悽愴や他巢利用の奇性等から、和漢を通じて幾多の傳説が生まれてゐる。鳴聲は「テッペンカケタカ」「ホンゾンカケタカ」等と聞きなされ、これに就いても説話が多い。

子規・蜀魂・杜宇・不如歸・郭公等の字も當てる。郭公は「くわくこう」で元來は別鳥であるが、廣義ではこれも「ほととぎす」といはれる。

あさどり・あやめどり・いもせどり・うたひどり・あやなしどり・うなみどり・かけたかのとり・さなへどり・しでのたをさ・たそがれどり・たちばなどり・た

まむかへどり・つくもどり・つねことばどり・ときつどり・なつゆきどり等、異名が頗る多い。

【いづち】 いづかた。どちらの方。

【壬生忠岑】 ミブノタダミネ 歌人。三十六歌仙の一人。

安綱の子、忠見(三十六歌仙の一人)の父。元慶より延喜時代の人。

初め和泉大將(藤原定國)の隨身であつた。後御書所に

候し、左近衛番長・右衛門府生・左近將監・御厨子所預・

攝津大目に歴任し、六位に叙された。寛平御時后宮歌合・

是貞親王家の歌合の作者となり、延喜五年古今集撰修の

事に與り、同六年六月日次贊使となり、翌七年宇多法皇

の大井川御幸に供奉して歌を奉り、貫之と同じく序を作

つた。この頃既に老齡であつた。躬恆・伊衡と三人で問

答歌五十一首を詠み、貫之とも二三の贈答歌がある。歌

風は、溫和で多少概念的である。

勅撰集に入つた歌は、古今集三十四首・後撰集十首・

拾遺集十二首・その他約二十五首、合計凡そ八十一首

である。家集に忠岑集がある。

【秋の夜の歌】 秋の夜露で野邊の草木が色づくといふけ

れど、露をどこまでも露としておいて、實際は、あの秋の夜淋しく鳴いて渡る雁の落す涙が、あんなに美しく野邊を色づけるのであらう。

〔ば〕 「は」が「を」に重つた爲、濁つたもの。意味を強める爲の助詞。

〔おきながら〕 さしおいたまゝで。そのままにしてお

く。 「おく」は種々の意をもつ語であるが、こゝでは、「さしおく」「のけすてる」等の意に、露の「おく」意をかけたのであらう。

「ながら」―(一)名詞・動詞についてそれに副詞の資格を與へる助詞。「そのまゝに」の意。「昔ながら」「宵ながら」(二)それごめに。共に。ぐるに。「枝ながら」(三)専ら動詞について「つゝ」又は「且」の意。「讀みながら」こゝは(一)。

〔雁のなみだ〕 雁が淋しく鳴いて落す涙。

〔らむ〕 こゝでは「や」と相俟つて原因を推究する意味がある。

【讀人しらす】 ヨミビトしらす 讀人不知 撰集などで、作者の不明な場合、又は故あつて氏名を憚る場合などに記す語。

【春日野の歌】 この春日野のうちの飛火野の番人よ、外に出て様子を見て下さい。もう幾日位経つたならば、たしかにこゝの若菜は摘めるやうになるか、お前はこの野に住まつてゐて、よく知つてゐるであらうから。

題詞に「題しらす」とある五首のうちの一首である。

〔春日野〕 カスガノ 大和國添上郡春日山(御蓋山)

の西麓、興福寺の東の大鳥居以東、東大寺以南の平岡

の稱。今の奈良公園の一部。

〔飛火の野守〕 トビヒのノモリ 「飛火野の野守」の

略。

「飛火野」は春日野の西隅で、昔飛火即ち烽火を揚げた所が地名となつたものであるといふ。春日野に烽火

臺をおかれた事は續日本紀、元明天皇和銅五年の條に見えてゐる。

「飛火」は古く外寇・内叛等の時に、合圖の爲に焚いた篝火の一種。山岡に土壇を築き薪を積み、有事の際には晝は煙、夜は火炎を上げた。

「野守」―禁獵等の野を守る者。野の番人。こゝは烽火のこと。

「幾日ありて」イクカありて 幾日あつて。幾日たつて。幾日たてば。

「若菜」 春の初に食料にする若い蔬菜又は草類をいふ。新菜。

往時、正月の上の子の日に、その年の七種（芹・薺・御形・藜・佛座・菘・蘿蔔）の新菜を、禁中で、内膳司より羹として奉る行事があつた。これを子の日の宴といつた。この子の日の遊として、小松引・若菜摘といふ事があり、婦女子は野に出て、羹にする若菜を摘み、後で宴を開き、和歌を詠じて遊んだ。又、子の

日に限らず、春が来れば先づ野に出て若菜を摘むのが、上代の婦女子の楽しみの一であつた。

「摘みてむ」 たしかに摘めるやうになるだらう。

「てむ」の「て」は完了の助動詞で意味を強めるに用ゐてゐる。「む」は未來の助動詞。

【白雲にの歌】 遙に高い大空のあたりに、互に羽と羽とを打交して飛んでゐる雁の数が、月が美しく冴え渡つてゐるので、はつきりわかる。ほんとに澄んだ秋の月であることよ。

題詞に「題しらす」とある二首のうちの一首である。

【白雲に】 白雲のあるあたりに、即ち空高く。

【白雲】―(一)色白く見える雲。(二)雲居に同じ。白雲のあるあたり、即ち空のこと。

【羽うちかはし】 雁と雁とが、互に羽を相交へることをいふ。白雲と打ちかはすのではない。

【數さへ】 數までも。

【さへ】は「そへ」の轉で、その上に添はる意。「すら」

「だに」及び口語の「さへ」とは異なる。

【在原業平】 アリハラノナリヒラ 歌人。六歌仙の一人、又三十六歌仙の一人。性質は情熱的で、感激性に富んでゐたから、その歌も観念的ではあるが情熱がこもつてゐる。天真の流露にまかせ、感ずるまゝに歌つたらしく、表現の完成を求めず、強く詠まうとしてゐるが、歌調はいづれかといへばゆつたりしてゐる。貫之の序に、「其の心あまりて詞たらず、しほめる花の色なくて、香のこれるがごとし」と批評してゐるのは適切である。(七「都鳥」作者参照)

勅撰集に入つた歌は、古今集三十首・後撰集十一首・拾遺集三首・新古今集以下凡そ四十三首、合計凡そ八十七首、私撰集に入るものは新撰和歌集八首・金玉集二首である。作品集としては業平朝臣集がある。

「六歌仙」は貫之が古今集の序に、やゝ前の時代の六人の歌人を擧げて批評したことから起つた。―在原業平・小野小町・僧正遍昭・喜撰法師・文屋康秀・大

伴黒主。

【飽かなくにの歌】 表面の意は、いくら見ても見足らないのに、まだ入るべき時刻でもないのに早くもまあ、月は隠れてしまふことかなあ、あの月の隠れる山の端が脇の方へ逃げ退いて、月を入れずにあつてほしいものであるわい、の意であるが、親王が興宴の愉快の盡きないうちに、早くも席を辭されて、お奥にお入りになるのを惜しみまゐらせる心持を歌つたものであることは題詞によつて明らかである。

題詞に「惟喬のみこの、狩しける供にまかりて、やどに歸りて、夜ひと夜、酒をのみ、物語しけるに、十一日の月も隠れなむとしけるをりに、みこ酔ひて、うちへ入りなむとしければ、よみ侍りける」とある。(教科書六三頁参照)

【なくに】 この「なく」は否定の助動詞「ぬ」の延で、「く」は「曰く」などの「く」に同じ。形容詞「なし」の連用形とは異なる。

〔まだき〕 未だその期に達しない時。はやくから。かねてから。下の「も」は「たづねも」(七五ノ一)の「も」に同じで、「まあ」といふ位の意。

〔か〕 歎息の意を表す。連體形をうける。

〔端〕 ハ(一)はし。はた。ふち。(二)はした。はんば。

〔入れずもあらなむ〕 入れないで、まあ、あつて欲しいものだ。

〔も〕は「たづねも」(七五ノ一)「まだきも」(七六ノ七)の「も」に同じ。

〔なむ〕は願望の意を表す助詞。

【つひに行くの歌】 死の道はこの世に生をうけてゐるものは誰でも何時かは行かねばならぬ道であるといふことは、かね／＼聞いてゐたけれども、それが今日この頃の事とは思はなかつたのを、もはやその時節も来て、行かねばならぬことであるのか。

題詞に「やまひしてよわくなりける時よめる」と

ある。

〔つひに行く道〕 こゝでは死ぬことをさしてゐる。

【僧正遍昭】 ソウジャウヘンゼウ 歌人。六歌仙の一人、又三十六歌仙の一人。俗姓名は良岑宗貞。別稱は、良少將・良僧正・中院僧正・又その住所から花山僧正ともいつた。良岑安世の子で、桓武天皇の御孫に當る。素性・由性の父。仁明天皇の御寵愛を得、藏人・左兵衛佐・備中守・左近衛少將・藏人頭に歴任したが、嘉祥三年天皇の崩御にあつて哀傷に堪へず、叡山に上つて僧となり、名を遍昭と改め、慈覺大師の戒をうけ、後、智證大師の教をうけた。貞觀中、常康親王から雲林院を賜はつて移り住み、後、花山に元慶寺を草創して座主となり、雲林院を別院とした。貞觀十一年法眼、元慶三年權僧正に任じ、仁和元年近江國高島郡の廢田百五十三町を賜ひ、次いで僧正に任じ、同二年食邑百戸を賜はつた。寛平二年(一五五〇)歿。享年七十五(一説七十四。又七十六)。歌風は行平に似て客觀美を描出する所があり、一面ユー

モアを含めた所もあるが、流暢の餘り重厚さを缺いてゐる。貫之は古今集の序で「歌のさまは得たれども誠すくなし」と評してゐるが、併し悲壯な心持を歌つたものにはかゝる難がなくてすぐれてゐ、八雲御抄には「誠にこの道の聖なり」と仰せられてゐる。

勅撰集に入つた歌は古今集十六首で、その他凡そ二十一首。家集に遍昭集がある。

〔僧正〕 僧官の最上位。大・正・權の區別があり、大僧正は大納言に、正僧正は中納言に、權僧正は參議に准ぜられる。

【はちすはこの歌】 蓮は泥の中に生ひ立ちながら、その泥水の濁にもそまらないほどの清淨・潔白な心をもつて、なぜあのやうに、葉に宿る露を玉と見せて、人をあざむくのであらうか。

題詞に「はちすの露を見てよめる」とある。

〔はちすは〕 蓮の葉。荷葉。

〔染む〕 シむ(一)うるほひ徹る。そまる。(二)しみ

て痛む。(三)深く感ずる。徹る。こゝは(一)。

〔なにかは〕 どうして。

〔なに〕(一)名を知らぬ物事に用ゐる代名詞。(二)何うして。こゝは(二)。

〔か〕は疑問を表す係の助詞。

〔は〕は意味を強める助詞。

【藤原敏行】 フヂハラノトシユキ 歌人。三十六歌仙の一人。富士鷹の子で、伊衡の父。貞觀八年少内記に任じ、諸官に歴任して従四位下に進み、寛平八年病によつて藏人頭を辭したが、同九年近江權守・右兵衛督に任じ従四位上に陞つた。歿年は、古今集目錄によると「延喜七年卒、家傳云昌泰四年卒」とあるが古今集卷十六に友則がその死を悼んで詠んだ歌があり、友則は延喜五年に歿してゐるから、昌泰四年(延喜元年)をとるべきか。享年未詳。歌風は主觀を力強く詠む點に特色があるが、貫之の理想に適するには餘りに實が多かつたかも知れない。

勅撰集に入つた歌は、古今集十八首・後撰集四首・そ

の他凡そ六首ある。家集に敏行朝臣集がある。

【秋來ぬとの歌】 秋が來たと目には一向はつきりとは見え
ないけれども、昨日に變つてさわやかに吹く風の音によ
つて、本當に秋が來たなと思ひ知られたことである。

題詞に「秋たつ日よめる」とある。「秋たつ日」は立

秋(二十四節
氣の一)の日である。

【さやかに】 (一)あきらかに。はきと。分明に。(二)
音聲のさえて聞えるさま。

【驚かれぬる】 こゝでは、驚愕するといふ程強い意で
はなく、軽い詠歎の心持である。

【驚かる】は「驚く」に自發の助動詞「る」のついた
もの。

【坂上是則】 サカノウエノコレノリ 三十六歌仙の一人。

田村廣四代の孫好蔭の子、望城の父。延喜八年大和權少
掾に任じ、同權掾・少監物・中監物・少内記・大内記を
經て、延長二年從五位下に叙し加賀介に任じた。延喜五
年三月二十日仁壽殿に行はれた蹴鞠に、殿上人の外、藤

原董之等と共に召され、二百六度まで連足に蹴つて落さ
なかつたので内藏寮の絹を賜はつた。延喜七年宇多法皇
の大井川御幸に供奉し、十三年亭子院歌合の作者となつ
た。歌風は、詠歎・感傷の中に客觀描寫の美しさを現出
してゐるのが、その特色である。

勅撰集に入つた歌は、古今集七首・後撰集六首・その
他凡そ二十六首、合計凡そ三十九首である。家集に坂
上是則集がある。

【朝ぼらけの歌】 朝しら／＼明けに見れば、有明の月の影
か見えるばかりに、一夜のうちに吉野の里を降り埋め
た白雪であるよ。

題詞に「やまとの國にまかれりける時に、雪のふりけ
るを見てよめる」とある。

【朝ぼらけ】 「朝びらき」の轉。朝ほの／＼と明るく
なつた時。夜あけがた。

【有明の月】 アリアケのツキ 夜は既に明けながら、
尙天に残つて照つてゐる月。大方は、陰曆十六七日過

の月をいふ。

【まで】 (一)距離・時日の限度及び程度を表す語。

(二)ほど。ばかり。(三)さへ。さへも。こゝは(一)。

二 評釋

【袖ひちての歌】——在原元方の曆の領分争ひの歌を卷頭に置いたこの撰者が、自ら立春を詠んで第二首目に入れた作で
ある。季節々々の特色を現してゐる事象を並べて、四時の推移の速なことを示し、且、氷をとかす風によつて立春を
具體化さうとしてゐるのであるが、すべては觀念的構成である。尙、「掬びし」に「結びし」を、また「融く」に「解
く」を懸け、その上に、「結び」と「解く」を相對せしめてゐるなど技術の妙を極めてゐる。しかも一首の意に於て、
よく條理が立つてゐるあたり、この時代の歌風の代表であり、作者その人の特色をよく示すものである。又この歌の
のびやかな調べも立春の趣を感銘させると共に、古今調そのものを具現してゐるといつてよいであらう。

【白露もの歌】——地名が作歌の直接動因を成してゐる歌である。地名に寄せて、觀察を生かし、感銘を現さうとしてゐ
るのであつて、そこに一つの技巧が働いてゐる。のみならず、露や時雨がもるといふ事實と、下葉が色づいたといふ
事實とが、因果關係として位置づけられてゐる。然るに詠歎は、この因果關係の發見に關してゐるわけではなく、下
葉が残らず色づいたといふ事實に驚異してゐるのであつて、そこに多少、構成と詠歎の融合を缺く感がないではない。
上の「いたく」と下の「残らず」の詞の掛合、「白露も」「時雨も」といつた場合の「し」音、それが又「いたく」の
上の「いたく」の「し」にひびく趣、「も」の三回反復など、意味上、音韻上に相當手こまかな技法を示してゐる。

【春の夜の歌】——春の夜の闇を擬人化し、梅の色を隠し得ても香は隠されないといつた勢で、最初からむしろ隠さう

としない方がよいの意を利かせ、「あやなし」といつた氣持を裏づけてゐる。こゝにも亦觀念的作爲による巧緻が著しく目立つてゐて、當年の歌風を物語つてゐる。

〔道知らばの歌〕——秋を擬人化し、その秋との別れを惜しむ情を詠んだもので、「もみぢ葉をぬさと手向けて」にその秋の性格を具體化してゐ、「道知らば云々」に、去つて行つた秋の行くへがわからない恨がこめられてゐる。觀念として練りぬき、結構を有機化する工夫に徹してゐる。

〔雪ふればの歌〕——「いづれを梅とわきて折らまし」といふ點が同代の人々に感心される思ひつきであつたであらう。雪のために萬木すべてこれ梅花といふ趣を呈した光景の大きさの前に、折りまどふ心のおやが詩であつたのであらう。更に「木毎に」に梅の字を示してゐる小器用はこの時代の歌人には不可缺のものであつたらしい。

〔五月雨にの歌〕——感情が集中して、五月雨の季節をも、夜深い時間をも、時鳥の聲をもよく統一し得てゐる。しかも結句の「いづち行くらむ」は、この情景を廣大な空間と悠久な時間の中に導いて餘情あらしめてゐる。何の技巧もないらしく讀まれるが、同代人の意識に於ては、用語（事實）選擇の用意深さとしても感歎せられたかも知れない。

〔秋の夜の歌〕——秋になると夜毎に露が滋くなる。そして野邊が色づいて来る。かう一般には考へられてゐる。しかるにこゝに新しい發見をした。それは、白露は白露としてそのまま野邊におきながら、あのしきりに鳴く雁の涙が野邊をそめるといふことであるといふのであつて、白露を白露として特色を持たせると共に、野邊の色を雁の涙に歸した所に、秋の自然美の把握がある。唯、その表現が觀念的であり、しかも技巧を技巧としてこらしてゐる點に於て、同代の歌たることを出さぬものではない。

〔春日野の歌〕——「讀人しらす」の歌は一般に年代が古い作である。紋上の撰者時代の歌風と異つて萬葉風に近い。

野守に「出でて見よ」と促し、「いま幾日ありて」と尋ねないではられない焦慮の底に、早春の趣が直觀せられ、春を待つ心の生々した脈搏が感銘せられるやうな歌である。

〔白雲にの歌〕——「數さへ見ゆる」に、深く澄んだ秋の夜の空、清く輝く月の光が具現せられてゐる。「數さへ」は新撰萬葉や顯昭本には「影さへ」になつてゐるらしいが、その方が、自然であつて印象が鮮明である。

〔飽かなくにの歌〕——月を親王に、親王の御退席を月が山の端に隠れるのに譬へ奉つたのは、「山の端にげて」といふ思ひきつた空想——切なる感情の示現としての——によつて理窟離れのした純情として感銘せられて来る。人麿にも「靡けこの山」と詠んだ歌がある。兩者同案のやうであるが、人麿の表現には迫つた感情と意力が感じられ、業平の表現にはゆつたりした感情とおどけた機智が閃いてゐる。

〔つひに行くの歌〕——「昨日けふとは思はざりしを」の四・五句、上三句の概念的言表を具體化し、しかも真情の聲として直接に響くものを感じしめる。「を」に深い感慨がこめられて、上三句を單なる概念ではなくさせてゐる。歌體は平安朝らしいけれども、さすがに真情の自然的流露を示してゐる。しかも業平の最期の詠として讀み味はつて見ると、一層感慨の深いものがある。

〔はちすはのの歌〕——蓮を擬人化して呼びかけてゐるのである。葉の上にたまつた露が宛轉として白玉の如く皎潔であるのをめでて、それを「あさむく」と戯れ、更にその理由をいぶかしかつてこの詠をなしたもので、直觀がその基底をなしてゐるとはいふものの、人の意想外に出た觀念的技巧がこの一首を形成してゐる。自然な所もない、高雅な趣もない、奇巧が生命である。

〔秋來ぬとの歌〕——秋を擬人化した詠である。秋が耳に聞えて來た、眼には見えないが、といふのであつて、風の音に

集中し、風の音に秋を感じてゐる所に詩が存立する。併しそれを直接的に表現しようとしないうで、「目にはさやかに」と説き、視覚と聴覚とを對照的に上下の句に配するなど、やはり觀念的な整頓を示してゐる。

〔朝ぼらけの歌〕——「吉野の里に」といふ限定によつて、一つには地理的なものが、一つには歌枕的なものが具現して来る。地理的なものといふのは吉野が山地で雪の早いことなどであり、歌枕的なものといふのは吉野が觀念的に美しいなかにも美しい所となつてゐることなどで、その爲に一首を内容づけともゐるが、同時に又その爲に一首を形骸化せしめてもゐる。「有明の月と見るまでに」は夜中の積雪に對する驚異を表すものであるが、「までに」などいかにも概念的な把へ方である。要するに一首の構想・表現はこの時代らしいものであるといふに盡きるであらう。

三 備 考

一 指導の問題

(一) 古今和歌集は國文學史を概説する上に重要な位置と意義を有する。それをこれだけの歌例から把握させようとすることは容易なことではない。一課の構成は、先づ撰者四人の作を選び、これによつて各撰者の傾向を示し、次には時代的變遷を標準として、「讀人しらす」時代の代表歌、六歌仙時代の代表歌(業平・遍昭の二人の作)をあげた後、再び撰者時代の二作家の作に及してゐる。註解に記したやうな各作家の特色を知らしめると共に、古今集に含まれた三時代の特性と推移とを多少なりとも知らしめることは學習に興味あらしめる所以であるかも知れぬ。

古今集に含まれた最初の時代は、平安朝初期に於ける漢詩・漢文隆興期で、讀人しらすの歌と卷二十に載つてゐる大歌所御歌・神遊歌・東歌等であり、萬葉時代の遺風を存するものが多い。本課にあげた二首の如き、素樸・單純でありなが

ら、優美・繊細な所があつて、萬葉から古今への過渡期を示すものである。

六歌仙時代は人心が既に漢詩・漢文を去つて和歌に赴いた時代で、漢詩人・漢學者で和歌に長じた人もあつたが、六歌仙が最もすぐれてゐた。併し眞に文學的價値を以て論じ得る歌人は、業平・小町・遍昭の三人であつた。そして業平の餘情、小町の婉柔、遍昭の輕妙等はその特色であつたけれども、しかも或は「其の心あまりて詞足らず」で、表現の完成が缺けてゐたり、或は「歌のさまは得たれども誠すくなし」で、眞實味が乏しかつたりして、なほ平安朝的完成には至り得なかつた。

然るに撰者時代になると、上に宇多法皇・醍醐天皇の御好愛があつた上に、友則・貫之・躬恆・忠岑等の歌人が輩出して、一新時代を劃し、長く歌風の基礎を定めるに至つたのであつた。

(二) 撰者時代即ち古今時代の歌風を、萬葉集時代のそれに比べると、種々の點に於て著しい差異が見出される。今、その主要な點のみをあげていへば、作歌の立場が著しく主觀的になり、自然に人事を思ひ、人事に自然を感じる如き擬人的傾向がさぶる濃厚になり、その極、觀念的・理智的技巧を弄し、主觀的な色彩が全卷を蔽ふに至つてゐる。そしてその主觀的なものは優美・醇雅を求めると同時に歸するものであつた。かくて眞淵のいふ「手弱女の姿」が形成せられたのである。

又、萬葉時代に多かつた二句切・四句切・無切が減じて、三句切が増加し、雄勁・莊重な五七調は變じて流麗な七五調になり、萬葉時代の枕詞・序詞・反復などの修辭は移つて懸詞・縁語の頻出となり、萬葉時代の眞率にして端的な表現が失はれて反省的で想像的な表現になつた。この觀念的・理智的な表現が流麗な格調を帯びた所に、作歌動機の主觀性と相俟つて婉曲で眞實感の乏しい歌調を成立せしめてゐる。萬葉の素樸性を去つて古今の感傷性に出たことは、和歌史に示さ

れた物語的傾向であるとも考へられてゐる。(和辻哲郎著「日本精神史研究」参照)

即ち、古今集の歌を抒情詩として讀んでゆくといかにも力に乏しい。それは直觀に於て貧しいからである。しかし觀念的に心の濃淡・陰影を觀察し、解剖し、構成する所に端的な情緒の表現よりも、複雑な情緒の敘述を形成する。かくて古今の歌風の抒情詩としての墮落はやがて物語文學を成立せしめる一つの道程であるとも考へられる。古今から新古今への展開を跡づけることの外に、古今から源氏への發展を明らかにすることも亦史的考察の一任務でなければならぬ。

(三) 古今集の歌は聲調の流麗に於て、後世に於ける七五調の普及に於て、國民的歌調の如く考へられてゐる。それを具體的に把握し、省察する機會たらしめることが本課の任務の一であらう。それにはまづ朗々と口誦せしめて主體的把握を確實にすることを忘れてはならぬ。その上に註解が施され、解釋が行はれ、更に、各作者の歌風、古今集の時代的特質が明らかにせられ、史的考察が加へられるといふ如き順序を辿らなくてはならぬであらう。しかしながら、この全部を一時に與へようとすることは不可能でもあり、不必要でもあるから、古今集の歌風や歴史的考察はむしろ復習的取扱に譲る方が賢明な指導であらう。

二 參考資料

古今和歌集の文學的位置と特質を簡明に示す爲に、五十嵐博士が新國文學史中に述べてゐる條を引用する。

第二の全盛期、その前半の百年は和歌の全盛期で、其中心になつたのは、帝では醍醐、年號では延喜、作物では古今集、作家では貫之である。紀貫之は當時の歌壇の先頭に立ち、新しき理想を唱へて歌界の潮流を導いた巨人である。彼れが自家の作風について、いかほど自信があつたか、いかに上下の信用と尊敬とを博したかは、「古今集」に載せた歌の總數千幾首の中に貫之の作が百首以上入つて居るのを見ても知られる。彼れは又「古今集」の序文に於いて歌論及び假名評論文の魁をなし、「土佐日記」に於いて日記の魁をなし

た。彼れは種々の點に於いて第一人者たるべき者である。

萬葉集時代より平安朝の末に至るまでに和歌の變遷した様子は、大凡次ぎの通りである。萬葉集時代には感興の起こるに任せていろいろの事物感興を詠み出でた。此の時代には、まだ和歌専用の感情を極まつた形式に表はすといふ事がなく、大體は直情直抒で、單純に素直に思ふがままを抒へたものである。例へば、藤原鎌足の作に、

我れはもや安見兒得たり 皆人の得がてにすといふやすみこ得たり

といふのがある。采女に安見子といふ美人が居て、皆人想ひを懸けたけれども聞かれなかつた。それを鎌足が手に入れたと云つて喜んで、「おれがねえ、安見子を手に入れたんだよ、みんなの得がたい」と云つて居たといふ、あの安見子を手に入れたんだよ。」と詠んだのである。至つてさつぱりした單純なものである。或は柿本人麿が、

足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を獨りかも寝む

前置なる枕詞の風袋を引けば、「この長い〜夜を一人で寝ることかなあ。」といふだけに約まる。形式や語の數に多少單複の差こそあれ、萬葉時代の歌は、長歌も旋頭歌も皆此の呼吸で詠まれたのである。彼等には感を惹いた中心樞要の利き處を擲んで、それを繰り返して繰り返して諷詠するといふ趣があつた。

弘仁期の六歌仙、業平、小町等になると、大分趣が違つて來て居る。彼等の歌題は殆んど戀愛と風景とに限られた。而して彼等の作には景色にあこがれ、情に耽り、戀愛に溺れた趣が見える。業平、小町といふ名が後世美男、美女、うかれ男、うかれ女の別稱になつたのを見ても知られるやうに、彼等は憧れ氣味の恍惚とした態度で、耽溺生活を續けて居た。彼等は平安朝の初期の、漢學の行はれた、まだ比較的堅い時代に於いて、第三期の源氏物語を産んだ後一條の朝を豫想してゐたのである。彼等の作、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして (業平)

色見えでうつるふものは世の中の人心の花にぞありける (小町)

わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞおもふ (小町)

の如きを見ると、彼等が「いつまでも若々しくてゐたい」「刺激の多い生活を送りたい」などと思つてゐた耽溺の心持が想像される。彼等の作に字餘りの多い事なども、萬葉と古今との間に在ることを説明してゐる。

延喜の貫之等は同じく四季、戀愛を題としたが、彼等は主として理窟が立つて内容形式の一致することを求めた。十の思想を十の言葉に現はして用語、句作り、音調をあくまでも優美に削り上げて行かうといふのが、恐らく彼等の理想であつたであらう。此の優美主義を短形式の詩歌に用ゐて理想に達したのは古今時代、同じ主義を長形式の物語に用ゐて大成功をなしたのは紫清時代である。但し、貫之をはじめ古今時代の歌には、理窟が勝ち過ぎて情を殺し、その結果やゝもすれば歌が論文の出来そこねになるやうな傾きがあつた。例へば「古今集」の開巻第一に在原元方の

年の内に春は來にけり一年をこそとやいはむ今年とやいはむ

といふのがある。月日の領分争ひが、それだけで詩歌となつて、而もそれが和歌扱ひされて勅撰名歌集の巻頭に据ゑられるといふのは、實に未聞の珍事である。或は貫之の作に、

櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける

人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香にほひける

といふのがあるが、調子が整つた所と、理窟を面白く立てた所とを除けば、情の上の味はひといふものが殆んど無い。貫之は主知主義を提げて業平、小町等の主情主義に反対し、而して主知主義の勝利は、大體に於いて古今集の歌の情味を乾燥せしめたのである。

一〇 須磨の秋

紫式部

一 解題

一 本文

源氏物語の須磨の巻から抄出した。

源氏物語は古くは「源氏の物語」「光源氏物語」「紫の物語」の異稱があり、徳川時代に至つては「源語」「紫文」「紫史」とも呼ばれた。

全篇は、桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・葵・賢木・花散里・須磨・明石・落標・蓬生・關屋・繪合・松風・薄雲・権・乙女・玉鬘・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・眞木柱・梅枝・藤裏葉・若菜・柏木・横笛・鈴蟲・夕霧・御法・幻・雲隱・匂宮・紅梅・竹河・橋姫・椎本・總角・早蕨・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋の五十四帖から成るが、その結構は自ら二段に分れてゐる。即ち前段の四十一帖桐壺から雲隱(本文缺)までは、光源氏の經歷を中心として、當時の上流社會の生活状態を描寫し、橋姫以下の十帖は世に宇治十帖と稱し、薰大將・匂兵部卿宮を主人公として、八宮の姫君等を配して脚色し、文章がやゝ前段と異なつてゐる。その中間の匂宮・紅梅・竹河の三帖は前段と後段とをつなぐ連鎖となる。

須磨の巻は、源氏二十六歳の三月から二十七歳の三月までの事件で、朧月夜との事から身邊の危険を感じ出した源氏は、

自ら須磨に避け、流人のやうな生活に入つた。親しい家來だけを數人具し、三月二十日に出發した。須磨の侘住居へは訪ふ人も稀である。松籟・濤聲に夢も安らかでない。都の人々や伊勢なる御息所に文通して漸く慰めてゐる。秋の月が冴え、春の花が咲くにつけても源氏は都が戀ひしい。頭の中將は宰相になつた。ある日突然訪れて互に手をとつて泣いた。三月に入つて未曾有の風雨が起り、日夜やまず、人々は生きた心地もなかつた、といふのがその梗概である。

諸本は多數にのぼるが、傳本は大體、(一)河内本(河内守光行・親行、等の校合せるもの)、(二)青表紙本(藤原定家所持の本、表紙が、古雅な青色鳥の子である)、(三)兩者に屬せざるもの、に分たれる。室町時代に一條兼良・三條西實隆等が定家の學風を起してから、青表紙本が定本の如く扱はれてゐたが、近年に至り、異本の研究が盛になり、さういふ方面から源氏研究が行はれてゐる。

成立の年代は少くとも前半は、式部が夫に別れた長保三年(一六六一)から、中宮彰子に仕へるやうになる前、寛弘二三年頃迄の里ごもりの中になつたものとみられ、夫を思慕する孤獨のわびしさより生まれたものであらう。

次にその歴史的價值に就いては、平安朝文學の展開の上からも、又我が國の小説史上からも、重要な意義を有するものであることはいふまでもない。随つて後世への影響は著しく、更級日記・濱松中納言物語・夜半の寝ざめ・狭衣物語等の物語、山路のつゆ・雲隠六帖の如き續篇、朧夜物語の如き摸倣小説、謡曲、宴曲、お伽草子、近世に至つては浮世草子、淨瑠璃、謡本、草雙紙、合卷の類に及び、連歌、和歌、俳諧に於ては必讀の書となり、又この物語研究の隆盛は、無數の註釋書・批評書を出來せしめ、國文學研究史上に重大な部門を成してゐる。

文學の展開の相からこれを眺めると、平安朝の文學には、抒情文學としての和歌から進み來つた歌物語と、敘事文學としての傳説から進み來つた傳奇物語の二つの方向があつて、前者は和歌を中心とするもので現實的色彩に富んでゐる。伊勢物語・大和物語の作品がそれである。後者は空想的傾向が著しく、筋を中心とするもので、竹取物語がこれに屬する。

この兩者の合流は寫實小説的理想小説となつて展開し、この傾向の極點に達したのが源氏物語で、即ち精細な寫實的描寫の中に、一種の幻想的な雰圍氣が醸成されてゐる。以後の物語は何等かの意味に於てこの影響を蒙り、それ自身頽廢的傾向を表して行く過程を示してゐる。

二 作者

源氏物語は紫式部の筆になつたもので、古來、父爲時との合作、或は後人の書きつき等の説があるが、ある種の補訂が加へられたにせよ、大方は式部の手になつたものと考へられる。

紫式部は藤原兼輔の孫、爲時の女でもと藤式部といひ、又日本紀の局とも稱せられた。幼時から學問を好み且才藝に秀れてゐたので、「口惜しう男子にてもたらぬこそは幸福なかりけれ」とその父をして歎せしめたといふ。同族の藤原宣孝に嫁して一女を擧げたが、間もなく夫に死別して侘びしい生活に入つた後、出でて一條天皇の中宮上東門院彰子に仕へ、長和五年(一六七六)三十九歳で逝いた。式部は内省的性格の故に表面は平靜に振舞つたが、感受性に強く、内面的には絶えず峻烈な自己批判に苦惱した如くである。著作には、源氏物語・紫式部日記・紫式部家集・日記歌(寫本)の外に勅撰集に入つた歌がある。

三 採擇の趣旨

平安朝文學の代表的作品、物語形態に於ける日本文學の最大傑作、世界最古の小説である源氏物語の片鱗に觸れさせ、その偉大な價值の一端を把握させる爲に抄出した。排列上文藝的教材であるけれども、そこに含まれた日本的な美の實現によつて國民性を陶冶すべき國民的教材でもあり得る。

二 教材としての研究

一 註解

【紫式部】初めは藤式部と稱せられたが、その「藤」は藤原の姓から來たものである。

【紫】藤式部の「藤」が「紫」になつたのに就いては數説あるが、源氏物語の中に紫の上の事をすぐれて書き出したので、改めて紫式部といつたといふ（河海抄）の有力である。

【式部】父爲時の官位式部承、（小右記）又は兄惟規の官位式部承（尊卑分脈・紫式部日記）から來たものといふ。當時宮中の女房に賜はる名は、大抵父兄の姓や官位から取つた。

【須磨】スマ 現神戸市の西端須磨區の海寄りの地。北に高尾山・高倉山、西に鐵柵峯・鉢伏山を負ひ、南は海に面する。その海濱は古來名高い白砂青松の須磨の浦で、西南明石瀬戸を距て淡路島に對し、南は雲煙模糊の間

に紀・泉の山を望み、風光明媚・氣候溫和、昔から月の名所として知られてゐる。なほ、在原行平の閑居や源氏物語の記事によつてその名が一層高くなつた。また附近は一の谷・須磨寺等の古蹟に富み、遊覽地として著名である。

【須磨には】須磨では。

【いとど】（一八三頁「散ればこそその歌」の項を見よ）

【心づくしの秋風】色々と物思をそよるところの秋風。古今集、秋四のよみ人しらすの歌に「木の間より洩りくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」とあるのから引いた句。

「心づくし」思ひを盡くすこと。氣をもむこと。この語は上の「いとど」に對しては動詞の關係を以てつき、下の「秋風」に對しては「の」でつゞいて名詞と

なつてゐる。

【行平の中納言】在原行平。平城天皇の皇子阿保親王の第二子。御母は桓武天皇の皇女伊登内親王。天長中弟業平と共に在原朝臣の姓氏を賜はり、仁明・文徳・清和・陽成・光孝の諸朝に歷仕した。治政に盡くすところ多く、累進して治部卿中納言に任じ、又正三位民部卿となつたが、後再三請うて官を辭し、寛平五年（一五五三）歿、享年七十六。かつて獎學院を創立して在原の子弟を教育した。

須磨謫居のことは詳でないが、古今集、雜下に、在原行平朝臣として、

田村（文徳天皇）の御時に、事にあたりて、
津の國の須磨といふ所にこもり侍りける
に、宮のうちに侍りける人につかはしける

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつ
つわぶと答へよ

一〇 須磨の秋

とあり、又撰集抄ハ「公任進位并行平遷流事」に「昔行平中納言といふ人いまそかりける。身にあやまつこと侍りて須磨の浦に流されて云々」とある。

【關吹き越ゆる】云々

續古今集、羈旅歌に、中納言行平として、

津の國須磨といふ所に侍りける時よみ侍りける

旅人は袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風

とあるのをさす。但し歌には浦風とあるのを浦波といつたのは、行平の中納言が「關吹き越ゆる須磨の浦風」とよんだその浦の浦波といふ意であらう。

【關】須磨の關。こゝに關のあつたことは、古書には見えないが、古來歌によまれてゐる。關屋址は西須磨の西源光寺の邊であらうといはれてゐるけれども、定かではない。

【夜々】ヨルヨル「寄る／＼」の意を懸けて「浦波」の縁

語とした。

【またなく】

「またなし」二つとない。たぐひない。この上ない。

【御前に】 オンマへに 源氏の御側に。

【うち休みわたれるに】 皆寝しづまつてゐるのに。

【うち】 打 動詞に冠して、その意を強める。

【わたる】 種々の意味があるが、こゝでは、普く及ぶ、廣く至る、の意。

【枕をそばだてて】 枕をかたむけて。寝てゐながら耳をかたむけて。その方へ注意を向けてよくきいて。

【そばだつ】 敲つ 峙つやうにする。一端をもち上げる。白樂天の「遺愛寺鐘敲枕聽、香爐峯雪撥簾看」の「敲枕」によつたもの。

【波たゞこゝもとに立ちくる心地して】 波の音が高いので、すぐその傍に寄せて来るやうな心持がして。

【たゞ】 ぢかに。直接。

こゝの「たゞ」には、一般に「唯」「只」を當ててゐる

が、むしろ「直」の意に解せられる。

「直」―(一)まつすぐに。(二)直接。(三)すぐ。(四)まるで。こゝは(二)。

【こゝもと】 「そこもと」に對する語。(一)手近の所。こゝ。(二)拙者。私。こゝは(一)。

【枕浮くばかりに】

古今六帖五「ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり」

【琴】 キン 琴の琴。七絃琴。箏の琴と異なつて柱を用ゐないもの。

【かき鳴らし給へるが】

【かき鳴らす】 (琴などを)彈奏する。爪彈きする。

【凄じう】 スサマじう 「凄じく」の音便。氣味悪く。

【凄じ】 (一)氣が進まない。厭氣がさす。面白くない。宇治拾遺二「物食ひ酒飲みつる遊びも皆すさまじくなりて」(二)轉じて、物凄。淋しい。心細い。荒涼。源氏、初音「影すさまじき曉月夜に」(三)又轉じて、

恐るべく甚だしい。勢強い。こゝは(二)。

【彈きさし給ひて】 彈いてわたのを途中でやめられて。

【さす】 半途でさしおく。爲残す。この語は他の動詞につけて複合語としてのみ用ゐられる。

【戀ひ侘びての歌】 この浦波の音が戀ひ侘びて泣く自分の聲であるかのやうに聞えるのは、自分の思ふ人の方から風が吹いて来る爲であらう。

【侘ぶ】 (一)思ひわづらふ。心配する。心細く思ふ。

(二)落ちぶれる。貧乏する。(三)侘びしく靜かなのを楽しんで住む。こゝは(一)。

【まがふ】 (一)入り亂れる。まさつて分別し難い。

(二)見又は聞きちがへる程に似てゐる。こゝは(二)。

【おどろきて】 目を覺して。

【おどろく】 (一)意外な事に遇つて心が騒ぐ。びつくりする。(二)めざめる。

【めでたう】 「めでたく」の音便。

【めでたし】 (一)賞すべきである。愛すべきさまであ

る。(二)うるはしい。結構である。(三)祝ふべきである。(四)人に欺かれ、又のせられ易い性質である。こゝは(二)。

【忍ばれで】 堪へかねて。怵へかねて。

【で】 「すて」(「す」は打消の助動詞)の約。動詞・助動詞に添へて、打消の意を表す。

【あいなう】 「あいなく」の音便。せん方なく。

【あいなし】 (1) (二)かはゆげがない。愛想がない。(二)轉じて、おもしろくない。あぢきない。(三)轉じて、かひがない。無益である。(2) いひやうがない。せん方なし。常規を脱する意。

【げにいか云々】

人々の心を思ひやつて源氏の考へること。

【我が身ひとつにより】 自分一人の爲に。

【程につけつゝ】 程につけつ程につけつ。程につけて程につけて。その程々につけて。身分々に應じて。

【つゝ】 古く、活用語の疊語は終止形を用ゐたもの

で、「つ」も「浮きつ沈みつ流れ行く」の如くいつたが、こゝのやうに動詞が同じであるときは、その一つを省いて「つ」だけを重ねた。随つてこの「つゝ」は反復の意で、今の「……しながら」の意ではない。古くいつた「泣く／＼言ふ」の如きは今の口語で「泣き泣き言ふ」といふのであるからこの「つ」もその連用形で、「て」といつてよい。

【つ】「つ」は所謂完了の助動詞であるが、「確述」の意である。(卷七、四頁「浮きつ沈みつ」の項参照)

【家を別れて】 家から別れて。
こゝの「を」は「家を去る」「國を去る」の如く「より」の意。

【かく惑ひあへる】 互にこんな邊鄙に流浪してゐる。

【惑ふ】 (一)分別に苦しむ。(二)見當がつかないで正しい道を見失ふ。(三)とりちがへる。

こゝでは須磨の配所に来て心の落着かない事をいふ。

【あへる】 古く「と」は動詞の終止形についた。連體

形で「と」に連なつてゐるのは餘情を残す言ひ方。(一五二頁「罷りなむとする」の項参照) 今は連體形から連なることも許容されてゐる。

【いみじくて】 こゝでは大層いたはしくての意。

【いみじ】 善惡・邪正に通じて「甚だし」の意。

【戲言】 タハブレゴト

【紛らはし】 マギらはし 家來達の心をまぎらせ。

【つれ／＼なるまゝに】 せうことのないのにまかせて。

【つれ／＼】 (一)獨り物を思ひつゞけて、ながめてゐること。(二)獨り、事なくして淋しいこと。すべきことがなくてひまなこと。こゝは(三)。

【まゝに】 なのにかまかせて。によつて。

【唐の綾】 カラのアヤ 唐土から傳來の綾。綾を浮織にしたもので、今の綸子の類。

【綾】 (一)あやおりもの。文(模様)を織り出してある美しい絹織物。(二)機具のあやだけの下略。(三)曲藝のあやおりの下略。こゝは(一)。

【畫がきすさび】 遊び慰み。

【すさぶ】 心に入れず何となくはかなくものする。あそぶ。なぐさめにする。

【人々の語り聞えし】 (都にゐられた時に)人々のお話し申し上げた。

【聞ゆ】 (一)「いふ」の敬語。申し上げる。(二)自動の動詞に助動詞の如くつけて敬意を表す。たてまつる。まつる。こゝは(二)。

【及ばぬ磯のたゝすまひ】 言葉も及ばぬ磯邊の景色。

【たゝすまひ】 (一)たゝすまふこと。(二)立つてゐる様子。ありさま。こゝは(二)。

【二なく】 二つとなく。比類なく。この上なく。

【上手にすめる】 上手として評判のある。

【めり】 推量の意を表す助動詞。

【千枝・常則】 チエダ・ツネノリ 共に當時の繪師の名。傳未詳。細流抄に「千枝常則皆繪師也」とある。

【作繪】 ツクリエ 墨書の繪に彩色すること。

古へは繪をかくて後に彩色をば別人にさせることがあつたので、墨書・作繪と別けていつた。墨繪・彩色繪といふのは異なる。

【仕う奉らせばや】 させたいものである。

【仕う奉る】 ツカウマツる 「仕へ奉る」の音便。(一)

【仕ふ】の敬語。(二)轉じて、「爲す」「行ふ」の敬語。こゝは(二)。

【ばや】 自己の希望を表す。

【心もとながりあへり】 もどかしく思ひ合つた。

【心もとなし】 (一)おぼつかなし。不安心なり。(二)もどかし。じれつたい。こゝは(二)。

【がる】 ある語に添へて「思ひつめる」意を表す。

【世の物思ひ】 世間の心配。

【つと】 引續いての意。(一)動かす移らぬさま。ちつと。

づつと。そのまゝ。直ちに。(二)急に身を動かすさま。

つつと。こゝは(一)。

【前栽】 センザイ (一)庭前に栽ゑた草木。庭樹。(二)草

木を栽ゑた庭前。寢殿造などの中庭に、一段高く土を盛つて、花木・草花などを栽ゑたもの。又そのところ。こは(一)。

【廊】 ラウ 殿舎と殿舎との間に兩者の交通を連続する爲に設けた建物の一である。渡殿・細殿ともいふ。

【ゆゝしう清らなるに】 大變にうるはしいので。

【ゆゝし】 (一)いま／＼しい。恐しく又は嫌はしくて、憚られる。(二)善悪・正邪を通じて、甚だしい。すばらしい。(三)天晴である。非凡である。こゝは(一)。
【清ら】 キヨラ 清らかなこと。きら／＼しいこと。うるはしいこと。

【所がら】 所柄 所が所であるによること。場所がら。

【なよゝかなる】 なよやかな。なよ／＼として柔かな。

【紫苑色】 シラン(又はシラニ)イロ 襲の色目の一種。紫苑ともいふ。表は濃い薄色に裏の青いもの、又、表は紫、裏は蘇芳ともいひ、又、表は蘇芳、裏は萌黄ともいふ。河海抄に「紫苑色は表薄紫裏萌黄なり」とある。こゝで

の際に願文をとなへるのである。

【弟子】 デシ 梵語 *Śiṣya* で、所教と譯す。師に就いて教を受ける者。

【ゆるゝかに】 緩やかに。

【世に知らず】 この世にまたとない程に。無類に。

【のゝじりて】 騒いで。

【雁の連ねて鳴く聲】 雁のつれだつて鳴く聲。

細流抄に「雁陣易迷秋嶺上、鳥舟難辨夕陽中」此句に叶へり」とあり、花鳥餘情に「なきつゞきてゆるくなり」とある。

【楫の音】 カヂのオト

花鳥餘情に「雁櫓とて雁の聲を『から櫓おす』にたとへたり。楫の音も同じ」とある。

【うちながめ給ひて】

【うちながむ】 (一)つく／＼と久しく打守つて見る。見詰めてゐる。(二)遠く見渡す。はるかに望む。こゝは(一)。

は衣の色か、指貫の色か明らかでない。

【奉りて】 召し給うて。おめしになつて。著給うて。

【奉る】 (一)まわらせる。進上する。(二)載せまわらせる。著せまわらせる。(三)著給ふ。召す。(四)崇め尊ぶ。立てる。(五)助動詞の如く他の動詞に添へて謙遜の意を表す。

【こまやかなる】 色の濃い。細流抄に「色濃敷」とある。

【直衣】 ナホシ (ノオシと發音) 古昔主上を始め奉り、攝家・大臣等の用いた通常服。雑袍といひ、衣冠より更に略式のもので、雑袍宣旨を蒙つたもののみが着用して御前に出られた。形は位袍に似てゐるが、單の上に指貫を穿き、下襲・半臂等を省いて著た。

【しどけなく】

【しどけなし】 (一)亂れてゐるさまにいふ。締りがない。(二)いとけない。をさない。こゝは(一)。

【釋迦牟尼佛弟子】云々

「釋迦牟尼佛弟子某歸命頂禮白佛言云々」と經文讀誦

【黒木の御數珠】 黒檀の御數珠。

【黒木】 クロキ 柿樹科、かき屬の常緑小喬木。葉は短柄・革質で楕圓形或は倒卵形を呈し、鈍頭或は圓頭で鋭脚、長さは約四・五種である。雌雄二家で聚繖花序をなし、花冠は鐘形で三裂する。果實は球形又は楕圓形をなし赤熟する。琉球・臺灣の岩石地に生ずる。異名―ぞうげぼく・りうきうこくたん。

【數珠】 ズズ又はジュズ 念珠ともいふ。小さな珠を糸で貫ぬいて環としたもの。呪文・稱名・唱題等を數へるのが本義であるが、今は佛・菩薩を禮拜する時、手にかけて又は揉んで敬意を表するにも用ゐる。數珠功德經には、眞言若しくは佛の名號を唱へるに、若しも自ら利し、他人を護り、速に諸願成就せんことを欲するならば、數珠の法を知るべきであると説いてある。原始佛教には記録がなく、南方佛教徒には用ゐられなかつたが、北方佛教に於ては重要な法具であつた。珠の數は普通百八顆で、百八煩惱の退治を表徴する。他

はこれに乗除した數に隨ふ。即ち千八十・五十四・二十七・二十一・十四等である。珠の種類には鐵・赤銅・眞珠・珊瑚・木穗子・蓮子・帝釋青子・水精・金剛子・菩提子等があり、修する所の法によつて珠の種類を異にする。

【はなやかに】(一)はな／＼しく。美々しく。(二)きはだつて。ばつと。こゝは(一)。

源氏、賢木にも「月の花やかなるに、むかしかやうなる折は御あそびせさせ給ひて」とある。

【殿上の御遊】 テンジャウのオンアソビ 清涼殿で催された管絃の御遊。

【殿上】 「殿上の間」の略。禁中の清涼殿内の一間で、昇殿を許された人々の伺候する所。(教科書一二二頁「清涼殿」の圖参照)

【遊】 (一)遊ぶこと。慰み。(二)狩獵の慰み。(古語)

(三)管絃の遊。(古語)

【月の顔】 月の面。

【まもられ給ふ】

「まもる」 目守る (一)目を放たず見る。見つめる。

(二)注意してうかゞふ。(三)害のないやうにと庇ふ。

こゝは(一)。

「る」は自發の助動詞。

【二千里外古人心】 ニセンリノホカノコジンノココロ (和漢朗詠集では二千里とよんでゐるが普通には二千里といふ)。

白氏文集卷十四所載の「八月十五夜禁中獨直對月憶元九」と題する七律詩中の句。(元九は白樂天の親友元稹(後之))

なほこの句は、増鏡・東關紀行等にも引用せられてゐる。

【古人】 故人に同じ。(一)ふるい友。(二)死んだ人。

こゝは(一)。

【誦じ給へる】 聲を出して御讀みになると。

【誦す】 ズンズ 「誦す」の音便。誦む。

【例の】 レイの例の如くの意。

【ふるさとをの歌】 自分は京へ一體何時歸り行くことができようか、あの歸りゆく雁がうらやましいことだ。

葵の上の兄三位中將、今は宰相(以前の頭の中將)が須磨の源氏の侘住居を訪れた折、源氏が別れを惜し

二 解釋

1 主題 須磨に世を避けた光源氏の侘住居とその郷愁。

2 構想

- (1) 浦波の音に催される秋の夜の哀愁(初―七九ノ二)。
- (2) 仕へ奉る人々を紛らす爲の戲言や手習や繪書(七九ノ三―八〇ノ一)。
- (3) 光源氏の懐かしく美しい御様子に郷愁をも忘れ仕へ奉る人々(八〇ノ二―八一ノ二)。
- (4) 十五夜の月を見ての感慨(八一ノ三―終)。

3 敘述

「またなくあはれなるものはかゝる所の秋なりけり」――この深い詠歎が導き出された根據は、一つは秋風によつて枕の下に運ばれる浦波の音であり、一つは行平中納言の心境の追懷である。この兩者の合致した所に、「またなく」と特殊化せられ、「なりけり」と強調せられる感慨が成立したのである。

「一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して」――この「一人目を

さまして」は敘事であると共に抒情的效果を含んでゐる。又「四方の嵐」は、すぐ前の「秋風」の發展であり、「波ただこゝもとに立ちくる心地して」は、すぐ前の「げにいと近く聞えて」の推移であつて、そこに敘せられてゐる自然の呼吸の高揚は、感情の高揚を示すものである。

〔琴を少しかき鳴らし給へるが、我ながらいと凄じう聞ゆれば、弾きさし給ひて〕——須磨の浦波が手にとるやうに近く聞えて来る眞夜中、やるせない心を紛らさうと弾いた琴の音が悽愴に聞えるので弾き止めたといふ中にも、よくその夜の情調が示されてゐる。わけても琴を「少しかき鳴らし」といひ、「弾きさし」とあることばに、それがどんなにかない氣分であり、和らかな情趣であつたかが讀みとれる。

〔げにいか思ふらむ、我が身ひとつにより〕——この投出的句法の詠懷は仕へ奉る人々に對する光源氏の思ひやりの深さと眞實さを現してゐる。

〔いとかく思ひ沈むさまを、心細しと思ふらむと思せば〕——前の詠懷を受けて、自分の爲にかゝる郷に侘びしく住んでゐるのに、その自分が思ひ沈んでゐては心細く思ふであらうと内省してゐるのである。こゝに仕へ奉る人々への思ひ遣りは一層深められてゐる。そして「故郷戀ひしき人々の心、みな慰みにけり」の伏線としても働いてゐることはいふまでもない。

〔故郷戀ひしき人々の心、みな慰みにけり〕——雁の連ねて鳴く聲を聽いて、空打眺め、涙をかき拂ふ御手つきの、黒木の數珠に映える美しさを感じていつた言葉であるが、それと共に、これまで段々數へ上げて來た源氏の美質、——思ひ遣りの深さよりも、教養のめでたさよりも、主として容貌・所作の優雅さ——に基づくものである。即ち、七九頁一行—二行は歌を歌はれたためたさであり、八〇頁二行—三行は、戲言・手習・繪書の懐かしうめでたき有様であ

るが、八〇頁六行の「この世のものとも見え給はず」は「海見やらるゝ廊」に付む「御様のゆゑしう清らなる」であり、八〇頁九行の「また世に知らず聞ゆ」は讀經の様子であり、聲であり、八二頁一行—二行は雁を見上げて涙を拂はれる御手つきであり、八二頁五行の「例の涙も止められず」は詩の讀誦であるが、これも十五夜の月を見上げて都を思ひ、詩を誦する容姿をさすこといふまでもない。こゝにこの作者の美意識の特質が認められる。

三 批評

須磨の侘住居に於ける光源氏の描寫であることはいふまでもないが、悲境に沈む主人公の身の上であるだけに、その優雅さに清婉を加へて深みを増して來たといへよう。

それにしても、光源氏の道德的美質や教養の深さを示すにも、感性的・觀照的であることが注目せられる。姿の美しさは心の美しさとして、心の美しさは姿の美しさとして描かれてゐることはいふまでもないが、その歌の聲は深夜の波の音を背景にし、琴の音を前奏曲とし、その姿は海の見渡される廊に立ち、秋草の咲き亂れた前栽を前にした姿である。更に著物の地質から色の配合、著こなしまで、また白い手に黒木の數珠のまつはりや映發の工合まで、いかにも精采に富んだ描寫である。併しそれは單なる感性的興味でもなければ、斷片的描寫でもない、ともすれば都の空へ飛びたがる人々の心を惹きつける主人公の人間の魅力として生かされてゐるのである。源氏の筆法はこれだけの文によつても窺はれる。

三 備考

一 指導の問題

(一) 源氏物語の文學史的位位置及び意義を極めて簡單に、極めて具體的に概観させることが肝要である。平安朝文學の

最盛期に於ける代表的作品としての源氏物語であり、前期以來の物語の完成であるのみならず、和歌・日記等に現れた物語の様式の完成としての源氏物語であり、又この時代に入つて新に創始せられた假名文を磨き上げた平安朝文體の一大記念碑たる源氏物語であることは勿論、後代文學に對する影響が如何に深く、如何に大きいかを知らしめると共にまた作者がそれだけの抱負と自覺を以て成した所であることをも知らせたい。

(二) 源氏物語の主人公光源氏のモデルは須磨・明石までは藤原伊周であり、以後は藤原道長であるといはれてゐるやうに、當時の社會相が、特に貴族社會が描かれてゐる點に於ては、寫實小説であり、それがあつたべき姿として描かれてゐる點に於ては理想小説である。併しその理想化は同代人の意識に動いてゐた理想を具現したものである點に於て、あくまでも世態小説たる意義を保持してゐる。

(三) 須磨・明石の巻は古來名篇として知られ、上東門院の命によつて、紫式部が源氏物語制作祈願の爲に石山寺に參籠し、恰も湖上に映る八月十五夜の月光を眺めて浮かんだ所を筆にしたのが須磨の巻であるといはれてゐる。(河海抄)これは傳説に過ぎないけれど、さういふ傳説を生みさうなほど入神的な技が認められる。この一斷章を熟讀することによつて、その入神の技の一毫に觸れさせ、源氏物語的片鱗を直接に把握せしめたいものと思ふ。

二 參考資料

(一) 源氏物語の價值に關して、島津久基著「源氏物語講話」に敘べてある一端を左に抄出する。

兎も角も、批判の標準も、行爲の直接の命令者も、多くの場合感情であつて、理知乃至意力ではないのであります。概して之を感情中心の生活、しかもその情趣を創造するといふ側よりもそれを味はふといふ側に精神活動の主力が費されその側が非常に重大視せられた時代と言ふことが出来ようと思ひます。

源氏物語は大體に於てこの時代の姿の、赤裸々な反映であります。同時に時代人の理想の生活の現はれであります。それ故に人物も事件も異常なものがないのであります。唯その異常さがありとすれば、それは、其の如何にこの主情主義時代に於ての理想的なものであるかといふ意味での異常さであります。後世の文學や又西洋の近代文藝に於ては濟まない意志の争闘や、理性の鋭く嚴かな批判や、又超主觀的な力や、それらを源氏物語に求めるのは無理であります。腕力や、刀杖や、血や、そんな野蠻な生々しいものも、この靜的な美の世界にはむしろ邪魔であります。戀愛そのものの悲劇の高潮たる情死すら、五十四帖の大篇の何處にも見出すことは出来ないのであります。(古事記の中に於て既に見出し得る「輕の皇子と輕の大郎女」にかゝはらず。) 餘りに現實に迫るからであります。情趣を害するからであります。そして又その時代の人々には、少くとも源氏の中の主な人々には、望み難いところでもあります。望み得ても作者がそれを許さなかつたのであります。我々は唯、源氏五十四帖の中に詩を見、繪卷を見、音樂を聴くのであります。そして作者は物語といふ形式に於て、その詩を、その彩畫を、その音樂を表現しようとしたのであります。そして成功したのであります。即ち奈良朝以來の國文學の主流であり、特に和歌に於て遺憾なく發現せられた抒情詩的精神を、古事記に示されたところの敘事詩的方法によつて渾一するところに、更に新しい、國文學の優れた様式を完成したものが我が源氏物語であると言ひ得ると思ひます。さうして作者の、心にくいほどいづれもおちついて、涙を用意して人生をながめる、ひろく、ゆたかにこまやかな美しい心と、態度と、それを表現するに、十分に餘裕のあり、餘韻のある、洗練された筆才とが、この驚異に値する名作品を産み出したものであると思ひます。一語一句朗かに、リズムミカルな響を立てて、少しの淀みなく滑らかな麗しい感情の流れが、それ自身の聲と言つてもよいほどに、形式と全く融合した音樂的諧調を以て、しづかにいつまでも語りつゞけられるのであります。勿論、歌ひ物でなく、亦所謂語り物でもなく、讀み物であります。けれども、それは殆ど詩を散文化した典型的な抒情文學であります。私は之を小説と呼ばんより、やはり物語といふことばで呼んでおきたい氣が致します。若し呼び得べくんば、物語詩といふ稱呼を與へて。そして我等は、前代に於て萬葉時代の異彩であつた長歌といふ長詩の形式の亡びたことを歎く代りに、こゝに新な、そしてもつと自由な形の長詩を得たことを望外の喜とせねばなりません。同時に純散文の小説の形態を、亦この物語から胎生、脱化させようとしてゐる、我が國民の藝術意識の上の新たな方向への

動きを、希望と興味とを以て眺めさせられることをも附言せねばなりません。

即ち又源氏物語は、たゞ、作者の随時の詠歎の不統一な連結ではないのであります。全篇を一貫した説話の整然たる構成を有して居ります。しかもその説話を展開させてゆく人物と事件とが、決して架空なおぼろげな世界のものではなく、生きてゐる人間であり、あり觸れた事實であります。道徳或は宗教の理想郷でなくして、美醜善惡の交錯した現實であります。少くとも當時に生活せられた生活に近いものであります。作者の主観、理想のふるひに一度かけられてゐますけれども、作者自らが源氏の口を借りて、物語の本質的な意義について、螢の巻に言つてゐますやうに、それは「この世の外の事ならぬ物語であります。そして「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ。善きも悪しきも、世に經る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしき節々を、心に籠め難くて言ひ置き始めたるなり」こゝに作者の抱負があり、文藝觀があり、そして作者の意見が、取材からも、描寫の態度からも、可なり寫實的に傾いてゐることが窺はれ、又書かれた作品の事實に於ても、これを承認させられるのであります。

(二) 源氏物語の註釋書の主なるものは左の如くである。

- | | | | | |
|------|---------|------|----------|-----|
| 藤原定家 | 源氏物語圖入 | 本居宣長 | 源氏物語玉の小櫛 | 九卷 |
| 四辻善成 | 源氏物語河海抄 | 石川雅望 | 源註餘滴 | 二十卷 |
| 一條兼良 | 花鳥餘情 | 萩原廣道 | 源氏物語評釋 | 十三卷 |
| 中院通勝 | 岷江入楚 | 金子元臣 | 定本源氏物語新解 | 三冊 |
| 北村季吟 | 湖月抄 | 島津久基 | 源氏物語講話 | |

一一 春は曙

清少納言

一 解題

一 本文

枕草子の第一段、第二四段(抄)、第一六五段・第一六六段前半を採録したものである。枕草子は古くは清少納言が(の)記・清少納言・清少納言枕草子の如く書かれてゐる。成立は明確でないが、書中に、寛和二年六月と思はれる記事が見えるのが最初で、それから十五年後の長保二年八月と思はれる記事が最後であるから、完成は長保二年(一六六〇)以後といふことになる。清少納言が中宮定子に仕へたのは正暦年中であつたらしく、書中長徳及び長保元年・二年の記事が多い。異本が多く、古くから三卷本・五卷本・七卷本の稱が行はれてゐたが、この外、後光嚴院宸翰本及び堺本、前田侯爵家藏本等がある。

二 作者

清少納言。清原深養父の曾孫、清原元輔の女。元輔は後撰集の撰者で、梨壺五歌仙の一人、深養父は古今集・後撰集の作者として著名であつた。清少納言の事蹟は明らかでない。枕草子中の記事によれば正暦三年(一六五三)頃はじめ一條天皇の皇后定子に仕へ、長保二年十二月、おかくれになるまで仕へ奉つた。官仕の當時は三十歳にもなつてゐたかと思像せられてゐる。皇后のおかくれになつた後は出家して都の近くに住んでゐたらしいが、歿年は明らかでない。著作には

枕草子の外に、清少納言集がある。作者部類によれば勅撰集に採られた歌は十二首である。漢文學に通じ、源俊賢・藤原公任・藤原行成・藤原齊信等當時の著名な文人と交り、その奇才を發揮したことは枕草子の到る處に見えてゐる。

三 採擇の趣旨

平安朝文學の傑作として源氏物語と併び稱せられ、徒然草と共に隨筆の雙璧とせられてゐる枕草子に接させ、その文學的價値の一端に觸れさせようとして採録した。文藝的教材であるけれども、その美的感覺に於て、又その美的感情に於て、日本的なものの一代表として國民性の陶冶に資すべき國民的教材でもあり得る。

二 教材としての研究

一 註解

【清少納言】

栗原武一郎著「枕草子全釋」の解題の二「その作者」に「清少納言」の「清」が清原の頭文字たることは言ふまでもないが、『少納言』は必ずしも父兄の官職に依つたものではない。彼女の父は肥後守であつた。彼女は『肥後』とでも呼ばれるのが當然であつたらう。しかし『肥後』などと國の名で呼ばれる女官は下級の者に限られてゐた。彼女は大きい身分といふ譯でも

ないが、國の名で呼び棄てられるには少し貫祿が重かつた。『少納言』の呼名を附けられたのはそれがためであらう。呼名は絶對に官職に依ると規定されてゐたのではないから」とある。

【春は曙】 ハルはアケボノ（興趣の最も深いのは）春では曙である。

「春は曙」は「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」と共に、一年の中の興趣の最も深い時を、四季のそれぞれ

れについて限定してゐるのである。「曙」の下に「をかし」が略されたものといはれてゐるが、實際「をかし」といはずに、「曙」で止めてゐる所に、深い意味が存することを見逃してはならないであらう。（敘述参照）

【曙】 空のほのくくと明るくなる時。夜の明けようとして、日の光のさしそめる時。あさばらけ。しのよめ。

【やうく】 「漸々」の延といふ。（一）次第を追つて。だんだん。次第に。漸次。おもむろに。そろく。おひく。（二）辛うじて。やつと。やうやく。こゝは（一）。

【白くなりゆく山際】 明るくなつてゆく山際。

【白く】 明るく。但し「著く」とする説もある。

【山際】 ヤマギハ（一）山のは。（二）山のあたり。こ

こは（一）。

【あかりて】 赤味を帯びて。
【あかる】 赤る 赤くなる。赤らむ。但し「あかりて」を「明りて」とする説もある。

【紫だちたる雲】 紫がかつた雲。帯紫色の雲。

【紫】 ムラサキ 赤と青との間色であるが、こゝにいふ紫は所謂古代紫で、今いふ紫より赤味勝の、明け方の雲によく見られる色である。

【だつ】（接尾） 或語に添へて、「その氣の發つ」意を表す。「際だつ」

【細くたなびきたる】 ほつそりと横に長く引いてゐる、さういふ曙の趣が「をかし」といふ意。
連體假止で、餘意・餘情を含む言表し方である。
【たなびく】 うすく横に長く靡く。（雲・霞・煙などに ついていふ語。）

語源については、大言海に「棚延く義カ、起ち靡くノ略カ、或ハ云フ、たハ發語ナリト」とある。

【月の頃は更なり】 月夜の頃は勿論だ。月のある頃の夏の夜の趣は言ふまでもない。

【更なり】 サラなり 言ふまでもない。勿論のことである。但し「殊更」の意に解する説もある。

【闇もなほ】 闇夜でもやはり。

【雨などの降るさへ】 雨などの降るのまでも。

【さへ】 (二二三頁「白雲の歌」の項を見よ)

【をかし】 (一) 笑ふべきである。(二) おもしろい。趣がある。興がある。(三) 勝れてゐる。美しい。(四) 怪しむべきである。こゝは(二)。

【夕日はなやかにさして】 夕日が美しく光を放つて。

【山際いと近くなりたるに】 (夕日が) 極く山際に近くなつた時に。但し、夕陽に輝いて、山際がいつもよりもずつと近くに見えるといふ意に解する説もある。

【ねどころへ行くとして】 壻へ歸らうとして。

【ねどころ】 (一) ねどこ。(二) ねぐら。鳥の寝る所。こゝは(一)。

【三つ四つ二つなど】 三羽・四羽・二羽など。

正確な数をいふのではなく、鳥が群れつゝ亂れ飛んで行く有様を具體的に表したのである。

【飛びゆくさへあはれなり】 飛んで行くのまでも趣が深き。

こゝの「さへ」は、鳥を主語とする名詞節をうけてゐて、秋の夕暮の情景なるが故に、鳥の飛び行くのまでも趣があるといふ意を表す。

【まいて】 「まして」の音便。

【雁などのつらねたるが】 雁などの列を作つたのが。

【雁】 カリ「がん」ともいふ。雁鴨目、雁鴨科に屬する鳥で、一般には同科、まがん屬のまがん・かりがね・ひしくひの類を總稱する。我が國では九月頃北方から渡來し、翌春三月頃北歸し、その來去期の正確を以て知られてゐる。古來彼岸に來り彼岸に去るといひ傳へられる。常に群棲を好み、飛翔の際は所謂雁行をなす。歐・亞兩大陸に分布するが、我が國に渡來するものは主としてシベリア地方(領土内)で蕃殖する。

【つらね】 (一) 一列にそろへて置く。ならべつゞける。(二) 引連れる。伴なふ。こゝは(一)。

【つとめて】 こゝでは、早朝。(二〇〇頁「つとめて」の項參照)

【いふべきにもあらず】 わざ／＼いふ必要もない。殊更いふまでもない。但し、いふべきやうもない、言葉にもいひ難いの意に解する説もある。春曙抄にも「いはむ方なく面白き心也」とある。

【霜などのいと白く】 霜などが大層白く。

【白く】は「白きに」の意で、次の「寒きに」とともに「火など……」につゞく。

【さらでも】 しからずしても。さうでなくても。

【さ】「然」の約。こゝでは、霜などの白く置いてゐるのをさす。

【炭もてわたるも】 炭を持つて部屋から部屋へ通ふのも。(炭取に入れて運ぶのである。)

【もて】 (一)「持ちて」の略。(二)(助) 材料として。によつて。(三)(助) 或動詞と動詞の間に置いて「て」と同様の意に用ゐる。「ぬるくゆるびもてゆけば」(八

二一〇)

【わたる】 渡る こゝでは、こちらからあちらへ移つ

てゆく、の意。

【つき／＼し】 につかはしい。ふさはしい。相應してゐる。調和してゐる。

【ぬるくゆるびもてゆけば】 少し暖くなり、寒氣がゆるんでゆくと。

【ぬるし】 (一) 少し暖かい。ぬるんでゐる。(二) にぶい。のろい。

【ゆるぶ】 緩ぶ・弛ぶ 「ゆるむ」に同じ。(一) ゆるくなる。たるむ。ゆるまる。(二) ぬるむ。ゆるやかになる。(三) 怠る。たゆむ。油斷する。嚴重にしない。(四) おほやうになる。寛大になる。

【炭櫃】 スピツ 「すみびつ」の略。爐。圍爐裏。枕草子、第二一段「火おこさぬ火桶、炭櫃」

禁秘抄に、禁中殿上の下侍しもむらひに炭櫃があつて、四面に疊を敷くことが見えてゐる。

【火桶】 ヒヲケ 圓火鉢。

多くは桐のくり抜で、内を真鍮などで張つた火鉢でそ

の名は夙く和名抄に見え、沈の火桶、桐の火桶等の圖がある。周圍は木地のまゝのものもあつたであらうが、裝飾として繪をかき、繪火鉢の名があつた。その他梨子地のもの、箔・泥いろの色彩を施したものなどがあつた。

【白く灰がちになりぬるはわろし】 白く灰が多くなつたのは感心しない。

【がち】 ある語に添へて、多い、かたよる、などの意を表す。

【わろし】 こゝでは「つきぐし」の對で、不調和の状態をいふ。

【長言するまらうと】 長げなしをする客。

【長言】 ナガゴト 長々しい言葉。長々ものをいふこと。長話。

【まらうと】 「まれびと」即ち「稀に来る人」の意。他から訪れて来た人。客。まれびと。

【あなづらはしき人】 輕視してもいゝ人。いゝ加減にあしらつておける人。

【あなづらはし】 「あなづる」の未然形に形容詞をつくる接尾語「はし」のついたもの。侮られ易い。かるがるしい。

【あなづる】 見下す。輕んずる。あなどる。輕蔑する。

【追ひやりつべけれども】 追ひ返してやられるが。せきたてて去らせることが出来るが。

【つべし】 こゝの「つ」には完了の意はなく「べし」の意を強めたもの。「べし」は推量の助動詞で、可能の意を表す。

【心はづかしき人】 遠慮のいる人。氣恥づかしい人。氣のおける人。

【心はづかし】 きまりが悪い。氣はづかしい。自分より優れた者に對して面と向かはれない意にいふ語で、當時の通用語。

【墨の中に石こもりて】 墨の中に石がかくれて入つてお

て。

【こもる】 (一)かくれる。しのぶ。潛む。(二)中に含まれてある。圍み包まれる。(三)家に在つて外出しない。籠居する。

【きし〜ときしみたる】 きし〜といふ音をたてて、きしんだのも(憎らしい)。

【きし〜】 きしむ音、堅いものが強くすれあふ音を表す擬聲語。

【きしむ】 「きし〜」の「きし」を活用させたもの。

(一)きしつて滑かでない。しぶつて滑かでない。しぶつて音を立てる。(二)すれ合ふ。争ひ合ふ。

【ゆかしがり】 知りたいと思ひ。

【がる】 或語に添へて、これを動詞化する接尾語。

【聞かまほしがりて】 聞きたいと思つて。

【まほし】 助動詞「む」の轉「ま」に形容詞「ほし」がついた語。

【聞きわたる事】 聞き及んだ事。

【語りしらべいふも】 話の辻褄を合はせて語りいふのも。

評釋に「『しらべ』は明白にする意。されば、こゝはわかるやうに、辻褄合はせていふもの意とすべし。更に考ふるに、『しらべ』は『しらひ』の誤か。語りしらひは語り散すをいふ。しらひは、すべて動作の緊張を意味する接尾語なり。古本語りしらすも「とあり」とある。

【しらぶ】 調ぶ。「白」を活用させたもの。「明白にする」意かといふ。(一)音の律呂を合はせ調へる。奏でる。(二)かれこれと照らし合はせて見る。(三)罪状を糺す。吟味する。詮議する。糾問する。

【ちご】 稚兒・兒。「乳子」の義。(一)ちのみこ。あかこ。(二)子供。わらは。わらべ。(三)公家・武家・寺院等で召使はれた少年。稚兒小姓。(四)神社又は寺院で、祭禮・法樂などに美裝して出す男女の兒童。こゝは(一)。

【細聲に名のりて】 細い聲でないで。(蚊がブーンと低い羽音をたてるのをいふ。)

【名のる】 名告る (一)自ら我が名を告げる。(二)自

分だと告げいふ。こゝは(二)で、譬喩的にいつた。

【顔のもと】 顔のあたり。

【もと】 こゝでは、あたり、かたはら、の意。

【羽風さへ】 (羽音だけでなく更に)羽風までも。

【羽風】 ハカゼ (一)鳥・蟲などの飛ぶ時その羽から

生ずる風。(二)舞人の袖から生ずる風。こゝは(一)。

【物語】 モノガタリ (一)ものがたること。話すこと。は

なし。談話。(二)傳記・小説等を記した草紙。ものがた

りぶみ。ものがたりぼん。こゝは(一)。

【さし出でて】 でしやばつて。

【さし出づ】 (一)押出る。前へ出る。(二)分を越えて

さし出る。すぎる。

【さいまくる】

古來註解者に問題とされた語で、語源的には「才捲くる」「才枉ぐる」「先設くる」「先捲くる」等諸説あるが、何れにしても我が才を見せようとする心であるとするに於てほぼ一致してゐる。現行國語諸辭典の

説を左に擧げる。

さしでがましくふるまふ。才はじける。(國語辭典)

才氣にまかせてふるまふ。ものしり顔にさし出る。才

はじける。(言泉) 差出づ。サクシル。デスギル。サ

シデグチス。(大言海) すぎる。かしこぶる。さか

しらだつ。さいはじける。(廣辭林) 才氣にまかせて

ふるまふ。かしこぶる。才はじける。(辭苑)

【童】 ワラハ (一)「わらはべ」と讀む場合もある。(二)稚兒よ

りは年長で、まだ元服するには至らないもの。わらべ。

わらんべ。(三)召使の子供。童男。童女。(四)特に五節

の童の稱。(四)「稚兒」に同じ。こゝは(一)。

【ふと出でて】 ふいと横合から出て。ふいと横合から口を

出して。

【いひくたしなどする】 けなしたりするの意。

【いひくたす】 いひくさす。わるくいふ。けなす。

【くたす】 (一)腐らす。(二)わるくいふ。けなす。

【あからさまに】 (一)俄に。急に。(二)しばし。ちよつと。

(三)かりそめに。卒爾。(四)ありのままに。こゝは(三)。

【見ども、童】 チゴども、ワラハベ 子供たち。言ひ方を

かへただけで、どちらも「こどもたち」である。

【わらはべ】は、こゝでは「わらは」の複数であるが、

單数にもいふ。

【らうたがりて】 可愛がつて。

【らうたがる】 らうたく思ふ。

【らうたし】 かはゆらしい。愛らしい。いたはしい。

可憐である。

【取らすならひて】 與へるのに慣れて。

【取らす】 (一)受取らせる。受收めさせる。(二)與へ

る。(三)取寄せさせる。(四)持つて行かせる。

【ならふ】 (一)五二頁「ならひ奉れり」の項を見よ

【居入りて】 キイりて 部屋にはいり込んでゐて。

【調度やうち散らしぬる】 調度やら何やらをひどく散らし

たのも。

【調度】 テウド (一)てまはりの道具。日常所要の道

具。(二)武家で弓矢の特稱。こゝは(一)。

【や】 こゝでは、類似の物事を並列していふときに用

ゐる助詞で、下に「何や」といふやうな言葉を省いて

ゐるものと考へられる。

【今まわり】 新に仕へた人。新参者。にひまわり。

【さし越えて】 さしでて。でしやばつて。

【さし越ゆ】 「さし出づ」に同じ。

【うしろみたる】 後見したのも。世話を焼いたのも。

【衣のしたにをどりありきて】 著物の下ではね歩いて。

【衣】 キヌ 著物。ころも。

【もたぐるやうにするよ】 (著物を)持ち上げるやうにする

よ。(ほんとに)憎らしいといふ氣持)。

【もたぐ】 撞ぐ「もちあぐ」の約。

【犬】 イヌ

類聚國史に、平城帝の大同年中に、犬を悪ませ給うて、

備前の離れ島に流しやられたこと見えてゐるが、こ

の頃、宮中には犬が多く居たらしい。

【もろ聲】 もろゴエ 諸共に發する聲。互になく聲。こゝでは、犬が聲を揃へて吠えること。

【長々と鳴きあげたる】 聲をながびかせてますく高く吠え立てたのも。

【まがくしく】

「まがくしく」 まがごとのやうである。いまはしい。いまくしい。縁起がわるい。不祥である。

今でも犬の遠吠は不吉の前兆として嫌はれる。

【嵐】 アラシ 「荒風」の義。「し」は風の古語。荒い風。吹き荒ぶ風。強風。

「あらし」は、特に或季節を限つて吹く風をいふのではないが、こゝでは、秋の嵐をさし、秋の末、木枯になる前の風をいふのであらう。

「嵐」は、山氣のあをくと蒸し潤へるもの。「あらし」とよむは國訓。

【こがらし】 木枯・風 木を吹き枯らすあらし。初冬に吹

く強風で、樹林を吹きまくつて落葉を誘ふ風。主に文學上の呼稱で、木の葉を吹きおとして枯木のやうにすることから出た稱である。

【三月ばかり】 こゝでは、陰曆三月頃の意。

【三月】 ヤヨヒ 彌生。一櫻月・晩春・暮春。

【ばかり】 「量」の義。數量・時間・距離などを大凡に推量して「ころ」「ほど」の意を表す語。くらゐ。ばかし。

【花風】 ハナカゼ 春の末頃、花などを吹き散らす風。又、花のさかりに吹く風。

【八月月】 ハツクグワツ

【雨のあし横さまに】 雨脚が横に、横ぶりに。吹き降りのさまをいふ。

【雨のあし】 雨脚。(一)降り下る雨のすぢ。(二)雨の降り來り降り行くこと。こゝは(一)。

【横さま】 こゝでは、横に向かふこと。よこむき。

【夏とほしたる綿衣】 夏通しをした綿入。夏の間中必要に

應じて時々着用した綿の入つたきもの。

【綿衣】 ワタギヌ 綿入。綿を入れた衣服。江馬務氏はこれを相あひまであるとしてゐる。恐らくさうであらう。

「相」は「あいこめ」の略で、衣服の間に込めて著る意から轉じたもので「衣」ともいふ。朝官束帯の時は、下襲と單衣との間に著、衣冠や直衣の場合には、袍や直衣と單衣との間に著、又狩衣・汗衫の下にも著た。女官の場合は、元來平安朝初期には肌著とされてゐたが、衣服を多く重ねる場合には、それ等は相であつても相といはず、袷とか衣とかいつた。何枚も重ねて著ることもあり、綿入のものもあつた。

【生絹】 スズシ 「涼し」の義。單に「生」とも書く。經緯とも練らない生絲織の絹布。軽くて薄く、紗のやうな織物。(練絹の對。)

【單衣】 ヒトヘ 「ひとへぎぬ」の略。下に著る、裏のない衣服。

束帯・衣冠・直衣・狩衣・水干以下の男裝束、唐衣・

裳・小袷以下の女裝束に着用したのであるが、男の方は丈の短い垂頸・廣袖の衣、女のは丈長で形が異なつてゐる。たゞ單衣で、地は綾・羅・紗・平絹等、色は不定であるが、綾やうすものは菱の文様が多い。女官などでも、平常うちくつろいだ時、殊に夏向は、この單衣に長袴で、肌もあらはに見える位なこともあつた。枕草子、第二四七段に「單衣は白き。日の裝束の紅の單衣、あこめなどかりそめに著たるはよし。されど猶色黄ばみたる單衣など著たるは、いと心づきな。練色のきぬも著たれど、猶單衣は白うてぞ、男も女も萬の事まさりてこそ」とある。

【引重ねて著たるも】

綿入の相を、夏の生絹の單衣に重ねて著たのである。

【この生絹だに】 この生絹の單衣でさへ。まして綿入の相なんかは勿論といふ意が含まれてゐる。

【あつかはしう】 暑かはしう 暑苦しく。

【格子】 (一五九頁を見よ)

【妻戸】 ツマド 寢殿造の、寢殿・對屋等の四隅にある開戸。物の端を「つま」といふことから「端戸」の意で妻戸といふ。小脇戸。

兩開の板戸で、内側・外側に鐵具がある。開ける時には外の方へ開き、外側の掛金で留め置き、閉ぢる時には内側の掛金でしめて置く。その製作に種々あるが、いづれも厚板を用ひ、鐵具をつけて嚴重にした。寢殿造では、殿内の四方を格子で取圍んであつて、たゞこの妻戸から出入した。

【九月】 ナガツキ 長月。― 菊月・詠月・季秋・暮秋・晩秋。

【三十日】 ツゴモリ (一七七頁を見よ)

【十月】 カミナヅキ 音便で「かんなづき」ともいふ。神無月。― 初冬・孟冬・小春。

【一日】 ツイタチ 「つきたち」の音便。

「ついたち」(月立・朔日・朔)―(一)月の立つこと。その月の初。初旬。(二)月の第一日。こゝは(一)。

の簀子の前などに立てた葎格子。

【葎】 寢殿造の邸宅に於ける屏障具の一で、格子組の裏に板を張り、日光を遮り、風雨を防ぐ爲に、上方に蝶番を設け、水平に開くやうに作つた戸。

【透垣】 スイガイ 「すきがき」の音便。「すいがき」ともいふ。垣の一種。

家屋雜考に「板と板との間を聊づつすかしたる屏なり、また板と板との間へ竹を交へて打付けたるものあり。古圖ども見るに、その造りさまざまあり」とある。

【ふしなみたるに】 竝んで倒れたので。
【ふしなむ】 伏し竝む 伏して竝ぶ。竝び伏す。竝んで倒れる。

【前栽ども心ぐるしげなり】 庭前の植込の草木どもが氣の毒な様子である。

【前栽】 センザイ (二四三頁を見よ)
當時は秋草を山野から掘り取つて來て庭前に植ゑることが流行してゐた。そして前栽といへば秋草の植込を

【椋】 ムク 椋科、むくのき屬の落葉喬木。本州中部以南の山野に自生し、高さ約二〇米に達する。葉は長橢圓形で尖り、縁邊に鋸齒を有する。雌雄一家。球形の核果を結ぶ。

異名―むくのき・むくえのき。

【木立多かる所の庭は、いとめでたし】 木立の澤山ある所の庭は至つて結構である。(木立が多ければそれだけ落葉の趣も深いからである。)

【木立】 コダチ 樹の群がつて生ひ立つてゐるもの。叢樹。林。

【野分の又の日】 野分の風の吹いた翌日。

【野分】 ノワキ・ノワケ 「野分の風」の略。「野の草を押し分けて吹く風」の義。二十日頃の暴風。

【又の日】 マタのヒ (一)翌日。(二)後日。

【立葎】 タテジトミ 板塀の類で外から見透かされぬやうに目隠に設けるもの。土居を置き、間毎に柱を立て一間に二枚づつ竝さまに立てておく白木の格子。又、寢殿造

いひ、秋草に歌を添へて勝負を競ふ前栽合の遊さへ出來るに至つたほどで、上流人士の草花に對する愛好・鑑賞は非常なものであつた。

【心ぐるし】 (一)苦しく思ふ。苦に思ふ。(二)あはれである。かはいさうである。氣の毒である。

【萩】 ハギ 荳科、はぎ屬の多年生草本。莖は叢生して高さ約二米に達する。葉は廣橢圓形又は倒卵形の三小葉から成る複葉。秋日、葉腋又は梢上に多數房狀の紅紫色又は白色の蝶形花を開き、後、莢を結ぶ。變種が多い。秋の七草の隨一で、やまはぎ・しらはぎ等ともいはれ、その他古枝草・野守草等古歌に詠まれた異名は甚だ多い。

【女郎花】 ヲミナヘシ 敗醬科、をみなへし屬の多年生草本。莖高一米内外。葉は卵形又は長橢圓形、羽狀複葉で對生し、縁邊に粗鋸齒を有する。複房狀花序に淡黄色の小花を開く。古來秋の七草の一に數へられ、その風姿は女子の艶姿にたとへられて女郎花の名がある。樺太から臺灣に至る山地に廣く分布。

異名―をみなめし・をみなべし・ちめぐさ。

【よろほひ這ひ伏せる】 よろけて這ひ伏してゐるのは。

【よろほふ】 (一)よろ／＼と歩む。よろめく。(二)まがりくねる。倒れかゝる。

【いとおもはずなり】 甚だ意外である。まことに心外で残念なことである。

【おもはず】 不思議 思ひがけなく。思の外。意外。

【格子のつぼ】 格子の骨と骨とのすき間。格子の目。

【つぼ】 (一)殿舎の間又は垣の内等の一區域の土地。なかには。内坪。(二)格子の縦横の棧の隙間。

【さときはを殊更にしたらむやうに】

【さと】 「さつと」に同じ。(一)俄にひとしきり吹いて来る風が物に觸れる音にいふ。(二)轉じて、軽く疾き意にいふ語。こゝは(一)。

【きは】 「際」とも「木葉」「黄葉」とも解せられてゐるが、前田侯爵家藏本に「木のは」とあるのによれば、「木葉」がよいであらう。

【こま／＼と吹き入れたるこそ】 (昨夜の野分が木の葉を)

こま／＼と吹き入れたのは。(風を擬人化してゐる。)

【こま／＼】 細々 (一)甚だ細かに。(二)委しく。つまびらかに。こゝは(一)で、緻密に格子の目の一つ一つに吹き入れた様子を表してゐる。

【あらかりつる風のしわざともおぼえね】 荒かつた風やつたしぐさとも思はれない。(その優しい細かな趣が、昨夜吹き荒んだ荒々しい野分の所爲とは思はれないといふ意。)

【ね】 (二一七頁「春の夜の歌」の項を見よ)

挿圖「枕草子古寫本」 枕草子の一異本である前田侯爵家藏本の複寫である。藤原爲氏筆又は民部卿局筆といはれてゐるが、少くとも鎌倉中葉以前の書寫とせられてゐる。塚本の系統に近い。

はるはあけほのそらはいたくかすみたるにやう／＼しろくなりゆくやまきはすこしつゝあかみてむらさきたちたる雲の

ほそくたなひきたる夏はよる月のころはさらなりやみもほたるのほそくとひちかひたるまたたゝひとつふたつなとほのかにうちひかりてゆくもおかしあめなどのふるさへをかし秋は

ゆふくれゆふひのきはやかにさして山の葉いとちかくなりたるにからすのねにゆくとして三四二三なとひゆくさへあはれなりましてかりなとのつら

二 解釋

1 主題 自然・人事の情趣。

2 構想 (各段の主題)

(1) 四季それ／＼の焦點的情趣。

イ 春は曙。

ロ 夏は夜。

ハ 秋は夕暮。

ニ 冬はつとめて。

(2) にくきものくさ／＼の情趣。

(3) 風のさま／＼な情趣。

3 敘述

〔春は曙〕——「春は曙をかし」の「をかし」を省略したものであると解せられてゐる。それにちがひない。併し、この一句は「夏は夜」「秋は夕暮」「冬はつとめて」などと共に、一文の骨格を成してゐる點に注意すると、それらの「をかし」が省略せられた理由が存しなくてはならぬ。私には、何よりもそれが、作者の立場に「をかし」の追求が最も

根本的な要請として動いてゐるからだと解せられる。随つて、「一年のうちで、最も情趣が深いのは」といふ如き文主が背景に存立するものとして解すべきではなからうか。さうすることによつて、始めて、所謂省略の理由が説明せられるものではあるまいか。さうなると、いきなり、何のこともなく、「春は曙」と端的に投げ出した所に、千鈞の重みを感じられる。以下、その端的な中心感動を、具體的光景として描叙してゆくことによつて、作者の衷なるものが具現せられて、その表現を完結したのがこの一段である。

〔夏は夜。月の頃は更なり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし〕——作者の持味が早くも全幅の表現を得た感がある。夏の夜の景物が月・闇・雨と取上げられた上に、「更なり」「もなほ」「さへ」の三語を鏤めて、それ／＼の情趣の微妙さを點綴し、定位してゐる筆力は驚歎に値する。

〔秋は夕暮〕——夕日はなやかさが、作者の平常嫌ひな鳥の飛びゆくのをまで美化する。しかもそこに點出せられた鳥の群を「三つ四つ二つ」といつて眼前にその光景を躍如たらしめてゐる筆致は、觀照の透徹さを示して餘蘊がない。更に「まいて」といつて雁を掲出し、日没を報じた後に、風の音、蟲のねを點じた所、觀照的確さに驚かされる。

〔冬はつとめて〕——作者の觀照は自然物のみならず人事にも徹してゐる。しかも嚴冬の朝の寒氣を背景にして「炭もてわたる」光景を捕へ、晝頃のゆるびを背景にした、流れた炭の趣に著眼してゐる點など、その獨自さと鋭さとは、この作者でなくてはと感ぜさせるものがある。

〔にくきもの、いそぐ事ある折に、長言するまらうと〕——美に對する追求が深刻であるだけに、感興を損ふものに對する嫌惡の情も亦烈しい。作者の「いとにくし」といふ斷言には氣魄が充ちてゐる。

〔硯に髪の入りにすられたる。又墨の中に石こもりて、きし／＼ときしみたる〕——如何に澄んだ感覺であり、鋭い神經であるか。筆硯に親しんだ女流作家らしい風事も浮かんで、この作者らしい趣を感じさせられる。

〔ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ〕——蚊の特性を穿ち得て剩す所がない。「ねぶたしと思ひて臥したる」耳にきいてゐる感じが冴えて寫されてゐる。

〔蚤もいとにくし。衣のしたにをどりありきて、もたぐるやうにするよ〕——冷靜な觀察と透徹した感覺とがこゝにも現れてゐる。

〔風は嵐・こがらし〕——感じてはゐながら、はつきりと意識してゐなかつた風に、こんなにも種々の趣があるのかと今更に驚かされる。そしてどれもこれも成程と思はざるを得ない。作者の複雑・多趣の感興もさることながら、それをさら／＼と書き分けてゆく筆の冴えには味はひ盡くせぬものがある。作者の眼は時間的にも空間的にも廣くゆきわたつてゐて、しかもすべてを立體的に描き出す驚くべき創造力を持つてゐる。

〔野分の又の日こそ、いみじうあはれにおぼゆれ〕——自然を直觀的に認識して是非することは誰にも出来る。讀む者を自然の中へ引入れてしまふ所に作者の勝れた力がある。それはいふまでもなく作者の自然觀入の深さであつて、この一節にはそれがよく現れてゐる。作者は吹く風をたゞ現象として認識するだけでなく、風に魂を感じ、更にいへば自ら風そのものとなつて行動してゐる。それでなくてはこれほど明確な印象を與へることは不可能である。

三 批評

枕草子がどんなに勝れた隨筆文學・自然文學であるか、又清少納言がどんなに觀察と描寫とに於て非凡な作家であつたかといふことは今更いふまでもない。本課に抄出したこの三篇によつても、作者の美の追求が如何に烈しいものであつたか、又その觀照眼が如何に冴えたものであつたかが明らかにならるであらう。そして枕草子が詩人の隨筆であるといはれる所以も理解せられるであらう。

三 備 考

一 指導の問題

(一) 枕草子が源氏物語と併稱せられる日本文學の代表的作品である意味からも、又作者の性格と共に、その文體が著しい個性的色彩を有する上からも、まづ文體に熟するまで熟讀させることが肝要である。そして熟讀を基礎にした解釋の完了した上に、作者の個性や平安朝の時代色は固より、更に國民文化の特色ともいふべきものが指摘出来るならば、生徒の學習は一層深い興味に導かれるであらう。更に枕草子が隨筆文學の一作品として、徒然草と如何に異なつた性質を有するものであるかを考へさせることも、既に二回徒然草の文に觸れて來た生徒にとつては、或程度までは不可能のことではあるまい。

(二) 又、源氏物語・枕草子が生まれた時代についての文學史的解説が施されなくてはならないであらう。假令斷片に過ぎないとはいへ、源氏と枕とに接したといふことは、文學史的解説に對する關心を深め、これが理解を成立せしめる上に少なからぬ効果があるであらう。出來得る限り、前課・本課を引證した文學史的考察を、要核的に示すことが肝要な指導であらうと思はれる。

二 參考資料

(一) 五十嵐力博士の枕草子評を新國文學史の中から左に引用する。

從來國文學者が「枕の草子」に許したのは、おもに其の觀察の鋭利なること、其の文章の簡勁なること等であつた。近頃になつては其の筆致の印象的だといふ事が評判になつて居る。是等は皆道理ある批評であると思ふが、吾等の「枕の草子」を讀んで先づ感ずるのは、其の皮肉なる批評的態度である。「枕の草子」は趣味より見たる清少納言の自傳ともいふべきものであるが、之れによると、彼は事物を見るに正面よりせずして常に裏面側面よりし、玄關よりせずして臺所よりした。常套を惡んで奇抜を喜んだ。人の見る所、知る所を言ふを屑しとせずして、人の看過して注意せざる所に鋭い觀察を試みた。彼は尙、辣、奇、鋭にして人の胸にびりつと來るところでなければ、言ふに足らず書くに足らぬと思つたであらう。「語不驚人死不休」とは、杜子美よりは寧ろ清少納言の道はんとした所であつたであらう。故に彼の作には隨所に小氣味のよい所がある。痒きを掻き、藥味を味はへるやうな趣がある。彼れが平凡なる普通事に思ひもつかぬ意味を見出だして辛辣の皮肉を弄ぶ所は、スキフトの心を以てワーズワースの仕事をやつたやうに見える。是等の點に於いては、兼好法師や樂翁公等の足もとにも寄りつけることではない。

吾等が「枕の草子」に對して第二に面白く思ふのは作者の放浪趣味である、無責任なる高見の見物の態度である。彼れは自ら修めむが爲めに生まれず、又人を教へむが爲めにも生まれずして、批評せむが爲めに生まれた。従つて、その奇抜なる觀察批評に誇りを感じざるのを、此の上なき愉快とした。彼れの作には到る所に御殿女中の風があり、野次馬、居候の趣がある。彼れには定著性がない。彼れには定まつた戀人がない。彼れは其の戀人の我れに熱するをも熱せざるをも、冷淡に批評的に見る餘裕があつた。彼れには老いても窮しても駿馬の骨たるを失はぬ奇骨があつた。彼れは如何なる男子とも結婚して家を成すことが出来なかつたであらう。彼れがあつた清原元輔の一人娘でありながら遂に老嬢に終つたのは、その好める趣味に殉じたのであらう。かういふ性質の人は如何に文才があつても、源氏物語の如き脚色のある大作を營々役々として氣長く仕上げるに適しませねば、又仕上げ得る筈のものでもない、彼れが印象式のスケッチ、興來たれば筆を執り、興去れば筆を擱く隨筆物に其の才を發揮したのは、實に其の處を得たもので、彼れは天命天賦に

従つて國文學に於ける隨筆の第一人者となつたのである。

その他、吾等が「枕の草子」及びその作者に對して興味を感ずることを列擧すれば、彼れが他の多くの批評家のする如く、拵へた取置きの人生觀で机上の空な批評をせずして、生活其のもので時世を批評して居るのも面白い。彼れの皮肉的批評の堂々たる態度はないけれども、わるびれず、さつぱりして、褒められようなどといふ慾がなく、褒貶を意に介せずして悠々として皮肉をいふ所も面白い。印象的とは云はれるけれども、精髓を寸鐵式に撮記する手腕と、趣味ある節々をだれぬやうに精寫する手腕とを兼ねたのも面白い。平安朝の物語が多く男子をして女子を弄ばしめて居るのに對し、「枕の草子」がひとり艶男を手玉に取つて女子の爲めに氣焰を吐いて居る所が、遙かに竹取と相應じて面白く、又「女は物うるさがりせず、男に欺かれる爲めに生まれたものぞ」と云つた源氏の婦人觀と相對して面白い。(中略)

要するに「枕の草子」は、其の形式といひ、文章といひ、題材といひ、作者の天賦に相應した作物で、又時代に相應した作物である。かういふ作物は脚色を標準として論ずべきものではなくして、ぼつ／＼と點じたる興書きに趣味を見出だすべき物である。従つて此の點に於いて源氏と相對して平安朝文學の雙璧と云はるべきものであると思ふ。

(二) 註釋書の主要なものを左に掲げる。

- 加藤盤齋 清少納言枕草紙抄 十五卷
- 北村季吟 枕草紙春曙抄 十二卷
- 岡西惟中 枕草紙傍註 十一卷
- 武藤元信 枕草紙通釋 二卷
- 金子元臣 枕草子評釋

一二 道長の幼時

一 解題

一 本文

大鏡大臣列傳中の太政大臣道長の條から抄録した。大鏡は古くは、世繼の鏡・世繼の物語・世繼の翁物語・世繼大鏡・摩訶大圓鏡等の異稱があつた。全篇は、八卷に編せられてゐて、文徳天皇から後一條天皇の萬壽二年(一六八五)に至る十四代の帝紀、及び藤原冬嗣以下道長に至る藤氏の大臣二十人の列傳を主體とし、序には雲林院の菩提講におほやけの世繼と夏山繁樹といふ兩翁が會合して、昔語をするのを筆記した由を敘べて小説的趣向を試み、餘談として、歌話・雑話等を添へた歴史物語である。

著作の年代については萬壽二年説が古くからあるけれども、さう決定しがたい事實の多くが記されてゐるので、その後約百年、鳥羽天皇の御治世、白河上皇の院政時代の作であらうといふことになつてゐる。

二 作者

審でない。尊卑分脈卷七、藤原爲業の條に、「世繼作者」とある爲に、爲業を作者とする説があるけれども、本朝書籍目録假名部には、「世繼四十卷白字多天皇至堀河院御宇」とあるから、これは爲業が榮華物語の作者に擬せられたことを示すものであらう。

かくて大鏡作者については、藤原能信説(萩野由之博士)・源道方説(井上通泰博士)・源經信説(關根正直博士)・藤原俊明説(山岸徳平氏)等が提出せられてゐるけれども、未だ確説がない。

三 採擇の趣旨

平安朝末期に於ける代表作品の一としての、わけても榮華物語と共に歴史物語の一としての、大鏡の一節を採り、次の課の榮華物語の一節と併せて、同代の歴史物語の中心人物たる藤原道長の人物描寫に接しさせる爲に採んだ。教材排列上からいへば、文藝的教材であり、國文學史的次序を追ふものであることはいふまでもない。

二 教材としての研究

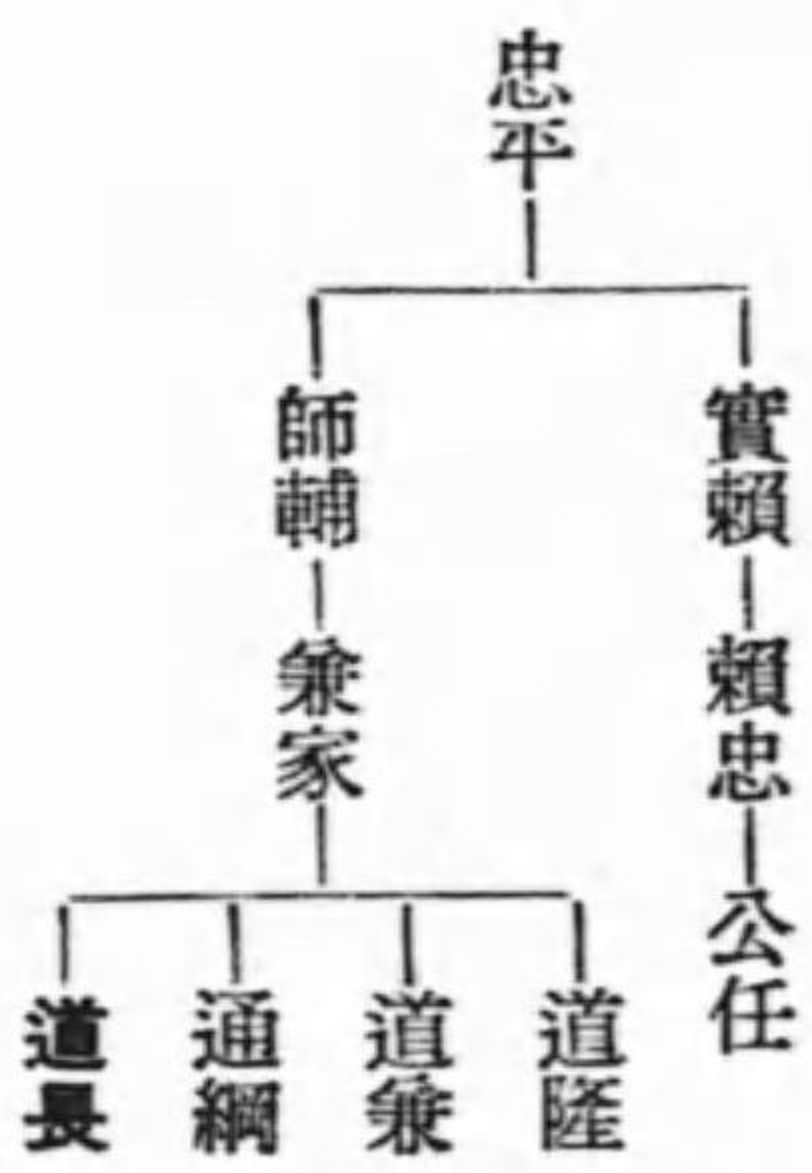
一 註解

【道長】 ミチナガ 藤原道長。兼家の第五子。康保三年(一六二六)生。天元三年(十^五)、從五位下に敘せられ、左近衛少將に任ぜられた。累進して、長徳元年右大臣に進み氏長者となつた。二年四月伊周等が配流せられて天下の權は全く道長に歸し、七月正二位左大臣に進んだ。長保二年その女彰子が一條天皇の中宮に立ち、後一條・後朱雀兩天皇を生み奉り、長和五年後一條天皇の御即位に際して攝政となつたが、翌寛仁元年辭してその子頼通

がこれに代つた。同年太政大臣となり、翌年にはこれも辭して、三年に剃髮し、行觀と號し、後行覺と改めた。萬壽四年(一六八七)歿、享年六十二。その女三人は一條・三條・後一條御三代の后に立ち、又四女嬉子は東宮(敦良親王、後に後朱雀天皇)妃、六女寛子は小一條院の妃となつた。道長自らは後一條・後朱雀・後冷泉天皇の外祖父となり、攝關の職にあること二十一年、藤原氏の全盛時代を現出した。晩年京極の第の東に法成寺を建

てて住んだので、御堂關白、又法成寺入道前關白太政大臣といはれた。

氣性が剛膽で父に愛され、兄弟のうちで早くから頭角を現し、將帥の器であると稱せられてゐた。飯室の尋禪僧正の伴僧の見た彼の相は、「虎子如渡深山峯」といふ人相中第一の勝れた相であつたといふ。その荒馬を乗りこなす所、弓術の勝れた所、すべて平凡な貴公子ではなかつた。それは彼の豪放な書風にも現れてゐる。剛毅・果敢な反面、詩歌の道にも勝れてゐた。道長兄弟及び公任の略系を左に掲げる。



【四條大納言の、かく何事もすぐれ、めでたくおはしますを、云々】

「かく何事もすぐれ」とある所から推すと、その直前に、四條大納言の事が語られてありさうだけれども、事實はさうではない。頼忠の條の、四條大納言が和歌に堪能であつたといふこと、道長が大井川に舟遊をした折、作文・和歌・管絃の三船を用意し、道長から四條大納言に對つて、どの船に乗るつもりかを尋ねられたといふことを承けるものであらう。併し道長と公任とは同年でそれらの事實は幼時ではなくて、遙に後年のことであるから、この意は、後年そのやうな才能のすぐれた人物になつた四條大納言公任の素質をさすものと解すべきであらう。

【四條大納言】 シデウダイナゴン 藤原公任。頼忠の長子。小野宮實頼の孫。道長と同年で康保三年(一六二六)に生まれ、天元三年清涼殿に於て元服し、帝親ら加冠し給ひ、正五位に敘せられた。後次第に累進して權大納言となり正二位に進み按察使を兼ねたが、萬壽元年致仕、三年出家し、長久二年(一七〇一)歿し

た。享年七十六。その爲人は名譽心や自負心が強く、小事にも感情を發して執著したらしく、又、聰敏にして諸藝に通じ、就中詩歌・音楽に長じた。尙、故實にも詳しく、朝儀式目で彼の手になつたものが多い。勅撰集に入つた歌は、拾遺集十五首・後拾遺集十九首・詞花集四首・千載集十一首・新古今集六首、以下凡そ三十三首である。著書には北山鈔・新撰髓腦・和歌九品・金玉集・深窓秘鈔・三十六人撰・前十五番歌合があり、和漢朗詠集も亦彼の撰に成つた。家集に前大納言公任卿集一卷がある。

【おはします】「おはす」に「ます」を添へて一層丁寧にいふ語。まします。

【おはす】 御座す (一)「在り」「居り」「來」「行く」の敬語。(二)動詞に添へて助動詞のやうに用ゐ、敬意を表す。たまふ。おはします。

【ます】 (一)「有り」「在り」「居る」「居り」の敬語。

(二)動詞に添へて助動詞のやうに用ゐ、敬意を表す。

【いかでかゝらむ】 どうしてこんなのであらう。どうしてあゝも諸道に堪能なのであらう。

【影だに踏むべくもあらぬ】 影さへ踏むことが出来さうにない。並び立ち得ないのは勿論、追隨することさへ出来さうもない。

【中關白殿】 ナカノクワンバクドノ 藤原道隆。兼家の長子。永觀二年累進して従三位に敘し、春宮權太夫に任じ、寛和年中權中納言・權大納言を歴て正二位に敘せられ、永祚元年内大臣となり、尋いで左大將を兼ね、翌正暦元年兼家の後を承けて攝政關白となつた。長徳元年(一六五五)病に當つては、弟道兼に攝關の地位を譲渡することを欲せず、子伊周をして公事の攝行とならしめたが、この年間もなく薙髮し、次いで四月歿した。享年四十三。世に中關白・二條・南院などといつた。

【栗田殿】 アハダドノ 藤原道兼。兼家の第四子。資性雄傑、策略に富んだ。花山天皇の御時藏人左少辨となつて近侍し、天皇に禪位を勧め奉り、一條天皇擁立に力を致

【大入道殿】 オホニフダウドノ 藤原兼家。師輔の三男。天慶元年(一六〇六)十歳で昇殿、諸官に歴任して、冷泉天皇の御代兄兼通を越えて従三位中納言となり、更に圓融天皇の天祿元年、右近衛大將を兼ね大納言に進んだが、兄兼通の憤る所となり、互に憎んで攝關の地位を競争したが、遂に兄に先じられ、又、大將を奪はれて治部卿に左遷された。兼通の歿後、天元元年右大臣となつてからも、關白の地位を期待したが得られず不平のうち、籠居したこともあつたが、寛和二年一條天皇御即位の後、外祖父として攝政となり従一位に敘せられ、次いで太政大臣に任ぜられた。正暦元年(一六五〇)攝政を辭し、關白に任ぜられ、次いで薙髮して如實と號し、同年七月歿した。享年六十二。世に東三條殿ともいつた。

【入道】 ニフダウ (一)佛道に歸依すること。(二)在家のまゝで剃髮・染衣したもの。(三)往昔、佛道に入つた三位以上の人の稱。(四)坊主頭のもの稱。(五)坊主頭の妖怪。こゝは(三)。

して天皇即位後權大納言となり、次いで右大臣に進み、長徳元年五月兄道隆の歿後これに代つて關白となつたが在任七日にして歿した。享年三十五。世に七日關白・栗田關白・二條關白などといつた。

【げにさもとやおぼすらむ】 ほんたうにさうも思はれるであらう。父入道の(公任を)羨ましく思はれるのも尤だ。

【入道殿】 こゝでは、道長をさす。
【影をば踏まで、面をやは踏まぬ】 影なんか踏まないで面を踏んでやる。

【で】 「すて」の約。打消して上下を接続するに用ゐる。

【面】 ツラ
【やは】 反語の助詞。係の助詞「や」に意を強める助詞「は」を重ねたもの。

【まことにこそさおはしますめれ】 ほんたうにさうおありのやうである。面を踏んでやるといはれたが、今では事實さうなつてゐられるやうである。

【さるべき人】 然あるべき人。こゝでは、道長のやうに後年えらくなられる方、の意。

【心魂】 ココログマシヒ こゝろ。たましひ。根性。精神。

【御守】 オンマモリ 神佛の御守護。

【こはきなめり】 強いやうである。強いのであらう。

【こはし】 強し (一) 強い。猛い。(二) するどい。烈し。

【なめり】 「なるめり」の略。(一四八頁「侍らざめり」の項参照)

【おぼえ侍るは】 思はれますよ。

【は】 感動の助詞。

【花山院の御時】

花山天皇の御在位は永觀二年(一六四四)十月十日から寛和二年(一六四六)六月二十三日に至る足掛三年であるから、この話のあつたのは、寛和元年若しくは二年の五月のことになるが、二年六月には御出家になつたのであるから、恐らく元年であらう。假りに元年

としてみれば、この時天皇は御十八歳、中關白殿(道隆)は三十三歳、栗田殿(道兼)は二十五歳、入道殿(道長)は二十歳である。

【花山院】 クワザンキン 第六十五代花山天皇。御諱は師貞。冷泉天皇の第一皇子。御母は藤原伊尹の女懷子を悲しみ、遁世の御志深く、藤原道兼が隨從して共に入道せんことを請ひ奉つたのに隨ひ給ひ、寛和二年六月密に宮中を出でて花山寺に向かひ、途に位を皇太子に譲つて花山寺で剃髮し給うた。併し道兼は父兼家に訣別する爲にと暇を請うて去り、天皇は始めて道兼に謀られたことを悟らせられた。時に御年十九。御在位二年。御出家の後、名山・古刹を遍歴し給うた。寛弘五年(一六六八)崩御、寶算四十一。山城國葛野郡衣笠村紙屋川上陵に葬り奉つた。和歌を好み給ひ、拾遺和歌集はその御撰といふ。なほ御在位は、道長十九歳の時から二十一歳の時までである。

【下つやみ】 シモつやみ 月の下旬(二十日)の闇夜。

【おどろくしく】 「おどろし」を強めていふ語。驚くばかりものすごく恐しく。氣味が悪いやうに。

【おどろし】 おどろかれるさま。おそろしい。仰山である。すさまじい。

【かきたれ】 亂れて。

【空(雲)がかきみだれて、雨の降る】意とも、「雨が

【さうくしく】

【さうくしく】 「さびくしく」の音便。あるべき物事がなくて、物足りない意にいふ語。物たりない。ものさびしい。

【殿上】 テンジャウ (一)「殿上の間」の略。内裏清涼殿の南廂に在つて、公卿・殿上人の祇候する所。殿上・殿上侍・上侍・侍雲上・雲露とも稱する。(二)殿上の間に昇ることを許されること。(三)「殿上人」の略。(四)「藏

人所」の略。(殿上の事を掌る故にいふ。)こゝは(一)。

【申しなり】 話がさういふ方に移つて來て。

【なり】 は上の「事どもなどに」をうける。

【むつかしげなる】 氣味悪いやうな。

【むつかし】 (一)鬱陶しい。不快である。(二)いとほ

しい。面倒である。(三)氣味が悪い。おそろしい。

【人がち】 人数の多いこと。

【けしきおぼゆ】 こゝでは、むつかしげなけしきを感じる、もの恐しい氣持がする、の意。

【物離れたる所】 モノバナれたるトコロ 人氣の遠い所。

【一人往なむや】 獨りで行くか。獨りで行けるか。

【え罷らじ】 えマカラじ どうも参りかねます。

【罷りなむ】 参りませう。

【なむ】 (一五二頁「罷りなむとする」の項を見よ)

【さる所おはします帝】 さういふ所のおありになる天皇。

さやうな事のお好きな天皇。

【豊樂院】 プラクキン 大内裏八省院の西にあつた一郭で、節儀の宴會を行はせられた所。

南北百三十六丈四尺、東西五十六丈、本經六尺、末經四尺、高さ一丈三尺の牆を以て圍み、殿堂の配置は略八省院に類し、構内に九堂・二樓・十七門あり、正殿を豊樂殿といひ、北方にあつて南面してゐた。桓武天皇大内裏御造營の最後の建物で、その後屢々修理せられたが、後冷泉天皇の康平六年炎上してまた再造の事なく、從來豊樂院で行はれた儀式は八省院又は紫宸殿で行はれるに至つた。(參考資料参照)

【八省院】 は又、中臺・朝堂院・大極殿院等ともいひ、大内裏の南中央に在つて、内裏の西南に位し、繞らすに複郭を以てし、構内に十三堂・四樓・二十五門ある。
【仁壽殿】 ジジュウデン・ジジュデン (拾芥抄には「じんじゆでん」と讀んである。) 内裏御殿の一。内裏の中央に位するので中殿といひ、又清涼殿の東に在るので東殿と

いふ。初めは天皇の常の御座所であつたが、清涼殿が御座所となつてからは、内宴・相撲・蹴鞠・觀音供などが行はれる所となつた。

廣さ東西七間、南北六間の檜皮葺で、殿の中央の東西七間、南北四間を身舎とし、中に一丈の馬道を通じる。四方廂で、東西兩面に廂があり、南は廣廂でその南簀子を経て露臺があり、後殿並びに紫宸殿に通じる。北は同じく簀子を経て承香殿との間に露臺がある。(參考資料参照)

【大極殿】 ダイゴクデン 大内裏八省院即ち朝堂院の正殿。天皇が臨御になり御政治を見給ふ所、又國儀・大禮をも行はせ給ふ所で、古くは「大安殿」又「おほやすみどの」ともいつた。

平安京の大極殿は南面し、應天門を正門とした。東西十一間・南北四間(九間二面、廂を加へて二間四面)、正面に石階三所を備へ、屋根は碧瓦を葺いて鴟尾を擧げ、内部は礎石を敷き、中央の間に高御座を立てた。

大極殿の名が始めて書に見えるのは皇極天皇の四年(一三〇五)である。平安京の大極殿は延暦十五年に落成、その後二回の炎上にはその都度再營せられたが、第三回の炎上、即ち安元三年(治承元年)の焼亡の後には再營の事なく、桓武天皇以來三十代、三百八十餘年で全く荒廢に歸した。(參考資料参照)

【よその君達】 他の御子弟。

【君達】 キンダチ 「きみたち」の音便。(一)諸王。おほきみ。(二)攝家・清華等貴族の子息又は息女。

【便なき事をも奏してけるかな】 不都合なことを申し上げたものだなあ。

【便なし】 ビンなし (一)ついでがわるい。折がわるい。不便な。(二)似あはない。あるまじきことである。不都合である。(三)いたはしい。不便である。かはいさうである。こゝは(一)。

【承らせ給へる殿ばら】 勅命を蒙つた殿達。こゝでは、道隆・道兼をさす。

【承る】 ウケタマハル (一)仰を受ける。(二)謹んで承諾する。(三)様子を聞く。傳聞する。こゝは(一)。
【ばら】 儕・原 (接尾) 人に關する名詞に添へて、複数を表す。古くは敬意を拂ふ人につけるのが普通のやうである。ども。めら。たち。ら。

【益なしと思したるに】 弱つたことだと思ひになつてゐられたのに。

【益なし】 ヤクなし かひがない。效がない。不用である。むだである。つまらぬ。

【私】 ワタクシ こゝでは「公」に對する「私」の意。
【この陣】 近衛の陣をさす。

【近衛の陣】 は紫宸殿前の東西に、即ち左近陣は日華門内に、右近陣は月華門内に在つた。

【陣】 チン こゝでは、禁裏内に於ける衛士の詰所。
【陣】 チン こゝでは、禁裏内に於ける衛士の詰所。

【吉上】 キチジャウ 「吉祥」とも書く。六衛府の下役で、内舍人の下、衛士・仕丁の上に位し、閤門の掖に候して

警衛したもの。

【まれ】「もあれ」の約。「……であるならば、それでもよい」の意。

【瀧口】 タキグチ 禁中を護る武士の稱。その陣が、清涼殿の東北方の御溝水みほみづの落聚する所即ち瀧口にあつたのでかく稱した。藏人所に屬し、勤番宿直して禁中の警備を掌つた。

【昭慶門】 セウケイモン 「北面の外門」「北殿門」ともいふ。八省院二十五門の一。八省院の北の正門で、車駕臨御の時には、この門から入御になるのを例とした。

【仰言たべ】 勅諭をお下し下さいませ。

「たぶ」 賜ふ 「たまふ」に同じ。「授く」「與ふ」の敬語。

【證なきこと】 ソウなきこと 實際殿内へ入つたかどうか證據がないの意。

【手箱】 テバコ 手廻りの小さい調度などを入れる匣。

【小刀申して】 小刀を下さいとお願ひ申して。小刀を申し

賜はつて。

【小刀】 カタナ 「刀」の小さいもの。

【申す】 (一)「いふ」「告ぐ」の謙語。(二)「申し請ふ」の略。願ふ。請ふ。(三)「爲す」の丁寧語。

【いま二所】 いまフタコロ 外の御二方。こゝでは、道隆・道兼をさす。

【いま】 こゝでは、このうへに、更に加へて、もう、の意。

【所】 人を數へる敬語。はしら。方。

【にがむく】 にがみく。苦い顔をしながら。澁面をつくつて。しぶくと。

古くは終止形を二つ重ねて「……しながら」の意を表した。

【子四つ】 今の午前一時三十分。

一時を四刻に分ける。子についていへば、その一刻は午前零時、二刻は零時三十分、三刻は一時、四刻は一時半であらう。(一九四頁の「戌の時」の項参照)

【奏して】 ソウして こゝでは、時を奏して、即ちその時刻となつて、の意。

時を奏するのは近衛の官人の役であつた。

【丑】 ウシ 今の午前二時。

【右衛門の陣】 ウエモンの陣 宜秋門。右衛門府の武士がこの門外に南北の兩舎を設けて陣をはつたのでかく稱した。内裏外郭十二門の一。西面の中央にあり、内郭の陰明門に對する。(參考資料参照)

【右衛門】 「右衛門府」の略。禁中の守衛、諸門の開閉、非違の巡檢、不法の糾察及び門籍・門榜等を掌つた役所。

【承明門】 ショウメイモン 内裏内郭十二門の一。南面の正門で、外郭の建禮門に對する。(參考資料参照)

内裏には二重に郭を繞らしてあり、豊樂院や大極殿はその郭外にあつたから、これらの門を出て行かなければならなかつたのである。

【それをさへわかたせ給へば】 それ(出口)まで別々にな

さつたから。

【しかおはしましあへるに】 その通りに(勅諭通りに)各、おいでになつたところが。

【宴の松原】 エンのマツバラ 内裏の西方、豊樂院の北方にあつた廣場。

【その物ともなき聲】 何物とも指し示せない聲。えたいの知れない聲。あやしい聲。

【なし】が「と」を受けて用ゐられた時は、その間に「指し示すこと」とか「言ふこと」「思ふこと」などの語を補つて解する。

【すちなくて】 せんすべなくて。何とも仕方なくて。こゝでは、怖しさに堪へずして、の意。

【すちなし】 術無し 「すち」は「術」の吳音「じゆち」の約。「じゆつなし」に同じ。なすべき方法がない。仕方がない。困却する。

【露臺】 ロダイ 單に「臺」ともいふ。演舞などの爲に設けた屋根のない臺。こゝでは、紫宸殿の北廂と仁壽殿の

南廣廂との間に在る床張の場。

【外まで】 トまで

【東面】 ヒガシオモテ 東側。

【砌】 ミギリ こゝでは、軒下の石などを敷いた所。

【簷とひとしき人】 簷と同じ高さの人。簷に頭が届くやうな大男。

【簷】 ノキ 「軒」「檐」「宇」とも書く。屋根の葺きおろしの端の外部に張り出た所。

【ものも覚えで】 前後の辨へもなくなつて。正氣もなくなつて。

【身の候はばこそ仰言も承らぬ】 命があつてこそ仰せもお受け出来よう(命を失つては御奉公が出来ない)。

【各々】 こゝでは、道隆・道兼をさす。

【いかゞとおぼしめすほどにぞ】 どうしたかと(天皇が)お思ひになつておいでになる丁度その時に。

【のどやかに】 「のどかに」に同じ。平和に。靜かに。落著いて。悠然と。

【御刀に削られたるものを取具して】 御刀に、削り屑らしいものを添へて。

【取具す】 トリグす (一)ともなふ。ひきゐる。(二)そろへる。あつめる。

【高御座】 タカミクラ (一)天皇の玉座。中古以來大極殿又は紫宸殿に安置し、御即位・朝賀・蕃客引見等の時に、乗御あらせられた。三層黒漆の繼壇(廣さ東西二十四尺、南北二十二尺、高さ三尺)に、朱漆の階段・勾欄があり、上に八角造の御座を置く。頂に金鳳があり、その他大小の鏡、玉、旛、帳などをかけ、金碧、華麗を極めたもの。(二)轉じて、天皇の御位。こゝは(一)。

【高】 こゝでは、尊稱。

【つれなく】 平氣で。

【つれなし】 (一)氣強くそしらぬさまである。平氣である。(二)なさげがない。情愛がない。無情である。

【あさましくおぼしめさる】 おあきれ遊ばされた。御驚歎になつた。

【あさまし】 (一)驚く程に甚だしい。いみじい。ゆゑしい。(善惡ともにいふ)。(二)興ざめる程である。あきれ程である。

【こと殿たち】 他の殿方。こゝでは、道隆・道兼をさす。

【今にも】 今でも。今になつてもまだ。

【感じのゝしられ給へど】 感心してほめはやされるけれども。

【藏人】 クラウド 「くらびと」の音便。令外の官。藏人の職員。

【藏人所】は、嵯峨天皇の御代に置かれ、機密の文書や訴訟の事などを掌つたが、後、天皇の御起居に供奉し、傳宣・進奏・除目・節會の儀式その他宮中に於ける大小の雑事を掌つた。

【つかはして見よ】 持つて行つて見よ。

【つかはし】を「つがはし」と濁つて「つき合はし」の約としたり、又清んで「つけ合はし」の約と解した

二 解釋

一一 道長の幼時

りする向もあるが、もしその意味ならば、「合はす」は下二段活用であるから「合はせ」とならなければならぬ。故に今は「遣はし」と見ておく。

【けさやか】 「さやか」に同じ。きはだつて著しいさま。あさやか。きはやか。

【け】 (接頭) 殆ど意味がないが、やゝ意を強める場合もある。「け壓さる」「け疎し」

【おぼしき事】 心に思はれる事。心に浮かんで來る想念。

【おぼし】 (形) 自然に思はれるさま。

【げにぞ腹ふくるゝ心地しける】 全く腹の中に物が停滞してゐるやうで氣持の悪いものでありますわい。

【腹ふくる】 こゝでは、言ふべきことを言はないで心に鬱積する、の意。

【昔の人は、ものいはまほしくなれば、云々】 故事があるであらうが詳でない。

1 主題 幼時から傑れてゐた道長の膽力。

2 構想

- (1) 英發の公任に對する道長の負けじ魂(初―八七ノ七)。
 (2) 幼時に示された道長の膽力(八七ノ八―終)。

イ 五月雨の降る一夜、花山院の御前で、兄二人と共に物離れた所へ遣はされた道長。

ロ 兄二人は、途中から引返して笑はれたのに、美事に成し遂げて天皇を始め奉り人々を感歎させた道長。

3 敘述

「……中關白殿・栗田殿などは、げにさもとやおぼすらむと、はづかしげなる御氣色にて、物ものたまはぬに、この入道殿はいとわかうおはします御身にて、「影をば踏まぬ」とこそ仰せられけれ」——兄二人に對照して書かれてゐる所に、兄弟・叔姪が立身を競つた時代色が窺はれる。それにしても、年少にも拘らず、大膽不敵に、父の言葉と兄の様子とに反撥して奮然と言ひ放つてゐる氣概を見るべきである。「面をやは踏まぬ」といふ思切つた言葉には、彼の面目の躍如たるものがある。後年の道長は既にこの頃から出来てゐたのである。

「……「え罷らじ」とのみ申し給ひけるを、入道殿は、「いづくなりとも罷りなむ」と申し給ひければ、……」——こゝにも亦、道長の傍若無人な爲人の片鱗が現れてゐる。兄二人の「え罷らじ」といふ答は、いよく道長の負けじ魂を際立たせてゐる。

「證なきこと」と仰せらるゝに、「げに」とて、御手箱におかせ給へる小刀申して立ち給ひぬ」——自ら期する所があればこそ、かく多くを言はずに起つたのである。小刀を持つて出て行くそのときばきとした態度には並みゐる人々は恐

らく呆氣にとられてゐたことであらう。文の運びの上にも強く讀者の興味を繋ぎとめるに足る用意が見える。不言實行の態度に感壓されて兄達も「にがむく」後について出て行つたのである。

「……入道殿はいと久しう見えさせ給はぬを、いかゞとおぼしめすほどにぞ、いとさりげなく、事にもあらずげにませ給へる」——事の成行を、帝を始め奉つて一同窺つてゐられる。そこへ道長が歸つて來た。見ると「いとさりげなく、事にもあらずげ」に見える。これが「その物ともなき聲どもの聞ゆるに、すぢなくて歸り給」うた中關白殿、「仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えて、「身の候はばこそ仰言も承らめ」といつて立歸り給うた栗田殿に比せられてゐるので、いよく驚かれる。「いかに」と問ひ給へば、木の削り屑を取り出して「いとどやかに」又「つれなく申し給ふ」といふ風である。「いとあさましくおぼしめさる」るのも無理はない。

「その削り跡はいとけさやかにて侍るめり」——この一句は事柄のあつた時と敘述せられた時との距離を明確に示すもので、この書の歴史物語的性質を印象させる上に有力な効果をもつてゐる。

三 批評

藤原道長は國史の上にならり大きく現れてゐる人物である。殊に權勢・榮華を極めた點では絶倫の人物である。その道長の幼時の一挿話であるけれども、よく彼の人柄を浮かび上らせてゐる一話柄である。歴史書ながら藝術味豊かな大鏡の中でも有數の一篇である。史實の記述のみでなく所々に交へた批評的言辭がよく利いて、文學作品としての資質を形成してゐることが著しい。

三 備 考

一 指導の問題

(一) 平安朝末期の文學が回顧的になつて、道長時代の榮華を、わけても道長の權勢と榮華を描くことに創作の中心が存したことは著しい事實であつた。大鏡及び榮華物語はこの時代の代表作品である。この點で源氏物語や枕草子が何れも眼前の時代に創作の素地を見出してゐるのと甚だしい懸隔がある。そしてそこに時代の推移が見え、創作欲の衰退が示されてゐる。この點が適切な箇所を指導せられなくてはならないであらう。

(二) 文中、難解な語句の多いこと、的確な言ひ換への不可能な語のあることは前二課にまさるとも劣らないであらう。それを全文脈の上から、全文の文律の上から解釋してゆくことは、かなり困難な學習作業である。この點を豫想して、全力を以て當らせることが肝要である。併し、讀みに熟し、註解に苦心を重ねることによつて、漸次理解の緒口がついて來るであらう。そこで、與へる指導が、始めて眞の指導になる。本課に於ける難解語句の難解な點はどこにあるか、随つて註解指導の苦心はどこに要せられるか。それは主として語彙の上で、又語法の上で、特殊なものが介在し、しかもその特殊なもの個性的に生かきける域にまで至つてゐないことに主要原因が存する。つまり一般的・辭書的註解でも達せられず、前後の關聯から規定せられ、個性的な理解から推斷することも出来ない語彙や語法が介在して、理解の透徹を妨げる。(一)「げにさもとやおぼすらむと」(八七ノ四) (二)「五月雨も過ぎて、いとおどろく／＼かきたれ雨のふる夜」(八七ノ九) (三)「便なき事」(八八ノ一〇) (四)「益なしと」(八八ノ一一)等は説明が出来るには出来るが、どうもはつきりしないものが残る。尤も(一)の「さもとや」は「さもや」になつてゐる本があつて、さうすれば意味がよく通ずる。(二)

の「かきたれ雨のふる夜」も「かきだれ」か「かきたれ」かが問題であるが、何れにしても、「空が」といふ主語を補つて解すべきか、「ふる」を限定してゐる副詞句ととるべきか決定的でない。(三)(四)の一般的意味は明瞭であるけれども、この位置にしつくりした解釋が困難であるといふ類がそれである。

(三) 作者の道長に對する是非の批判は何れにしても、道長の非凡な一性格を稱揚してゐることは確であるが、最後の結び「末の世にも見る人はなほあさましき事にぞ申ししかし」といふ一句は生徒の耳底にも深くしみ込むであらう。道長の性格を歴史的教材・教訓的教材として學ぶことも可能ではあるが、本課學習の直接目的は、大鏡の作者が素樸の中にも自らにじみ出てゐる文學的構想とそこに介在する縦横の批評眼によつて描出した歴史物語を讀ませ、その表現の陰影に參入して、平安朝文學を鑑賞し、理解する力を養ふ所に存しなくてはならぬ。

中に於て、最も目立つのは人物描寫である。道長の人物を描かうとして二人の兄を描いてゐるのであるが、これが効果は大きい。事毎に道長との對照を念頭に置いて表現してゐるのである。又花山院の御風格も偲ばれる。「さる所おはします帝にて」といふ説明は、「各々立歸りまわり給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふ」といふ敘述によつて生きて來、「いとあさましくおぼしめさる」といふ風に御心持の推移をも言表し得てゐる。又道隆・道兼の心持を推察して、「羨ましきにや、又いかなるにか、ものもいはでぞ候ひ給ひける」といつてゐる所など、誠に心理描寫の域に入つてゐるといひ得よう。

二 參考資料

(一) 大鏡の價值について五十嵐力博士が日本文學講座(新潮社)に敍べられてゐる點を左に抄記する。

第一は「古事記」の魂を復活させた點にあると思ふ。「古事記」の魂とは、其の國の歴史を國語で書き、其の時代の歴史を時代語で書くことをいふのである。

- 第二は、入興可讀の連續的風味を備へた事である。興味を以て先から先へと続け讀みの出来るやうに書いて居る事である。
- 第三は、支那の歴史編纂法を應用した事である。
- 第四は、劇的對話の趣向による統一である。
- 第五は、謂はゆる猿樂魂の加味である。
- 第六は、比較的公平で、氣骨があり、同情のある事である。
- 第七は、記事が正直で瑕瑜共に擧ぐる事である。
- 第八は、文章に無類の特色があつて、變化に富み、美も力もある事である。

(二) 小島政二郎氏の「大鏡鑑賞」(新潮社、日本文學講座) から引用する。

「源氏物語」を讀んだ人は、光源氏の君の喜怒哀樂の感情が、柔軟な筆で微細に描き出されてゐるのに一驚を喫しただらう。しかし、要するに、彼等の心の動き方の相違を自覺することによつて、讀者は結局するところ光源氏の君は貴族で、自分は平民だと云ふ越えることの出来ないその間の間隙を感じずにはゐられまい。同時に、千年の隔たりから来るいろいろな縁遠さをも味はねばならぬだらう。あれ程傑出した筆で活寫されてゐても、全身を以つて光源氏の君の生活に全き同感を持つことの困難を感じずにはゐられぬだらう。さう云つて悪ければ、心の幾部分かで同感しながらも、心の幾部分かが遊離してゐることを否み得ないだらう。また、光源氏の生活感情は書けてゐると思へても、性格は茫漠として捉へ所がないと云ふ歎を抱かずにはゐられぬだらう。光源氏の君は我々の遠い祖先の一人には相違ないとしても、時代や境遇や生活や目的や人生觀や信仰などを異にした一個の戀をあさる「他人」に過ぎないと考へずにはゐられぬだらう。

それに比べると、「大鏡」の中に肖像を描かれてゐる藤原家の人々は、一人として例外なしに時所を忘れしめる程我々に近い人間性を持つてゐる。彼等は平安朝の空氣を呼吸してゐる大宮人——殊には攝政關白の高位にある貴族達には相違ないが、同時に衣服頭髪を改めさへすれば、今日の我々と寸分違はない心を持つた人間である。だから、彼等の行動や心理には悉く同感が持てて愉快である。彼

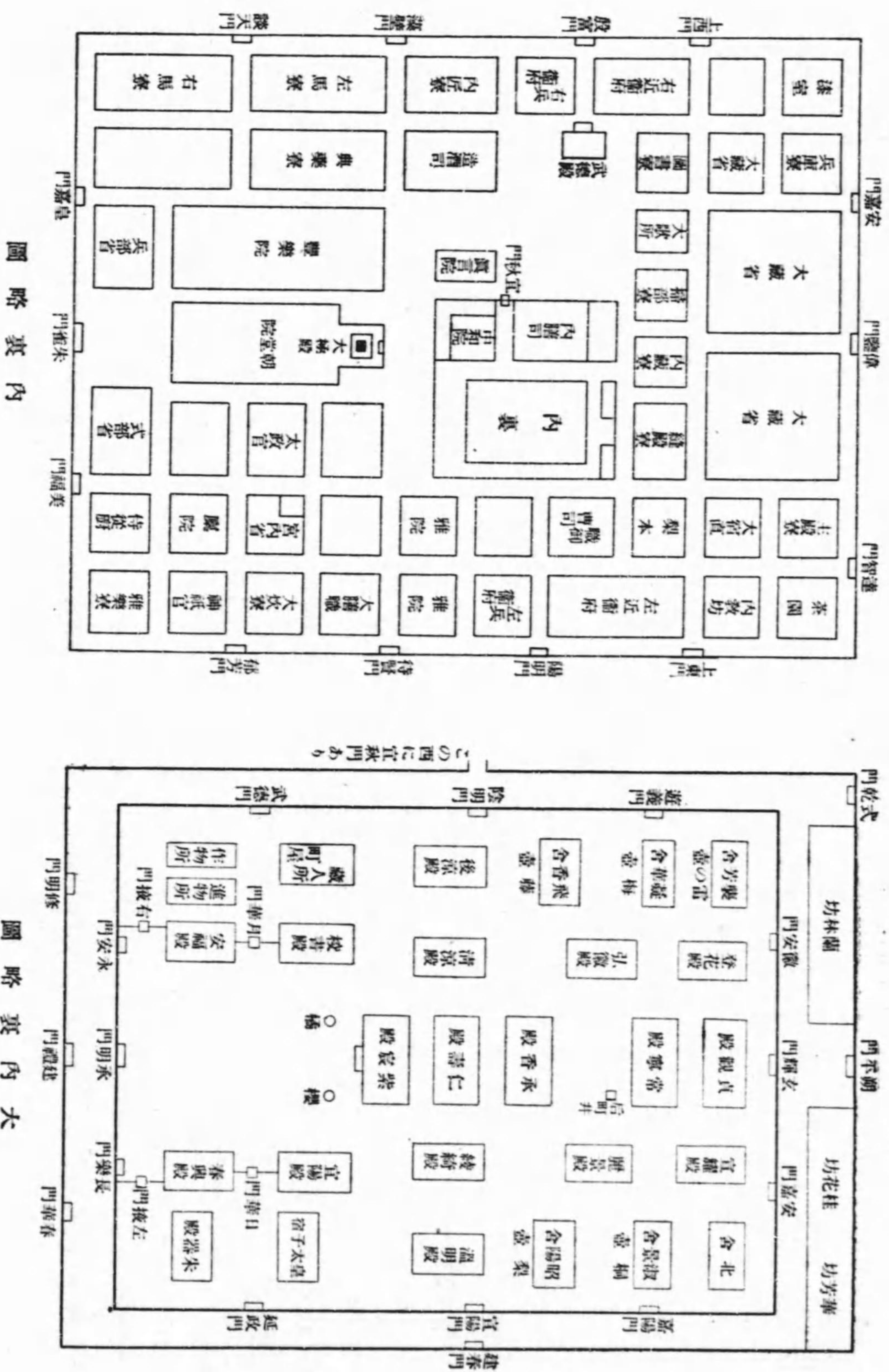
等の心の隅々まで自分の心が浸透して行つて同化する喜びを感じずにはゐられぬ。

兎に角、これ程性格的に多くの人間の活寫されてゐる文學書を同時代に於て發見することは困難であらう。平安朝の文學は、一二の例を除けば、殆んど全部無常觀的哀感が話全體を柔く包んでゐる。その哀感曲を、消極的な調和のうちで奏せようとする意圖の下に、調和を破るその他の現實の諸相がすべて犠牲に供されてゐる。平安朝の作家達は、人生の夕暮を最も愛し、秋の色を湛へずにはどんな話をも物語ることが出来なかつたのだ。その結果、私達は單調と息詰まりとを覺えずにはゐられぬ。人生の諸相が消されて、哀感の霧が茫と立ち籠めてゐる感じだ。さう云ふ中であつて、「大鏡」の上だけは霧が霽れてゐる。そこだけは、客觀的に人間の姿が幾つも描かれてゐる。しかも、その人間の描き方たるや、頗る効果的である。「榮華物語」の作者の觀察眼が長篇的だとすれば、「大鏡」の作者の觀察眼は短篇小説的である。「榮華物語」の作者が、多くの素材の中からあれもこれも捨て兼ねてゐるのに反して、「大鏡」の作者は惜しげもなく、最も特色的な一二を除いて、他を全部捨てて顧みない。だから、短い描寫のうち、その人物の性格が躍如としてゐる。「榮華物語」と比較して讀んで行くと、曾つてその取捨選擇を誤つてゐないのに感心しずにはゐられぬ。その人物の性格の表裏を語るに足る素材は、一も見逃してゐないのである。同時に、少しでも性格を模糊とさせる虞れのあるものは、少し惜しいと思はれる素材まで捨てることに眷戀としてゐない。私はそこに、作者の犀利な觀察と明晰な頭腦と、短篇小説的才能との美しい映發を見出さずにはゐられぬ。

(三) 註釋書の主要なものを左に掲げる。

- 大石千引 大鏡短觀抄 五卷
- 落合直文 大鏡詳解 四冊(和本)
- 小中村義象

(四) 本課及び一七「光賴卿の参内」を讀むには、當時の大内裏(宮城)及び内裏(皇居)の有様が解つてゐなくてはならないから、次にその略圖を掲げる。



一三 法成寺の造營

一 解題

一 本文

榮華物語上編、第十五「疑」の中の一節を抄出した。

榮華物語は、世繼・世繼物語等の異稱を有し、大鏡と共に、平安朝末期に於ける歴史物語の一つである。四十卷四十冊で（外に後人の作に成る目録・系圖一卷がある）、契沖によつて上編三十卷、下編十卷が立てられて以來、これに随ふ學者が多い。大鏡が紀傳體であるのに、これは編年體である。

内容は、宇多天皇から堀河天皇の寛治六年二月まで十五代二百年間にわたつてゐるが、その中心は道長の榮華を讚歎することにある。宇多天皇の御代に起筆してゐるのは、六國史が光孝天皇の御代で終つてゐるのを繼ぐ意に出でたものである。三條西公正氏は岩波講座「日本文學」に於て、在來の上編三十卷、下編十卷の別は作者による分ち方であるが、著作の目的からいへば、上編二十卷、下編二十卷で、上編は道長の榮華を敘し、下編は世繼を敘したものであるとしてゐる。

二 作者

藤原爲業説、赤染衛門説、上編赤染衛門・下編出羽辨説等がある。上編の最終記事は、萬壽五年（一六八八）以後長元七年以前の六年間、下編のそれは、寛治六年（一七五二）以後嘉承二年以前の十五年間であるから、これによつて成立の

年代が考へられなくてはならない。

三 採擇の趣旨

前課について、道長晩年の榮華・權勢を敘した歴史物語として榮華物語を讀ませ、平安朝末期文學の特質を理解せしめようとする。

二 教材としての研究

一 註解

【法成寺】 ホフジャウジ 今廢絶。藤原道長の創建にかゝる。京都近衛の北、京極の東、現今寺町から東、荒神口から北に當る地はその舊址である。寛仁三年（一六七九）道長はかねての發願によつて無量壽院（阿彌陀堂）を造營して翌年三月その落慶・供養が行はれた。更に翌治安元年六月金堂・五大堂を造營し、翌年七月天台座主院源を導師として供養し、これを法成寺と改稱した。その他藥師堂・講堂・十齋堂・釋迦堂等の主要建物は道長の薨する萬壽四年（一六八七）に至る間に完成し、爾後康平元年二月法成寺大焼亡まで三十八年間營々として造營を

續けられた。その造營に際しては、諸國司に珍材・美石を貢せしめ、資材を盡くして莊嚴・善美を極めた。就中無量壽院はその極美を粹め、道長の最も力を濺いだもので、法成寺の信仰中心を形づくり、康平元年炎上の後にも五大堂と共にいち早く復興せられてゐる。これは當時に於ける貴族の彌陀信仰を物語るもので、當代の佛寺建築に於ても阿彌陀堂の建造はその一特色をなしてゐる。尙、法成寺は康平・永久年間前後二回の火災に遭ひ、その都度再建せられたが、金堂は貞永年間に倒れてまた修理せられず、徒然草にもその荒廢の狀を記してあ

る。(二)「只今の一念」参照)

【造營】 ザウエイ 家をつくりいとなむこと。(多くは大家・高樓・社堂などにいふ)。

【今は御心地例さまに云々】

主語は「殿のお前」即ち道長である。

榮華物語の「疑」の巻の前半、本文の前につゞく部分の梗概を記せば次のやうである。

道長は寛仁三年(四十五)三月十七日に發病し、一時は恢復も覺束なく思はれた。そして主上・東宮を始め奉り、宮々・殿原の御修法・御讀經が數を盡くして行はれるなかに、自らはたゞ滅罪生善の法を行はせ、念佛の聲のみを絶えず聞きたいと願つてゐた。二十一日遂に院源を召して出家したが、この頃から次第に快方に向かつて、三月の晦日にはもう入内してゐられる御女の方々に例年の御更衣の物を奉るといつて、「唐衣花の袂に脱ぎ更へよ我こそ春の色はたちつれ」と詠む程になつた。そしてこの大患によつて、かねての宿願

の、御堂を立てて心靜かに住みたいといふ念は一層強くなり、今はそれが此の世に於ける唯一の願となるに至つた。

【例さま】 レイさま いつものさま。常態。れいやう。

【御堂の事】 こゝでは、法成寺造營のことをいふ。

【御堂】 ミダウ (一)佛を安置した堂の敬稱。(九二ノ九・九四ノ三及び五) (二)法成寺の敬稱。(九二ノ三及び五・九三ノ四及び九・九五ノ一及び二) (三)「御堂關白」の略。藤原道長。

【攝政殿】 セツシャウドノ 藤原頼通。道長の子。寛仁元年内大臣に敘任せられ、父に代つて攝政となり、三年に關白、次いで治安元年左大臣に轉じた。康平四年太政大臣に任ぜられたが翌年これを辭した。後一條・後朱雀・後冷泉の三朝に攝政・關白として五十有餘年間權を専らにし、永承七年には宇治の別業を佛寺となし、平等院と號した。延久四年剃髮して蓮華覺といひ、後、寂覺と稱した。承保元年(一七三四)歿。享年八十三。宇治殿又

は宇治關白ともいつた。

〔攝政〕 (一) 幼帝・女帝などの時に置かれ、天皇に代つて萬機の政を攝行する職。應神天皇の朝、母后神功皇后が攝政し給うたに始り、爾來皇族を以てこれに任ぜられてゐたが、清和天皇幼沖の朝、外祖太政大臣藤原良房が人臣にして攝政に任ぜられて以來、専ら藤原氏がこれに任ぜられ、王政復古に至つて廢せられた。(二) 天皇が未だ成年に達し給はざるか、又は久しきに互る御故障によつて、大政を親らし給はざる時、天皇の御名に於て天皇の大權を行ふ憲法上の機關。こゝは(一)で、當時後一條天皇(道長の女影子の御出)が御幼少でいらせられた爲に頼通が攝行し奉つたのである。

【さるべき公事をばさるものにて、先づ……】 當然なすべきお上のことはこれはもういふに及ばぬこととして、さしあたり今はまづ……。

〔公事〕 オホヤケゴト (一) 朝廷の事。政務。諸儀式。(二) 公に仕へること。公務。(三) 私事に屬しない表だ

とした。町に八門あり、一町を四行とした。拾芥京程圖に據ると法成寺は京極の西、萬里小路の東、近衛の北、土御門の南で、即ち一保四町であつた。

大鏡、太政大臣基經の條に「この高陽院殿にこそおされはべるめれ。方四町にて、四面に大路ある京中の家は、冷泉院のみとこそ思ひさふらひつれ」とあり、高陽院・冷泉院ともに一保四町の第である。

【こめて】 含めて。
〔こむ〕 (一) 籠らせる。包み入れる。「霧立ちこむる秋篠の里」(二) 納める。詰める。「彈丸をこむ」(三) 含ませる。有たす。「意味をこむ」こゝは(一)。

【大垣】 オホガキ 外圍の大きな垣、總廻りの垣、築地などをいふ。(一五三頁「築地」の項参照)

【瓦葺きたり】 (その大垣に) 瓦を葺いてある。

【思しおきて急がせ給へば】 いろ／＼と心に考へ定めて工事をお急ぎになるので。

〔おきつ〕 掟つ (他動、下二) おきてをする。定める。

つたこと。こゝは(二)。
〔さるものにて〕 然あるものとして。いふまでもないものとして。それはそれとして。

【仕うまつるべき仰言】 致すやうにとの御命令。

〔仕うまつる〕 (他動、四) 「仕へまつる」の音便。略して「つかまつる」といふ。「爲す」「行ふ」の謙語。

【殿の御前】 トノのオマへ こゝでは、道長をさす。

〔殿〕 (一) 高貴な人の住む宏壯な家屋。(二) 轉じて、高貴の人の敬稱。(三) 昔、攝政又は關白の尊稱。(四) 主君。(五) 妻がその夫をさしていふ稱。(六) 女が男をさしていふ稱。

〔御前〕 (一) 神佛又は貴人の前の敬稱。(二) 轉じて、敬稱に用ゐる第三人稱の代名詞。(三) 對稱の代名詞。もとは敬稱であつたが、今は同輩以下に用ゐられる。

【方四町】 ハウシチャウ 「方」は「保」で「一保四町」の義であらう。平安京の市街區劃制は方四十丈を一町、四町を一保、四保十六町を一坊、四坊十六保六十四町を條

定めて命ずる。處置する。

【夜の明るも心もとなく】 夜の明けるのも待遠く。

〔心もとなし〕 (一) 待遠に思つて心がいら立つ。(二) おぼつかない。不安である。氣づかはない。

【夜もすがらは……廊・渡殿數多く造らせ給ふ】 夜は夜中、山の築きやう、池の掘りやう(を心にお描きになり、そこへ更に空想で) 木を植ゑ込ませ、あるべき諸堂をあらゆる佛像に至つては、ありふれたものではなく、眞に莊嚴無比のお姿である。丈六の、金色の像を、しかも幾體となく造り並べ、そこへ北にも南にもと馬道をあけて通路を造り、それから又廊・渡殿をいくつもお造りになる。

この部分は難解な箇所とされてゐるが、これは道長が終夜想像した所を敍したものと解することによつてのみ前後の聯絡がつき、文脈もたどられる。文の整はぬ所も夜すがらの夢想を寫したらしい趣である。

〔疊む〕 タタム (一) 積み重ねる。「岩を疊む」(二) 折り返して重ねる。(三) (傘などを) すぼめる。(四) (世帯などを) 片つける。こゝは(一) から、築くの意。

〔馬道〕 メダウ 殿中に構へた板敷の通路。
〔廊・渡殿〕 ラウ・ワタドノ 共に寢殿造の邸宅で殿舎と殿舎とをつゞける細長い建物。同意義の語を重ねたのは数の多いことを表す爲である。

〔なべて〕 (一) すべて。おしなべて。ひきくるめて。

〔久しく思され〕 待遠にお思ひになり。

一切。(二) なみ一とほり。なみく。尋常一様。普通一般。

〔宵曉の御行〕 ヨヒアカツキのオンオコナヒ(ミオコナヒ) 朝夕の勤行。晨昏二時の佛前の御勤。

〔丈六〕 チャウロク 一丈六尺。釋尊在世の人の身長は八尺であつたが、釋尊はその倍即ち一丈六尺であつたといふ説に基づき、通常丈六を以て化身佛(衆生の機縁に應じて化した佛)の身長とし、佛像も多く丈六に作る。

〔行〕 廣く僧の佛戒を修することをいふが、又特に、時を定めて佛前に讀經禮拜するにいふ。こゝは後者。
〔安き寐も大殿ごもらす〕 「安き寐もねす」の敬語。安眠もなさらす。

〔金色の佛〕 コンジキのホトケ 黄金色の佛像。佛の身相は金色であるといふ説に基づき、佛像は多く金色に作る。

〔寐〕 イ 眠ること。
〔寐をぬ〕 は、眠に就く、ねいるの意。
〔大殿ごもる〕 オホトノごもる 「ぬ」(自動、下二)の敬語。御寝になる。

〔そなた〕 佛像を安置した堂の方。

〔御心にしらせ給へり〕 御心の中で經營せられた。

〔北南と〕 キタミナミと 北にも南にもと。又は、北から南へ貫通して。(法成寺は東面の寺であつた。)

〔しらす〕 知らす 知り給ふ。治め給ふ。領し給ふ。

しろしめす。

【宮達】 ミヤダチ 皇族方。

〔宮〕 (一) 皇居。(二) 伊勢の大廟その他特別の神を祀

【御封】 ミン

る神社。(三) 皇后・中宮・皇子・皇女並びに皇族家の御殿。又、その方々の尊稱。(四) 特に親王家の尊稱。

后彰子(一條天皇の中宮)・皇太后妍子(三條天皇の中宮)・中宮威子(後一條天皇の中宮)の方々をさすのであらう。

【大臣】 オトド 大臣だいじんの敬稱。

【上達部】 カンダチメ・カンダチベ 「公卿」に同じ。(一)

四一頁「月卿雲客」の項を見よ)

【まわりまかで】 参上し退下し。出つ入りつ。

【まかづ】 「まかりいづ」の略。退出する。

【立ちこむ】 (一) 人・馬・車などが一つ場所に入り込む。

(二) たちふさぐ。たちかくす。たちわたる。こゝは(一)。

【さるべき殿ばら】

道長の子息の方々その他關係深い方々をさすのであらう。

う。

【宮々】 ミヤミヤ

こゝでは、道長の御女であつた三所后、即ち太皇太

【莊】 こゝでは「莊園」の意。莊園は初め氏族の首長の別業を意味したが、中古以後は權門・社寺私有の土地の意となり、その多くは課役を免れ、官權支配の外にあつて、領主は莊民をも支配した。もと臣・連・伴造・國造等の所有地たる田莊・賜田・功田・懇田に原因し、經濟的・社會的變移に伴なつて發達したもので、貴族跋扈の基礎をなし、當時社會の一大弊害とな

つた。歴代天皇の中にはこれが停廢を計られた方もあ
るが、十分にその目的は達せられず、平安朝末期には
全國殆ど莊園化せんとする状態にあつた。が、鎌倉幕
府が地頭を置いてから減少し、豊臣秀吉が天下を統一
して檢地を行ひ、諸侯を奉ずるに石高を以てして後は
全く跡を絶つに至つた。

【夫】 プ 夫役人夫。(「夫役」の項参照)

【かしこきこと】 勝れたこと。

【かしこし】 (一)才智がすぐれてゐる。利口である。

(二)勝れてゐる。まさつてゐる。(三)都合がよい。結
構である。巧みである。(四)いみじい。はなはだしい。

【地子】 チシ 公田・官田の賃貸料で、太政官に送つて雜
用に當てられたもの。

大寶令によつて規定せられ、平安朝時代を通じて行は
れたが、その制には變遷があつた。鎌倉時代以後その
法は全く廢類し、地子なる語は地租とほぼ同意義に用
ゐられるに至つた。

【官物】 クワンブツ・クワンモツ こゝでは、田租又は調
庸。

詳解に「官物は、類聚三代格に、諸國調、并進官雜物、
また調庸、并官物未進、また調庸、並例進雜官物など
見えて、雜物のしなは、賦役令、及び主稅式にのせた
り。されど、こは調庸雜物なども、うちまかせて、
官に納むる貢賦を、官物といへるならん」とある。

【おそなはれども】

【おそなはる】 遅なはる 遅くなる。延引する。

【なはる】は延びゆく意かといふ。「疊なはる」「糾な
はる」

【夫役】 ブヤク 往古、公用に使役する爲に人夫を徵發し
たこと。又、その人夫。こゝは後者。

【楡皮】 ヒハダ(ヒワダと發音) 楡の皮。

細かに割いて種々の用に供する。又甘皮・外皮等を去
つて小方形の板にし、屋根を葺く料とする。

【まゐらするわざ】 たてまつる事。

【まゐらす】 (一)さしあげる。進上する。たてまつる。

(二)動詞の下に重ねて助動詞のやうに用ゐ、尊敬の意
を表す。「遙に拜み參らす」(九五ノ一〇)

【競ひ】 キホヒ きそつて。張りあつて。

【品々方々あたり／＼に】 色々の身分の人々がその向々に
應じてそこ／＼に。色々の身分の人々が、その身分・職
業に應じた場所々々をうけもつて。

【品々】 身分々々即ち色々の身分の人々の意。

【方々】 向々。

【あたり／＼】 そのあたりこのあたり。そこ／＼。

【佛師】 フッシ 佛像を彫刻し作る工人。佛工。

【同じくはこれこそめでたけれ】 同じことならば尊い佛像
を作る佛師が一番結構である。

【匠工】 タクミ (一)物を作る業。又、それを職とする者。
工匠。(二)専ら「木匠」の稱。即ち木材で家・橋を作る
を業とする者。大工。番匠。木工。こゝは(二)。

【えさまさ】 力をいれる時に發する聲。

【佛の御座】 ホトケのオンザ 「須彌壇」「須彌座」に同じ。

佛像を安置する臺座。もと須彌山に象どつたものとい
ふ。方形・矩形・八角形・圓形、又、一重・二重等種々
ある。飛鳥時代には多く石造であつたが、平安朝時代に
は木造が多く、表面に黒漆・螺鈿を施し飾金具を打ち、
羽目には孔雀・寶相花を浮彫した。鎌倉時代から禪宗と
共に唐模様式が輸入せられ、種々意匠の變つたものが現
れた。

【板敷】 イタジキ 床の、板張のみで疊を敷いてない所。
板間・板の間ともいひ、略して板。

昔の寢殿の室内はすべて板張であつた。榮華物語、玉
の臺に「御堂の板敷を見入るれば、鏡のやうにて、外
なる人の影さへ映りて見ゆれば云々」とある。

【木賊】 トクサ 木賊科、とくさ屬の多年生常綠草本。そ
の地上莖は直立・中空で管状をなしてゐる。粗糙で珪酸
を含んでゐるので、木材・角・骨その他の器具を磨くに
用ゐられる。

【椋の葉】 ムクノハ 長楕圓形で尖り、鋸齒を有する。葉面が極めて粗澁なので物を磨くに用ゐられる。平家物語一に「播磨米はとくさか、むくの葉か、人のきらをみがくは」とある。

【桃の核】 モモのサネ 桃の核で磨いたのか、それとも核とはいつても實は仁を用ゐて光澤を出したのか、不明。

【檜皮茸】 ヒハダブキ こゝでは、檜皮で屋根をふく職人。ひはだし。ひはだだいく。ひはだだくみ。

【壁塗】 カベヌリ 壁を塗る職人。左官。

【瓦作】 カハラヅクリ 瓦を焼く職人。瓦焼。瓦師。

【大路】 オホヂ 大通り。大道。(小路の對。)

【力車】 チカラグルマ 物を載せて、人の力で引く車。荷物を運ぶのに用ゐる車。

【えもいはぬ】 なんともいへぬ。こゝでは、非常に大きい。の意。

【加茂川】 カモガハ (一二七頁「鴨川」の項を見よ)

【筏といふものに】

の南岸に位してその門戸をなし、又東海・北陸兩道の要衝に當つて水陸要害の地をなした。帝都京都の繁榮に伴つて官道が逢坂山に開かれ、江・濃・三・越の物貨を吸収し、京畿五要津(河・江・大・瀬・島)の一に居り、湖上の船舶は皆此處に集積し、貨物・米穀の運搬及び行旅往復の要路をなした。

【梅津】 ウメヅ 現京都市右京區梅津(但し、當時は都の外)。四條通りの西端、桂川の東岸に在る。平安奠都によつて俄に京都の人口が増加した結果、木材の需要が頓に増大し、梅津はその重要な集散地であつたらしい。京都府葛野郡史概要に「葛野河によりて運ばれし木材は梅津の木屋に集められ、こゝより陸路大部分京都に運搬せられしなるべし。梅津の名はかくの如き水路運輸乃至交通の要衝に當りしことを物語るものにあらずや」とある。

【西は東】 ニシはヒンガシ、言泉には「大津は京都の東方、梅津はその西方に在る地なる關係あるか。或は

【筏】 イカダ 木材・竹などを竝べ、繋ぎ合はせて舟の如く作つたもの。川に浮かべ、筏師が乗つて、棹さし流して下し、乗行・運送の用に供するもの。簡易の交通・運搬の機關として多く舟を通じ難い溪流などに用ゐられる。

【といふもの】 都の中の賀茂川に平生見なれぬものだからかくいつたのである。

【樽】 クレ (一) 杣山から伐り出した皮のついたまゝの材木。黒木。大小の丸木。丸太。(二) 木を剝いで薄板とし板屋根を葺くもの。そぎ。へぎいた。(三) 薪。(四) 背板。こゝは(一)。

【大津・梅津の心地するも、「西は東」といふはこれなりけりと見ゆ】 賀茂川に、勝手の違つた筏が浮かんで、木材などを運んで来て、都の中ながらまるで物貨の集散地たる大津や梅津のやうな氣がするにつけても、世にいふ「西は東」とは全くこの事だわいと感ぜられる。

【大津】 オホツ 現大津市。京都の東約一軒、琵琶湖

雑沓のために東西を忘るる意か詳かならず。「諺語」とある。が、又敘上のやうに、都の内が都の外の地のやうになつたといふ意味で、顛倒の意ともとれぬことはない。

【磐石】 バンジャク (一) 大きい岩。ひろごつた石。(二) 轉じて、堅固にして不動なこと。こゝは(一)。

【はかなき】 あぶなつかしい。
【はかなし】 (一) 長く保たない。頼みにならない。もろい。(二) 深い考がない。ふとしたことである。かりそめである。(三) とるに足らない。とりとめがない。つまらぬさまである。

【まねびやるべき方】 そのまゝを語りつげる方法。そのまますつくり人に傳へるべき方法。
【まねぶ】 「まなぶ」に同じ。こゝでは、見聞した事をそのまゝ人に語り告げる、語る、の意。

【やる】 こゝでは「す」「なす」の意で、動詞の下に添へて接尾語のやうに用ゐる。「みやる」「立ちもやら

す

【須達長者】 スタツチャウジャ 釋迦在世時の印度橋薩羅國舍衛城の人。波斯匿王の大臣。巨富を有したが、慈悲心深く、施與を好み、殊に鰥寡孤獨の者の救済に力を盡くしたので給孤獨長者と敬稱せられた。深く佛に歸依し、その有力な外護者で、特に祇園精舎の建立者として名高い。佛典に現れた長者の代表的なものである。

【須達】 梵語 Sudatta の音譯。「須達多」「須達哆」「蘇達多」とも書き、「善施」「美與」「善授」「善給」「善溫」等と譯す。

【長者】 普通、富貴・有徳の人の意とせられてゐる。が、一説には佛陀時代印度に於ける商人組合の頭であるといふ。彼等の多くは富豪で、初めは選舉によつて立てられたが、後には世襲も認められたといふ。

【祇園精舎】 ギランシャウジャ 「祇園園林須達精舎」(祇園給孤獨園精舎)の略。舍衛城の南に須達長者が佛陀の爲に建てた精舎。

ではない。この名は祇園精舎に起るといふ。

【冬の室、夏の風、各、ことごとくなり】 詳解には「さて、道長の法成寺御堂を造れるさまは、彼の印度の須達多長者が、祇園精舎を建立せしも、かくの如くありけん」と見ゆるまで、めでたき上に、淨飯王が造りし、悉多太子の三時殿のさまをかねたらんやうなりとなり」とある。

【三時殿】とは太子の出家の志をとどめる爲に、父淨飯王が春・夏・秋の各季節の爲に各、絶景の地を選んで建てたといふ三つの宮殿。

【室】 ムロ こゝでは、住み籠る所、の意。主に僧房にふ。

【ことごとく】 異異 べつべつ。

【いとど勝らせ給へり】 大變御徳望が増しておいでになつた。

【なべてならざりける御有様】 普通一般の人間のやうではない御有様。普通の人間以上の御有様。

須達長者は佛陀の爲に常住の説法所を建立しようと發願し、祇園太子(波斯匿王)所有の園林が最適であるのを見て讓渡を乞ふこと數次、太子が戯れに、もし園林に黄金を敷き詰めるならば、それを代價として地を讓らうといふや、喜んで金を運び、直ちにこれを地に敷き始め、前言が戯れであるといつてもきき入れない。太子も佛陀の感化の偉大なのに感じ、未だ敷き終らないうちに地を讓渡し、且その樹木を佛陀に奉施し、兩人の力により精舎を建てて佛を請じ、佛はこゝに止住して化導すること二十五年に及んだ。

その構造については、七層の伽藍があつて莊嚴を極め、又十六の大院、十二の浮圖、七十二の講堂、三千六百の房舎、五百の樓閣があつたと言ひ傳へられてゐる。それは事實ではないが、本文の作者は恐らくかくの如き傳説を心においていつてゐるのであらう。

【精舎】 梵語「毘羅羅」(Vihāra)の譯語。佛教寺院の異名。精行者の居る處の意で、その舎の精巧である意

【今は】 今となつては。もはや。もう。

【そなたさま】 そちらの方。そちら。

【なべてこの世の事とは見えさせたまはず】 すべて現實のこととはお見えにならない。超現實のこのやうにお見えになる。

【まづは】 こゝでは、まづその證據としては、の意。

【長谷寺】 ハセデラ 新義眞言宗豊山派の總本山。奈良縣磯城郡初瀬町に在る。豊山神樂院と號し、本長谷寺・豊山寺・初瀬寺・泊瀬寺・長谷觀音等の名がある。本尊は十一面觀世音。西國順禮三十三箇所第八番の札所。

寺傳によれば養老五年道明の開創で、聖武天皇神龜元年勅願寺となつた。初め法相宗で、奈良興福寺の所轄寺院として榮え、朝野貴賤の尊信が厚かつた。戰國時代に至つて頽廢したが、天正十五年根來寺の專譽僧正が入寺してから新義眞言宗の道場となつて一山興隆した。明治三十三年獨立して同宗豊山派の總本山となつた。四十四年大講堂その他炎上、大正十三年再建竣

工した。本堂大悲閣(慶安三年の再建)が國寶建造物である外、所藏に國寶が甚だ多い。

【大いにいかめしき】 甚だおそろしい。

【いかめし】 厳し (一)威厳があつて犯し難い。おとそかである。(二)盛である。すばらしい。(三)烈しい。怖しい。

【何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ】 何故かう殿(道長公)のことをかれこれ非難がましいことをいふのであるか。

【弘法大師】 コウボフダイシ 名は空海。幼名眞魚。弘法大師は諡號。日本眞言宗の開祖。寶龜五年(一四三四)讃岐國多度郡に生まれた。姓は佐伯。十八歳以後、諸方に出遊して廣く經史を學んだが、殊に意を佛教に傾け、石淵寺の勸操について主として三論を修め、延暦十六年三教指歸を作つて儒・道・佛三教の優劣を論じた。翌年勸操について出家し(出家の年時には諸説がある)、延暦二十三年(二十)遂に勅許を得て唐に渡り、青龍寺惠果

阿闍梨に兩部大曼荼羅祕法の相傳をうけ、大同元年二百餘部の新釋經論・章釋・讚類を携へて歸朝した。殊に嵯峨天皇の尊信を受けること篤く、弘仁七年高野山を開いて眞言宗を弘通した。承和二年(一四九五)三月寂。享年六十二。空海は博學多能、書は三筆の一人と稱せられ、又繪畫・彫刻にも長じた。著述は十住心論・祕藏寶鑰・辨顯密二教論その他枚舉に遑ないほどで、收めて弘法大師全集にある。

【生まれ給へるなり】 生れ變つてゐられるのであるぞ。

【とぞ見えさせ給ひける】 といふやうに夢にお示しがあつた。

敬語を用ゐたのは佛のお告であるからである。

【天王寺】 テンワウジ 四天王寺の略稱。現大阪市天王寺區元町に在る聖德太子建立の名刹。

聖德太子が物部守屋を討たれるとき、自ら四天王の像を刻んでこれを龕中に置き、戰捷を祈られた。軍が平いで後(用明天皇二年)四天王寺を難波の玉造の岸上

に造り、四天王の像を安じその恩を報じられた。その後推古天皇の元年、荒陵(あらかた)の東に移し、敬田院(けいでんいん)・施藥院・療病院・悲田院の四箇院を作り、敬田院を以て天王寺の本院とした。院内に金堂があり、如意輪觀音及び四天王の像を安置するので、荒陵山四天王寺敬田院と稱する。本寺はもと諸宗の外に立つてゐたが、淳和天皇天長二年、天王寺の安居講師は永く天台宗たるべしとの官符を賜はつてから、天台宗となつた。創立以來屢、兵火・落雷等の災にあひ、今の堂宇は文化九年の建造にかゝる。尙、院内にあつた五重塔は、昭和九年九月の颱風の際倒壊した。

【聖德太子の御日記】 シャウトクタイシのオンニキ 太子傳曆・扶桑略記に引いてある四天王寺御手印記(本願緣起)及び明月記・大平記などに見える未來記をさしたるものかもしれないが、いづれも後人の作で、前者に「吾人滅後、或生國王后妃、造建數大塔云々」と見えるが、「王城より東に云々」の文字は見えない。

〔聖德太子〕 用明天皇の第二皇子。御名を廢戶豐聰耳太子(あきとみ)と稱され、また廢戶皇子・八耳皇子・上宮太子等の御稱呼もある。當時既にその徳を稱へて聖德太子と申し上げた。推古天皇の攝政皇太子として御二十歳から薨去に至るまでの三十年間銳意内政の改革に従ひ給ひ、冠位十二階を制して諸臣の等級を分ち、十七條の憲法を作つて政治・道德の基準を示された。曆を安下に頒ち、蘇我馬子と共に國史を撰修し給ひ、又小野妹子を隋に遣はして支那と始めて對等の國際的關係を結ばれ、留學生を遣はして彼の制度・文物を學ばしめ給うた。特に佛教に歸依し給ふこと深く、自ら勝鬘と名告り給ひ、法華・維摩・勝鬘三經の疏を制作せられた。又法隆學問寺・四天王寺・中宮尼寺・橘寺その外多くの寺院を建立せられた。推古天皇二十九年(一一八一)二月斑鳩宮に薨去、御壽四十九。

【王城】 ワウジャウ 帝王の居城。皇居。法成寺は皇居の東方に當る。

【我と知れ】 自分(の再生)と思へ。

【何れにても疎ならぬ御事なり】 弘法大師の再來であるにしても、聖徳太子の再誕であるにしても、何れにしても大した御事である。

二 解釋

1 主題 道長晩年の念願たる法成寺造營の有様。

2 構想

- (1) 病後の道長の御堂建造への専念(初—九三ノ四)。
- (2) 宮達・大臣・上達部等の協力奉仕(九三ノ五—九三ノ一二)。
- (3) 御堂の内外に於ける造營の盛況(九四ノ一—九五ノ七)。
- (4) 入道後の道長の勢望と神祕(九五ノ八—終)。

3 敘述

〔殿の御前も、「この度生きたるは他事ならず、わが願の叶ふべきなめり」と宣はせて、他事なく、たゞ御堂におはします〕——生死も分らぬ病氣が平癒した。畢生の念願を成就させようとする佛意であるかも知れない。さう考へることによつて、その事が絶対性をもつてくる。「他事なく、たゞ御堂におはします」と簡單ながら入道の焦点を言ひ盡くしてゐる。關白頼通が全國に向かつて公事をさしおいて御堂建造に参加するやう促したことも、驚くべき事實ではあるが、道長の權勢とこの焦点を思へば背かれる。

〔疎〕 オロカ 十分ならぬさま。劣つたさま。いふに足らぬさま。
時人が道長を弘法大師又は聖徳太子の再來であるとしたことは大鏡にも見えてゐる。

〔鶏の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安き寐も大殿ごもらず、唯この御堂の事のみ深く御心にしらせ給へり〕——一生の終に唯この事と思ひ立つては、道長の性質として文字通り矢も楯もたまらないことであつたらう。

多少筆が滑り過ぎてゐるやうに思はれるが、併しいろ／＼と設計を試みては竣工の日を鶴首して待つてゐる様子の縷縷たる敘述につゞく表現として力があり、決して單なる空言・虚辭とは思はれぬ。夢想家道長の子供らしい一面を示す興味深い文字である。

〔日々に多くの宮達、大臣、上達部、さるべき人々まわりまかで立ちこむ〕——概觀的敘法であるが、それ／＼利いてゐる。「まわりまかで」なども、本來の意味に用ゐられてをり、その二動詞を重ねてその動きを示してゐる趣も素樸で且うまい。

〔……國々の守ども、地子・官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役・材木・檜皮・瓦など多くまわらするわざを、我も我もと競ひ仕うまつる〕——道長親子の命令ではあるし、外ならぬ御堂のことであるから、全國の守どもが一心になつてゐるのである。全國から競争で仕へてゐる大がかりの工事業も髣髴されるが、それよりもかゝる状況を見ていよ／＼心を躍らしてゐる道長の様子がその背後に浮かび出てゐることに注意すべきである。

〔今はこの御堂のあたりの本草ともならむと思へる人のみ多かり〕——道長の威勢が當時の人心に對して絶對的なものになつて來てゐることを具體的に示す一句である。のみならず、海の浪や川の水さへも道長に仕へるものゝ如くであるといふに至つては、既に超現實的存在としか考へられない。弘法大師の再來、聖徳太子の再誕といひ囃されたのも自然な勢である。

三 批評

榮華物語は大鏡に比して文章の上で冗漫にして粉飾が多いといふ特長を持つのであるが、本課の如きは、作者も民衆と同じやうに道長禮讃の心にひたつてゐる爲に、比較的自然的な行文となり、語を重ね、句を疊んで感情を表現する方法の素樸さなど氣持がよい。池中に起つた波紋のやうなこの事件を感銘深く描寫してゐる。

三 備 考

一 指導の問題

(一) 本課には、前課のやうな、道長に對する批判の跡は見えない。専ら讚美・禮讃の言辭に充ちてゐる。作者は道長の花々しい勢威におされて是非論を試みる餘裕を持たぬらしくさへ見える。この作者の態度は本課の場合には却つて効果をあげてゐるのである。本課に於ては道長の榮華の如何に甚だしいものであつたかといふことがその主題なのであるから。同じ歴史物語にしても前課のそれと比べて考察させ、平安朝時代文學史の上に於ける兩書の地位・特質などを學習させることが必要であらう。

本課に於ては道長の榮華振を表す爲に法成寺造營のことを書いてあるのであるが、讀みに際しては、道長に對する成心を捨てて文そのものに臨ましめたい。法成寺造營の様子を眼前に浮かび上らせることが出来れば、作者の讚歎・傾倒の趣も理解出来よう。歴史的批判はその上のことである。こゝに指導上の深い用意が必要である。

法成寺造營の驚異的な景況はよく描き出されてゐる。まづ道長父子の熾烈な心組をのべ、次に諸國上下の人々の動員のこと、實際の工事の模様を細叙して、誇張かと疑はしめるやうな筆致が否應なしに讀者をして驚歎せしめるのである。殊に第三節に於ける造營の實況は細かい。數字を落さずすべてを具體的に描寫してゐることは、表現法として當を得てゐる。

るのであるが、この數字そのものが想像もつかぬ位に何れも甚大である爲に、數字的な驚きと感銘とがこの具體描寫を助けて益々鮮明に情景を偲ばせてゐることに注意することを忘れてはなるまい。

(二) 敘述の項に指摘したやうに、語や句を重ねたり、對立させたりして一種の文致を成してゐる部分が多い。即ち「夜の明るも……、日の暮るゝも……」「御堂の上を見上ぐれば、……。御堂の内を見れば、……。」「池を掘るとて……。山を疊むとて……。」「近う見奉る人は……。遠う見奉る人は……。」「のやうな對語・對句を始として、「御堂御堂、方々様様」「品々方々あたりく」や「思し急がせ」「思しおきて急がせ」「造り続け」「造りなめ」「まわりまかで立ちこむ」「競ひ仕うまつる」「まわりこみ」「竝みぬ」「引き上げ騒ぐ」「造りか々やかす」「磨き拭ふ」「切りとゝのふる」「叫びのゝしり引き」「誦ひのゝしり」のやうな名詞又は動詞を重ねたもの等がそれであるが、いかにも素樸な、併し效果的な表現法を成してゐることを注意させたい。

二 參考資料

(一) 假名文歴史の嚆矢であり、歴史物語なる新生面を拓いた功績は大きい。大鏡の著者を刺激し、江戸時代にも松蔭日記には、その影響が認められる。

(二) 註釋書の主要なものを左に掲げる。

- 大石千引 榮華物語抄 四十一卷
- 岡本保孝 榮華物語抄 九卷
- 池邊義象 標註榮華物語抄 六卷
- 關根正直 標註榮華物語抄 六卷
- 和田英松 榮華物語詳解 十四卷 首三卷
- 佐藤 球

一四 源信僧都の母

一 解題

一 本文

今昔物語集卷十五本朝附佛法第三十九「源信僧都母尼往生語」の全文を採録したものである。

今昔物語集は平安朝末期に出た説話集で、宇治拾遺物語・宇治大納言物語とも呼ばれた。卷一から卷五までは天竺の部、卷六から卷十までは震旦の部、卷十一から卷三十一までは本朝の部になつてゐる。以上三十一巻のうち、卷八・卷十八・卷二十一の三巻は缺本になつてゐる。何れも源泉を他の資料に得てゐて、その出典は廣汎に互つてゐる。その主要なものは、天竺の部では諸經要集・法苑珠林、震旦の部では白氏文集・莊子・說苑・烈女傳・韓非子・淮南子、本朝の部では日本靈異記・三寶繪詞・日本法華驗記等であるが、他に口碑・巷説の類の記録せられたものも尠くない。本朝の部は佛教・國史・世俗に分類せられるが、卷十五は佛法で、殊に往生談の集である。

文章は漢語・佛語を交へた和漢混淆文體で、「今は昔……となむ語り傳へたるをや」の如き構成を以て敘せられ、素樸・簡潔な筆致がその特質である。

編著年代については内容上から推定する外はないが、藤岡作太郎博士は國文學全史平安朝編に於て、康平(一七七八)前後説を立て、坂井衡平氏は今昔物語集の新研究に於て、天永(一七七〇)初年説を示し、山岸徳平氏は岩波講座「日本文學」に

於て、嘉承(一七六六)・天仁(一七六八)の交説をとつてゐる。

二 作者

従來源隆國と稱せられてゐて、宇治大納言源隆國が、毎年五月から八月まで、平等院一切經藏の南の山際なる南泉房に籠り、をかしげな姿で、筵を板に敷いて涼んでゐて、大きい團扇であふがせ、往來の者を呼び集め、昔物語をさせ、自分は内に添ひ臥して、語るに随つて大きい草紙に書かれたといふことが、宇治拾遺物語の序に見えてゐるが、これは江談抄にある藤原忠文の事蹟と混同せられたものであつて、今昔物語集の編著者とするには出來ない。

内容の關係上、随つて編著年代上、隆國説は疑はれて來た。併し何人であるかは不明である。

三 採擇の趣旨

平安朝末期に現れた説話物語としての今昔物語集の一話を讀ませ、一面には平安朝の女流假名文體と異なつた男性的國文に接しさせ、さまざまの點で中世文學の先驅的性質を有する作品であることを理解させようとする教材である。

同時に又、學者として、宗教家として、又藝術家として傑れた源信とその母の言行を敘してゐる點に於て、國民性の陶冶に資すべき教材でもある。

二 教材としての研究

一 註解

【源信僧都の母】 ゲンシンソウゾのハハ 清原氏。卜部正

親に嫁して男兒がなかつたので、高尾寺(大和國葛下郡)に祈願し

て一男を得た。それが源信僧都である。極めて道心の深

い女性であつたことは本文によつて明らかである。(參考

資料参照)

【源信僧都】天台教學に於ける惠心流（壇那流に對する）の祖。日本淨土教の先徳。惠（慧）心院に住したので世に惠（慧）心僧都と稱せられる。俗姓は卜部氏。父は正親。母は清原氏。大和國葛下郡（現奈良縣北葛城郡）當麻郷の人。天慶五年（一六〇二）生。九歳で比叡山に上り、良源（叡山第十八代の座主慈惠大師）に就いて天台の學を修め、十三歳の時剃染・受戒して法諱を源信と稱した。生知の人たる上に精勤比なく、教門・觀門の奥を究めて、學徳一山の稱するところとなり、勅を受けて内供奉十禪師となり、尋いで法橋上人を授けられ、また探題博士となり、更に少僧都に任ぜられた。が、榮名を忌んで出離を求め、三十歳の頃から横川に屏居して、専ら行道と著述とに従つた。著すところ、一乗要決・往生要集・阿彌陀經疏・大乘對俱舍鈔・因明相違註釋等、すべて七十餘部百五十卷（惠心僧都全集所收）、學は俱舍・因明・天台・淨土の教義に互り、天台の教法はこの時に於て隆盛を極め、鎌倉期淨土信仰興

隆の基礎はこゝに置かれた。又、彫刻・繪畫をよくし、高野山にある二十五菩薩來迎の圖、及び京都禪林寺その他にある山越彌陀の圖はその作と傳へられてゐる。かくて彼は日本中古の佛教史上何れの方面にも關係ある偉大な人格であつたと共に、又日本佛教史上に於ても數指を以て數へらるべき重要な存在であつた。寛仁元年（一六七七）六月寂。享年七十六。

寛和二年（一六四六）著す所の往生要集を宋に送つたが、深く彼の地の學者の敬服する所となり、又長保五年（一六六三）弟子寂照の入宋に託して天台の教義に關する疑義二十七條を四明の知禮（支那天台宗第十四祖、教觀の中興者）に致すや、知禮は「意はざりき東域にかゝる深解（じんげ）の人を出さんとは」と歎じ、答釋を作つて還したが、なほ源信の意には満たぬものがあつたといふ。

「惠心院」については惠心僧都繪詞傳に「慈覺大師の開基にして、その後慈惠大師棲せ給へる時、冷泉天皇の勅願、相國兼家公（九條家祖）の造建し給ふ所なり。僧都慈

惠大師の蹟をつぎて住し給へり」とある。尙寛和二年には官寺にせられ、年分度者を賜はつてゐる。

〔僧都〕僧官の一。僧正に次ぐもの。推古天皇の三十二年始めて設けられた。大・權大・正・少・權少の別があり、大寶の制では從五位に準ぜられたが、弘安の制では四位の殿上人に準ぜられた。

【今は昔】今ははや昔の事であるが。今からいへば昔。昔。今昔物語集の説話は皆「今昔」の語を以て始つてゐる。そしてこの「今昔」の二字は「いまはむかし」と訓むべきであることは、この書が「今は昔の物語」と呼ばれたことがあることによつて明らかである。今昔物語集といふ書名が、この冒頭の語から出たのであることはいふまでもない。但しこの語は、物語などの書き出しによく用ゐられたもので、竹取物語の初にも「今は昔、竹取の翁といへるものありけり」とある。

【横川】ヨガハ 叡山三塔の一。〔比叡の山〕の項を見よ)

【大和國】ヤマトノクニ (二四頁「大和」の項を見よ)

【葛下郡】カヅラキノシモノコホリ 現奈良縣北葛城郡。

延喜式・和名抄「葛下郡、訓加豆良木乃之毛」、日本書紀、天武帝白鳳十三年の條に「倭葛下郡」と初出、後世音讀して専ら「かつげ」といつた。明治二十九年廣瀬郡と合して北葛城郡となつた。

【比叡の山】ヒエのヤマ 比叡山。京都市の東北約四軒、京都府（山城）と滋賀縣（近江）の境に、方五軒に盤踞し、うちに二高所があつて、東にある大嶽は海拔八四八米、西にある四明が嶽は海拔八三九米。天台宗の大本山延暦寺の寺界で、東塔・西塔・横川の三塔に分れ、東塔は一山の中心部で、根本中堂・戒壇院・大講堂・淨土院・文殊樓等があり、西塔は根本中堂の西北約一軒、釋迦堂・相輪塔・法華堂・椿堂等がある。横川は東塔の正北四軒、楞嚴院・四季講堂・元三堂・惠心院・惠心僧都廟・道元及び日蓮修學の跡等がある。天長六年（一四八九）慈覺大師（叡山第三座主）の開いた所で、東塔・西塔とは別世界をなし、古來名利の學をいとひ、眞の出離を求めた人々

の隱栖修行した所で、慈惠大師の歌にも「東は修羅西は都に近ければ横川の奥ぞすみよかりける」とある。

この山は近江の人最澄が延暦七年（一四四八）日枝山寺（後の延暦寺）を建て、入唐歸朝の後こゝに據つて日本天台の一宗を起してから、歷朝の御信仰厚く、永く平安佛教の中心地をなした。唐の五台山に擬する故を以て台嶽或は台嶺と稱し、南都に對しては北嶺といひ、又園城寺を「寺門」又は「寺」といふのに對して「山門」又は「山」といふ。

【やんごとなき】 一通りでない。又とない。
【やんごとなし】 (一) やめることが難い。打捨てておられない。よんどころない。(二) ひと通りでない。限りない。又とない。特別である。(三) いみじく貴い。高貴である。恐れ多い。

【學生】 ガクシャウ (一) 佛法の教學を研究する人。(二) 寺院に寓して外典を習學する少年。(三) 往古、大學及び國學で經業を受けた者。こゝは(一)。

太后を申し上げた。こゝは(一)。

【八講】 ハコウ・ハッコウ 「法華八講會」の略。妙法蓮華經八卷を八座に講すること。朝夕の二回に分つて四日間に行ひ、各座講師を異にし、問者を設けて辯難・論議せしめた。

もと支那に起り、我が國では延暦十五年（一四五六）に石淵寺の勤操に始り、禁中及び天台・眞言・華嚴・法相等の諸大寺に行はれた。宮中で行はれるのを禁裏八講、幕府主催のものを幕府八講、普通の家で行ふのを臣下八講又は私家八講といひ、寺院で行ふのを寺院八講といふ。寺院八講は今なほ天台宗で行はれてゐる。

【捧物の物共】 佛に供へた品々。

〔捧物〕 ホウモチ 神佛にさゝげる物。

【後の宮】 キサイのミヤ こゝでは、三條の太后を申し上げる。

太皇太后・皇太后・皇后を三后と申し上げた如き意味

【三條の太后の宮】 昌子内親王。朱雀天皇の御女。村上天皇の御時東宮妃となり、東宮即位せられて冷泉天皇となり給ふや、立てて皇后とせられた。花山天皇の寛和元年（一六四五）觀音院を比叡山に創立し、親しく往つて供養せられた。二年太皇太后となられ、長和元年（一六五九）十二月權大進橋道貞の三條第に崩ぜられた。御壽五十。三條太皇太后または觀音院太后とも申し上げ、觀音院に葬り奉つた。

今昔物語集卷十九、第十八「三條太皇太后出家語」によれば、關白太政大臣頼忠の女藤原遵子（四條の宮と稱す）とも考へられ、三國傳記（慶永初年刊）卷十二「惠心院源信僧都事」などによれば、村上天皇の御母太皇太后（藤原穩子）とも考へられる。

【太后】 オホギサイ 「きさい」は「きさき」の音便。(一) 上代皇妃をすべて「きさき」と申し上げた時代には特に御嫡後の尊稱。皇后。(二) 支那の制に倣つて御嫡後を「きさき」と申し上げるやうになつてからは皇

に於て、太后を后と申し上げたのである。

【返事】 カヘリゴト

【遣はせ】 「遣せ」(他動、下二)の誤り。送り來る。よこす。

【法師になし聞えし本意】 そなたを僧侶にしてあげた素志。

【本意】 ホイ (ホニイと讀む場合もある)。(一) もとからの心。本來ののぞみ。(二) まことの心。まことのぞみ。こゝは(一)。

【そこ】 こゝでは、同輩又は目下に用ゐる對稱代名詞。そこもと。そのもと。そなた。汝。

【めでたく思はるらめども】 結構なことにお思ひであらうが。

【らめ】 現在を推量する助動詞「らむ(ん)」の已然形。

【嫗】 オウナ こゝでは、母自身をさす。老母、といふほどの意。

【それを】 さうだのに。然るに。

【元服をもせしめずして】 一人前の男子として世に立てようともしないで。

【元服】 ゲンブク 男子が始めて冠をつけ、大人の服を着、成人となる儀式。「首服」「冠禮」「始冠」ともいひ、元服することを「加冠」又は「男になる」といふ。我が國では男子十五歳前後に吉日を選んで行ふを常としたが、十歳未満で元服した例も少くない。

【身の才よくあつて】 ほんたうに自分自身の出来がよくて。身についた眞の才をよく磨いて。

【才】 ザエ 學問。學才。才藝。才能。技能。こゝでは、學問修行によつて得た全人的な智慧・能力をいふのであらう。

【多武峯の聖人】 増賀ひじり。參議橋恒平の子。十歳叡山に上り慈恵に事へ、後大乘戒を受けて僧となり、籠山修行し、解行共に勝れ、最も止觀にくはしかつたが、一日父母を省する心が切で下山した。父は既に歿し、母は寡

居して零落を極めてゐたが、増賀の法衣の美を見、侍僕の従ふを知つていたくその名聞心を戒めたので、慈訓心根に徹し、直ちに叡山に歸り、根本中堂に眞の道心を得んと祈ること一千年、更に伊勢大廟に參じてひたすら祈誓を籠めた。一夜夢に菩提を成就するには名聞を去れとの示現を蒙り、直ちに著衣を脱して乞食に與へ、一絲を帯びずして叡山に上つたので大衆は見て狂とした。爾後破笠・瘦筇諸國を流浪し、冷泉上皇が内供奉に召されても伴り狂して應ぜず、東三條院詮子が戒師とせられ、ば宮中に狂態を演じ、慈恵が僧正に任ぜられた謝意の參内には、乾鮭魚を帶して劍とし、瘦牛に騎して行列の先驅をなす等奇矯の行が多かつた。蓋しその深意は境界を離脱するにあつたといふ。應和三年四十七歳で大和多武峯に幽棲し、心ゆくまで勤め行ふこと四十一年、長保五年(一六六三)六月示寂した。享年八十七。

【多武峯】 タムノミネ 奈良縣磯城郡多武峯村に在る。海拔六一九米。初め倉橋山といつたが、鎌足が中

大兄皇子とこの山の藤花の下に蘇我氏討伐の謀議を凝らしたので談峯と稱し、現在は多武峯と記し、「とうのみね」と呼んでゐる。山上に談山神社がある。鎌足歿後、子定慧が唐から歸朝し、白鳳七年鎌足の墓を攝津阿威山から此處に移し、墓の上に支那將來の十三重の塔を建て、塔の南に一字の堂を建てて妙樂寺と號したのが多武峯の草創で、後聖靈院を設け、大織冠の像を安置したのが談山神社の起原である。以來朝廷及び藤原氏の尊崇重く、天曆十年(一六一六)延曆寺の座主實性が本山座主となるに及び叡山との關係が深まり、増賀上人來住以來益々昌運に向かつた。明治維新の際神佛分離によつて妙樂寺は廢され、談山神社は今別格官幣社である。なほ増賀庵住のことについては撰集抄に「終に大和多武の嶺と云ふ所にさそらへ入りて、智朗禪師の庵のかたばかり残りけるにぞ居をしめ給ひける」とある。

【聖人】 シャウニン 佛語。(一)大・小乗の見道以

上、斷惑を證した人の稱。(凡夫に對する。)(二)高德の僧。ひじり。(三)高僧の尊稱。こゝは(一)。

【姫の後世をも救ひ給へと】 この老母が後の世に惡道に迷ふことなく、安らかに成佛と得るやうに助けて頂きたいと。自分の靈をも救つて頂きたい、の意。

【後世】 ゴセ 身の死後。後の世。あの世。來世。

【名僧】 メイソウ 名聲・德行ある僧。こゝでは、世間的に名聲の高い僧、の意。

【心安く見置きて】 見届けて安心して。

【見るにも】 見るにつけても。

【名僧せむの心】 名僧にならうといふ心。名僧として振舞ひたい心。

【名僧す】 動作を含まない名詞をサ變に活用させた珍しい例であるが、この種の他の語が同様に活用せられてゐないところを見ると、この語が當時一種の際立つた内容と語感とをもつてゐたらしいことが想像せられる。

【尼君】 アマギミ 出家した貴婦人の敬稱。こゝでは、源信から母をさす。

【尼】 (一)佛語。出家の女子。女の僧。比丘尼。(二)女を罵つて呼ぶ稱。

【宮原】 ミヤバラ 宮のかたぐ。官方。

【悲しく】

【悲し】 (一)身に染みて切に思ふ意をいふ語。いとほし。いとし。(二)感情を専ら悲哀の意にかぎつて「嬉し」の對の意をいふ語。歎かほしい。愁はしい。こゝは(一)で、身に染みて深い感じに打たれる、の意。

【山籠り】 ヤマゴモリ 世間を離れ山寺にこもつて、専心佛道を修行すること。叡山では弘仁十三年(一四八二)に勅許を得て、天台學徒の大乗戒を受けた者は十二年の間山を下らず専ら學業を修める制になつてゐた。

【今は】 それでは。

【山を出づべからず】 決して山を出はいたしません。

【べからず】 こゝでは、決意を表す。

【母と申せども】 我が母上ではわらせられるが。我が母上ながら。

【極めたる】 至極の。今昔物語集「極めたる盗人」「極めたる公の御敵」

【善人】 ゼンニン 佛教では、因果の理を信じて善業を積む人をいふ。

【今なむ胸落ちわた】 今はほんたうに心がしづまつて。

【落ちゐる】 (一)おちついてゐる。(二)安心する。

(三)道理があると思ふ。信ずる。こゝは(二)。

【冥途】 メイド 佛語。「冥土」とも書き、又「冥界」ともいふ。「幽冥の道途」の義で、死者の迷ひ行く世界をいひ、冥府即ち閻魔の廳もこゝに在る。六道の中の地獄道及び餓鬼道で、六道輪廻の思想から、死後冥途にある者も亦悟の世界に浮かび出ることが出来ると思へられた。

【愚に在すべからず】 うっかりしてゐてはなりません。修行をおろそかにしてはなりません、の意。

【愚に】 オロカに こゝでは、おろそかに、の意。

【法文】 ホフモン 佛語。佛法を説いてある文章、即ち經論・釋など。經典の文。こゝでは、法文を記した巻物。

【見つゝ】

【つゝ】 (助) 完了の助動詞「つ」を重ねた語で、用言の連用形につく。(一)兩事を同時にする意を表す。ながら。(二)同一の動作の繰返し行はれる意を表す。て。ては。(三)現に或動作・働きが繼續してゐる意を表す。てゐる。こゝは(二)。

【七年といふ年の春】 もう七年になつたといふその年の春。七年目の春。

【といふ】 七年をとりたてて強めてゐる。

【戀ひしくや思し召す】 逢ひたくお思ひでございませう。

【や】 疑問の助詞であるが、こゝでは、斷定を避けることによつて語調に丁寧さを加へてゐる。

【見えむにやは罪は滅びむする】 逢ふことによつて罪が滅びようか、決して滅びはしない。其許が道に進まれることによつてこそ自分の罪障も淨められて後世安樂も得ら

れようが、逢つたからといつて極樂往生が出来ようか。

【見ゆ】 ミゆ こゝでは、來てわが目に觸れる、出逢ふ、の意。

【に】 によつて。

【やは】 こゝでは、反語の助詞。

【罪】 ツミ 佛教では、心・口・意でなす一切の所作のうち道理に順はないものの總べてをいふ。而して罪には必ず苦の報があつて、因果の法は毫厘も枉げることとは出来ないが、たゞ懺悔し、善業を積むことによつてのみ、罪を滅し、苦の報を軽くすることが出来る。した。しかも一人道を成すれば、自他共にその利益にあづかるものとした。

【滅びむす】 「滅ぶ」の未然形に未來の助動詞「む(ん)す」の添はつたもの。「むす」は「むとす」の約で、意味は「む」に似て更に強い。(一五五頁「あきなむとす」の項参照)。

【これより申さざらむ限りは】 こちらからいつて上げない

限りは。

【只人にもなき人なりけり】 竝普通の人ではなかつたのだなあ。

【只人】 タグビト 「徒人」とも書く。(一)普通の人。なみの人。凡人。常人。(二)天子や皇后に對して、臣下の稱。(三)官位の低い人。地下人。(四)僧でない人。俗人。

【かくいひてむや】 かういふことがいへようか、いへはしない。

【てむ】 完了の助動詞「つ」に未來の助動詞「む」の重つたもの。こゝでは、可能の意を含んでゐる。

【遣はし】 「遣し」の誤。

【道に】 「道にして」(一〇二ノ七)に同じ。途中で。

【男、文を持ちて逢へり】 男が手紙をもつてやつて来て出逢つた。

手紙を持つた相手を主にして書いたもの。

【子の御房】 子にあたられるお坊さん。お坊さんになつて

わられる御子息。

【御房】 ゴバウ 「御坊」とも書く。(一)僧坊の敬稱。

(二)僧の敬稱。

【しかいふは我なり】 さういはれる當人は私です。

【尼君の手】 尼君の筆蹟。尼君の手跡。

【賤しの様】 アヤしのサマ 賤しい様子。見苦しい筆蹟の意。

【年の高きけにやあらむ】 年の老いた故であらう。

【け】 「故」に同じ。故。ため。

【心強く聞えしかども】 氣強く申したけれど。

【限の刻】 カギリのトキ 命の終るべき時。臨終。死際。

【見たてまつらでや止みなむすらむ】 ひよつとするとお目にかゝらないで終つてしまふであらう。

【や】 こゝでは、係の助詞で疑問の意を表す。

【親子の契】 オヤコの子ギリ 親子の縁。

【あはれる事】 感歎に餘りあること。

【あながちに】 無理に。しひて。たつて。遮二無二。

【無下に】 ムゲに 甚だしく。一途に。全く。

【無下】 (一)程度の甚だしいこと。一向なること。いちづ。全く。(二)極めていやしいこと。甚だいやしむべきこと。

【たのもしげも無し】 頼りに出来る様子もない。見込みがない。絶望の状態である。

【かくなむ詣で來たる】 この通り參上致しました。

【來たる】 きたる 「來」(自動、カ變)の連用形に「たり」の連體形の添はつたもの。自動詞四段活用の「來る」ではない。

【高やかに】 たからかに。高々と。

【やかに】 或語に添へて、それを副詞化する接尾語。

【さはやかに】 「しのびやかに」

【今朝曉にこそ人は出し立てつれ】 今朝夜明に人を出したばかりなのに。使の者を出發させたのは今朝の明け方のことだつたのに。

【かく在しければにや】 このやうに重態でをられた所爲な

のか。

【使は逢ひたりつる】 使は出逢ひました。使には逢ひましたよ。

【つる】 係の詞がないのに、連體形で結んで餘情を持たせた言ひ方。

【あな】 切に思ふ時に發する聲。(喜・怒・哀・樂共にいふ。)あなや。あら。

【逢ひ給ふまじきにか】 お逢ひすることは出来ないのだからか。

【まじ】 推量して否定する意の助動詞。

【息の下にいへば】 息も絶えさうにかすかな聲でいふと。

【息の下】 イキのシタ 息の絶えようとするさま。聲のかすかなこと。

【念佛】 ネンブツ 廣義には、稱名念佛(口に佛名を稱へること)・觀相念佛(靜坐して佛の相好)・實相念佛(佛の體果の本體たる實相の理を觀すること)の三つを含むが、狹義には稱名念佛をいひ、觀相念佛及び實相念佛を觀佛といふに對する。こゝは狹義。

念佛の語は諸佛に通ずるが、實際には諸大乘中阿彌陀佛に限られてゐる。その故は念佛を以て一切衆生を佛國に往生させる誓願を立てたのは彌陀一佛だからである。善導によれば念佛は口稱佛名であり、且、本願の行として阿彌陀佛によつて樹立せられたもので、一切行中最大・最勝、凡夫往生の第一行である。

我が國に念佛の行はれたのは聖徳太子以來のことであるが、慈覺が入唐歸朝の後叡山に引聲念佛を始めてから彌陀淨土の信仰は諸宗の裏面に一系の勢力を醸成するに至り、殊に法華信仰と融合して一般民間に行はれたものの如く、今昔物語集卷十三から卷十五にはその例は枚擧に遑がない。

又、源信が往生要集を著し、淨土諸宗開立の基礎をなした我が國淨土信仰確立の偉大な祖師であることは特に本課に於て忘れてはならぬことである。

【力なきに】 (一人で念佛を唱へるだけの)力が無い上に。

【合はせて】 こゝでは、聲を合はせる意で、念佛を共に唱

る。

【來らざらましかば】 若し來なかつたとしたら。

【ましかば】 事實に反したことを假定して想像する意の「まし」の已然形に、假定の條件を表す助詞「ば」の添はつたもの。「若し……であつたら」と、事實に反したことを假想するに用ゐられる。

【かくはなからまし】 こんなではなかつたであらう。これほど貴くはなかつたであらう。

【機縁】 キエン (一)佛語。衆生に善根の機があつて教法を受ける縁となるもの。(二)轉じて、因縁。ちなみ。(三)折。機會。こゝは(一)。

【機】 本來自己の心性に有し、教法の爲に激發されて活動する心の働きをいふ。

【往生】 ワウジャウ この世に死して他の世に往生する意であるが、普通には、念佛の行者が、阿彌陀佛の誓願によつて、極樂に生まれるをいふ。

極樂は阿彌陀佛の淨土で、圓滿完全・自由安樂の理想

へることである。

【貴き事ども】 こゝでは、往生に關するいろいろのありがたい事柄。即ち彌陀の本願とか、聖衆の來迎とか、極樂の莊嚴とか、念佛して往生した人の話とかいふ類のことであらう。

【勸に】 ネンゴロに「ねもごろに」の音便。「懇に」とも書く。こゝでは、眞心をもつて、本氣に、の意。

【道心を發して】 ダウシンをオコして 道心を奮ひ起して。

【道心を發す】 普通には始めて求道の心を發す意にいふが、今昔物語集には既に入道してゐる者が、更に道心を奮ひ起す如き場合に用ゐてゐる用例が多い。

【道心】 道即ち菩提を求める心。

【消え入るやうに】 消えてなくなるやうに。

【消え入る】 (一)深く悲しみに沈む。(二)絶え入る。死ぬ。

こゝでは、心亂れぬ安らかな死に方を形容したのであ

郷として、諸佛淨土の標準とせられるもの。諸佛の淨土中、實際信仰の對象として有力であつたものは、彌勒の兜率と阿彌陀の極樂とであつて、前者は上生思想となり、後者は往生思想となつたが、極樂往生の思想は次第に兜率上生の思想を壓倒するに至つた。

【善知識】 ゼンチシキ・ゼンヂシキ (一)我を善道に導き入れる善い知人。善い朋友。(二)轉じて、智徳人に勝れて能く人を教へる力ある人。自ら菩提を修し、他をしてこれを修せしめる者。高僧。(三)更に轉じて、人を善道に導く事柄・機縁等。こゝは(一)。

【善】 こゝでは、道の上で我を益する意。
【知識】 佛語。我に知識せられる人、即ち我がその心を知り、その貌を知る人の意。知人。朋友。

【七七日の法事をたしかに修し終へて】 七七日の法事を残りなく丁寧に營み終つて。

惠心僧都繪詞傳には「僧都悲喜こもく、終焉の體相をみづから畫きて、一世の間これを護持し、朝夕悲母

に仕へ奉るの思をなして、孝思を盡させ給ひぬ。又喪中には七日ごとに、彌陀の尊像をゑがきて、新佛供養し奉り、殊さらに誦經念佛して、殷懃の追修をいとなみ給へり。世に七幅の彌陀尊像と稱せし其中の一幅ならびに臨終儀相の畫圖、ともに今台麓來迎寺の庫藏にあり」とある。

〔七七日の法事〕 シチシチニチのホフジ 人が死んで後、初七日から七七日まで即ち中陰の間、七日毎に追善供養の爲に行ふ法會。

〔中陰〕は又「中有」ともいひ、此に死して彼に生ずる中間の陰形をいふ。人の死するや極善・極悪の人は直ちにその到るべき所に到るが、その他の者は必ず中有

二 解釋

1 主題 源信僧都を聖の道に勧め入れ、やがて僧都の勧めによつて往生の素懷を遂げたその母。

2 構想

(1) やんごとなき學生になつた源信に、名僧を戒めて聖人の道を勧めたその母(初—九九ノ七)。

イ やんごとなき學生になつて、宮の法華八講に召された源信。

の身を感じ、七日を一期として本生處に生じ、最も晚い者も第七期の終までには必ず一處に生ずるとする。

中陰の法事は、この生縁の定まらない間に、追福の力を以て善處に生ぜしめようとして修するものである。

〔修す〕 シユス 行ふ。修める。學ぶ。「行法を修す」「念佛を修す」

【貴びけるとなむ語り傳へたるとや】 有難がつて重んじた」と語り傳へたとかいふことである。

今昔物語集の各説話は「語り傳へたるとや」で終つてをり、中にも「……となむ語り傳へたるとや」と結んであるものが多い。これはわざとおぼめかして傳説の體にしたものであらう。

ロ 八講後御下賜の捧物を贈つたのに對して、名僧を戒め、聖人の道を勧めて來た母の手紙。

ハ 母の手紙に感激して山籠りの覺悟をした源信。

(2) 臨終に、源信僧都の勧めによつて往生の素懷を遂げたその母(九九ノ八—終)。

イ 山籠り七年、母を訪ねようとして母に禁められた源信。

ロ 山籠り九年、急に母を戀ひしく思つて出立し、途中母からの迎へに逢ひ、臨終に念佛を勧めて貴い往生を遂げさせた源信。

ハ 法縁の深かつた親子の契に對する感歎。

3 敘述

〔幼くして比叡の山に登り、學問してやんごとなき學生になりければ〕——幼くて山に登つた由來については、今昔物語集卷十二の「横川源信僧都語」第三十二に記されてゐる。傑出した學者になつたことについては、一乘要決・往生要集その他名著を遺してゐることによつても明らかである。

〔遣せ給へる物共は喜びて賜はりぬ。かくやんごとなき學生になり給へるは限りなく喜び申す。但し、かやうの御八講に參りなどして歩き給ふは、法師になし聞えし本意には非ず。そこにはめでたく思はるらめども、姫の心には違ひにたり〕——一語一句肺腑を衝く力がこもつてゐる。賜物を喜び、やんごとなき學生になつたことを喜ぶと共に、それは法師にした本意ではないと斷言し、「そこにはめでたく思はるらめども」と虚を突き、重ねて「姫の心には違ひにたり」と切言してゐる。表面から見れば權勢と榮華とを求める外に何ものもなかつたかと思はれるやうなこの時代に、かういふ母親が存在したといふことに驚かされる。

〔多武峯の聖人の様に貴くて、姫の後世をも救ひ給へと思ひしなり〕——増賀聖がかくの如き尊敬を集めてをられたことも、同代を知る上に極めて重大な事實であるが、佛教に於ても、現世利益の追求がその本領であつたといはれるこの時代に、「姫の後世をも救ひ給へ」と念じて出家させた母のあることは看過しがたいことである。しかもそれは「名僧にて花やかに歩き給はむは、本意に違ふ事なり」といふ名僧否定に立脚したはつきりとした要求である。この時代の文學にかういふ手紙が記載せられてゐることは、極めて意義の深いことである。

〔我が年老いぬ。生きたらむ程に、聖人にして在せむを、心安く見置きて死なばやとこそ思ひしか〕——最後の一句まで、眞の發心を勧め、眞の修行を求める熱意が脈々として動いてゐる。

〔僧都これを見て、此の二度の返事を法文の中に巻き置きて、時々取り出して見つゝぞ泣きける〕——「法文の中に巻き置きて」といふ一句によつて、源信僧都がこの母の手紙にどんな感激を覚え、どんな覺悟をしたかが窺はれる。

〔げに戀ひしくは思ひ聞ゆれども、見えむにやは罪は滅びむする〕——六年逢ふことをしなかつた我が一人子から逢ひたいというて來た便りに、かく答へてゐる母の道心には唯々驚かれる。併し母の眞心が生きて徹するのはかゝる際である。「横川源信僧都語」(參考)に、「母は清原の氏也極て道心深かりけり」とあるのが肯かれる。

三 批評

源信僧都の學徳が一世に聞え、後世にまで深い感化・影響を及してゐる事實に立脚して、その由つて來る因を母の道心に見出した話である。この話がそつくり史實であるかどうかは疑はしい。何となれば、發心集の「惠心僧都隨母心遁世事」や三國傳記卷一の「源信僧都之母事」に傳へてゐる所は話の筋が違つてゐる。又この母の手紙にしても、今昔物語集作者の記述であらう。併し諸傳を一貫してゐる事實は、母の道心の堅固であつたことと、それに照らされて僧都が眞の修行に就いたことである。そしてこの事實と消息とを最も完全な表現に導き得たものは今昔の作者であつた。作者の裏なる理解が、或は母の手紙となり、或は源信僧都その人の言動として傳へられたものとすべきであらう。今昔物語集の中でも傑出した條の一つであると思はれる。

三 備 考

一 指導の問題

(一) 平安朝文學の代表作品として、竹取・伊勢・土佐・古今・源氏・枕・大鏡・榮華等を學習し來つた生徒に、それらの上には現れてゐなかつた時代思潮の一面を示し、やがてそれが來るべき中世文化の先驅をなしてゐる事實を學ばしめることが、指導に於ける文學史的問題として重要な點であらう。題材に於ても、思想に於ても、用語に於ても、又文體に於ても、この關係が指摘せられなくてはならぬ。

(二) 本課の中心は母の手紙にある。この手紙に溢れてゐる母の道心と熱誠とが把握せられ、理解せられることによつて、全文の構成が見え、作者の意圖が明らかにせられる。殊にやんごとなき學生と聖と、又名僧と聖とを對立させてゐる所には、確に時代を超越した識見と道心の深さとが示されてゐる。鎌倉時代に至つて靈の救としての佛教が興起し來つたのも偶然ではないことが考へさせられる。尙、「親は子の爲、子は親の爲に、限なかりける善知識かな」といつて感歎したといふ源信の語は、やがて作者の思想に外ならぬ。俗縁が直ちに法縁であつたことを感歎してゐるのである。

(三) 説話文學としては、日本靈異記・三寶繪詞・大和物語の後を承け、更に中世の宇治拾遺物語・古今著聞集等と一系列をなすものであり、又榮華・大鏡と共に、平安朝時代の抒情的文學から、鎌倉室町期の敘事的文學への過渡期を示す

一五 新古今集抄

一 解題

一 本文

新古今和歌集の中から、同代に於ける代表歌人の作を選んだものである。

新古今和歌集二十卷は、勅撰和歌集の第八代集である。歌數約二千、撰者時代のものが三分の一強、萬葉集以後千載和歌集までのものが三分の二、作者三九五（或は三九四）名、歌數の多いのは西行（九十四首）・慈圓（九十首）・良經（八十首）・俊成（七十二首）・式子内親王（四十九首）・定家（四十七首）・家隆（四十三首）・寂蓮（三十九首）・後鳥羽院（三十四首）・俊成女（二十五首）・雅經（二十二首）・有家（十九首）・秀能（十七首）等である。藤原親經撰眞名序、同良經撰假名序がある。

異本が多く、京師本・鎌倉本・隠岐本の系統がある。京師本は撰進された原典からの傳寫本、鎌倉本は東鑑に見えるもの、隠岐本は後鳥羽法皇が隠岐で定めさせられたものである。

二 撰者

明月記、土御門天皇の建仁元年（一八六一）七月二十六日の條によれば、和歌所寄人十一人、藤原良經・源通具・源通信・釋慈圓・藤原俊成・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・源具親・釋寂蓮等が選ばれたことになつてゐる。

（後に藤原清範・隆信朝臣・鴨長明・藤原秀能等を加へた。）尙、家長日記によれば、二條殿の廣御所を改造して和歌所とした由が見える。

この年の十一月三日に、後鳥羽院の院宣で新古今和歌集撰上のこと仰せ下された。撰者は、時の寄人、右衛門督源通具・大藏卿藤原有家・左近中将藤原定家・前上總介藤原家隆・左近少將藤原雅經・沙彌寂蓮の六人であつた。但し寂蓮は撰進に先立つて歿した。撰進は元久二年三月二十六日で、竟宴が行はれたのは二年三月二十七日であつたか、後鳥羽院御親裁の御熱心は竟宴後にも切繼のことが行はれ、今日のものに至るまでには前後九年を要してゐる。

三 採擇の趣旨

萬葉調・古今調と併び稱せられる新古今調の代表的作品を掲げ、和歌の史的變遷の跡を具體的に學ばせると共に、新古今調の特色を把握させる爲に掲出した。

二 教材としての研究

一 註解

【後徳大寺左大臣】ゴトクダイジサダイジン 藤原實定^{とつてい}。

左大臣公能の子で、母は藤原俊忠の女である。永萬元年（一二二五）正二位にすゝみ、文治五年左大臣となつた。祖父徳大寺左大臣實能^{徳大寺家の祖}に對して後徳大寺左大臣といふ。建久二年（一八五一）剃髮して如圓と號した。

同年十二月歿、享年五十三（一説六十三）。歌道は母方の叔父俊成の系統を承け、又音曲を能くし、殊に神樂道は好方の傳統を承け、子公繼に傳へてゐる。西行とは歌の上で一時交遊があつた。歌は特に敘景歌にすぐれた作多く、主觀味を加へられてゐるのが目立つ。素材として海

が多く採られてゐるのも異色である。

勅撰集に入つた歌は、千載集以下各勅撰集に見え、平家物語には今様が一首載つてゐる。家集に林下集がある。

「徳大寺」は藤原實能が京都の衣笠岡に建てた寺の名であるが、後、實能の子孫の氏となつた。

【なごの海の歌】 なごの海の遠く靡いてゐる霞のきれ間から眺めると、今沈まうとする入日の紅を、洗ふやうに沖の白波が立ちさわいでゐる。(巻一、春歌上)

題詞には「晚霞といふことをよめる」とあるが、家集には「按察使公通卿十首題を人々によませ侍りしに晚霞」とある。

【なごの海】 「なご」といふ地名は越中・安房等にもあつて、名子・名兒・那吳・那古等種々に作るが、こは攝津國にあるそれで、今の大阪市道頓堀の南であらうといふ。昔は海に臨んでゐた。名所圖會に「今大阪道頓堀の南今宮・木津・難波等の總名なるべし。住

吉浦に續けば古詠之を讀み合せたり」とある。

【霞のま】 霞の間 霞が遠く水平線の上へ靡いてゐる。その霞の裾と海との間の隙間となつてゐる所。

【入日をあらふ沖つ白波】 海に沈み入らうとする夕日のこなたに、沖の白波が起伏してゐる、その状態を、白波が入日を洗ふと形容したのである。

【皇太后宮大夫俊成】 クワウタイコウグウダイブシユンゼイ 藤原俊成。俊忠の子、定家の父。永久二年(一七七四)に生まれ、初名は顯廣といつたが、仁安二年俊成と改めた。同年正三位に進み、次いで右京大夫・皇太后宮大夫等に任ぜられたが、安元二年出家して釋阿と號した。元久元年(一八六四)十一月歿、享年九十一。五條京極(延慶本・長門本・山槐記等の説)に住んだので五條三位といふ。壽永二年(七十一)後白河法皇の院宣を蒙つて千載和歌集を撰し、文治三年奏上し、建久八年式子内親王の仰せによつて古來風體抄(八卷)を書いた。歌合の判者となつたことは永萬二年から建仁二年までの三十七年間に互つ

て十數回あるが、作者となつたことは比較的少い。基俊

と師弟の間柄であつたが、和歌の上では基俊と悪く、俊頼に私淑した。歌風は物靜かな沈澁の中から利那々々の「あはれ」をよみ、餘情を残すことに努め、一度表現した

ものから逆に「あはれ」の情を味はひ、そこに心と詞との一致を見出すのみならず、言外の餘情を求めて象徴美を重んじた。随つて歌論も餘情としての幽玄を説き、

その餘情は壯美と繊細美とを統一した靜寂美にあつた。併し新古今集にとられた歌は概して客觀味のあるもので俊成のあまり意圖しなかつた方面が表れてゐる。

勅撰集に入つた歌は、詞花集一首・千載集三十六首・新古今集七十三首・新勅撰集三十四首、以下十二集の總べてに入集し、合計凡そ四百首。家集に長秋詠藻(三卷)がある。

【またや見むの歌】 また見ることが出来るであらうか、恐らく二度と見ることは出来難いであらう、交野の御野の櫻狩の、櫻花が雪のやうに散る、この春の曙の美しい眺

は。(巻二、春歌下)

題詞に「攝政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに」とある。

【や】(助) こゝでは反語。

【交野】 カタノ (一八二頁を見よ)

【みの】 御野 「み」はこゝでは美稱。且、語調を整へてゐる。

【櫻がり】 櫻狩 櫻花を尋ねて見て歩くこと。「狩」といへば鷹狩のことで、冬の季節のものとなつてゐる。

他の季節には鷹が十分に使へないからである。春と秋には櫻や紅葉觀を兼ねての狩をし、これを櫻狩・紅葉狩といつた。後には轉じて、櫻觀・紅葉觀のことをさすやうになつた。(一八二頁「狩は懇にもせで」の項参照)

【駒とめての歌】 乗つてゐる馬をとめて、なほ暫時水を飼はう、山吹の花の露もこぼれ加つてゐるこの井出の玉川で。(巻一、春歌下)

題詞はない。古今集三〇「神あそびのうた」の「ささ

のくまひのくま川にこまとめてしばし水かへかけをだにみむ」が本歌である。

〔水かはむ〕 水を飲ませよう。

〔かふ〕 飼ふ (一)動物に物を與へて飲食させる。

(二)動物に食を與へて養つておく。(三)食ふ。

〔山吹〕 ヤマブキ 「棣棠花」とも書く。薔薇科、やまぶき屬の落葉灌木。莖の高さ一—一・五米で莖皮は綠色。葉は互生。長卵形で粗鋸齒を有する。多く枝端に五瓣の黄色花を散生するが、重瓣のもの(やへやまぶき)や白花のもの(しろやまぶき)もある。單瓣のものは小堅果を結び重瓣のものは結實しない。異名—おもかげぐさ・かゞみぐさ。

〔井出の玉がは〕 キデのタマがは 現京都府綴喜郡井出町玉水驛附近を流れて木津川に注ぐ。六玉川(山城の井野玉川、武藏の關布玉川、陸奥の野田玉川)の一で、古來和歌に多く詠ぜられた。昔左大臣橘諸兄がこの川の近くに別業を營み、汀に山吹を植ゑて愛したといふ。名所志に

「諸兄公の別館は井出の東觀音寺の南三里許に在り。舊跡山麓にして、北大塚・南大塚といふ。田間に泉水・築山の跡少々残り。又岩松・中島などいふ田あり。山吹花はこの谷の奥高堤といふ所に在り。花は一重なり」とある。

【式子内親王】 シキシナイシンワウ 後白河天皇の皇女、御母は大納言藤原季成の女高倉三位局成子。御母系はすべて文雅の道に優れ、内親王は和歌は勿論繪畫に巧であらせられた。十餘歳で既に准三后の待遇を受けられ、平治元年(一一一九)賀茂齋院に任ぜられた。嘉應元年病を以て齋院を辭され、建久八年事に坐して御出家、法名を如法といはれた。大炊殿・大炊御門齋院・萱齋院・高倉宮とも申し上げる。建仁元年(一一八一)正月薨去。御壽未詳。定家と御親交があつた。その御歌は題材の廣汎さ、詠み口の自由さ、或は女性らしい調べ、哀切な情緒の表現、その他何れの點より見ても、千載・新古今時代第一の女流歌人たる資格を備へられてゐた。

御歌は勅撰集では、千載集・新古今集・新勅撰集以下總べての勅撰集に收められてあり、特に新古今集に四十九首まで撰入されたことは特筆すべきことである。

家集に式子内親王集・前齋院御集がある。

【山ふかみの歌】 山が深いので春が來たとも氣がつかないでゐるわびすまひの松の戸に、とだえがちに雪解の雫が落ちかゝる。(卷一、春歌上)

題詞に「百首歌たてまつりし時、春の歌」とある。正治二年初度の百首歌中の歌、内親王薨去の前年の御作。

〔山ふかみ〕 山が深いので。

〔み〕 (接尾) 形容詞の語幹に添へてこれを副詞化し、「の故に」の意を表す。

〔春とも知らぬ〕 「春が來てもそれとわからぬ深山」 「春が來ても色を變へぬ常緑樹松」と上にも下にもかかつてゐる。

〔松の戸〕 山中生活の粗末な家をかきつたものであらう。

〔たえだえかかゝる〕 とだえ／＼に落ちかゝる。間違に落ちて來てかゝる。

〔雪の玉水〕 雪解けの雫。

【夕立の歌】 夕立の後の雲もあとかたもなく過ぎて行つた山に、夏の日も傾いて、涼しくさみしい蜩の聲がする。(卷三、夏歌)

題詞に「百首歌の中に」とある。

〔とまらぬ〕 特に「とまらぬ」といつたのは、古く、山は雲の生ずる所とされたからである。

【寂蓮法師】 ジャクレンホフシ 藤原定長。僧俊海の子、幼にして叔父俊成に養はれ、中務少輔に任ぜられたが、俊成に實子定家が生まれたので、出家して寂蓮といつた。新古今集の撰者に加へられたが、撰進にさきだち建仁二年(一一八二)七月歿。その歌は繊細・巧緻をききめ、巧みな言葉の組立が多い。歌論の上では六條家の家學を承けた顯昭と争ひ、その歌才は定家にも推賞せられたといふ。

勅撰集に入つた歌は、千載集七首・新古今集三十五首である。家集に寂蓮法師集がある外に、寂蓮法師百首が傳はつてゐる。

【くれてゆく歌】 ゆく春のゆき著く先は何處とも知らな
いけれども、たちこめた霞の中へ消えおちてゆく宇治川
の柴舟を見ると、何となくあの舟のゆくへが春のゆくへ
のやうに感じられる。(卷二、春歌下)

題詞に「五十首歌奉りし時」とある。建仁元年二月の
作。

【春のみなど】 舟の行き著く「湊」を春のゆくへに利
かした譬喩。又「柴舟」の縁語。

古今集、秋下「年ごとにもみちばながす龍田川みなど
や秋の泊なるらむ」が本歌となつてゐる。

【霞におつる】 遠く一面の霞に蔽はれてゐる下流の方
へ姿を没してゆく意。

【宇治】 宇治川。淀川の上流で、京都府宇治郡を流れ
る部分の稱。源は琵琶湖の南端より流出し、滋賀縣滋

賀郡を南流して(瀬田川)西折し、京都府宇治郡を迂
曲して流れ(宇治川)、山城盆地に流入して巨椋池きりぼりいけの北
方、伏見との間を流過し、盆地の西南隅で木津川(上
流は伊賀川)と桂川(上流は大堰川)を合はせ、山城
盆地がわづかに攝津平野に通じてゐる山崎・男山八幡
の狭窄部から流れ出て淀川となり、大阪市を貫流して
大阪灣に注ぐ。全長約八〇浬。

【柴舟】 シバブネ 柴を積んで山川を下る舟。しばを
ぶね。しばつみぶね。

【さびしさはの歌】 このさびしさは、その色かの色と取立
てて指していふものもないさびしさである。横立つ山の
秋の夕暮はいひやうのないさびしさである。(卷四、秋
歌上)

題詞に「題しらす」とあるが、家集には「左大臣家十
題百首内」とある。

【横】 マキ こゝでは、杉・檜などの通稱。普通には
「真木」と書く。

【藤原定家】 フジハラノテイカ 鎌倉時代の歌人。俊成の

二男、爲家の父。應保二年(一八二二)に生まれ、官位
は正二位權中納言にすゝみ、二條の北、京極の西に住ん
でゐたので、京極中納言・京極黃門と稱せられた。歌人
としての彼はまづ養和元年二十歳の時に初學百首、壽永
元年に堀川百首を發表し、文治四年には千載集に八首入
撰の榮を得てゐる。併し歌壇的に活躍したのは比較的晩
年のことに屬し、四十歳頃から承久の亂に至る凡そ二十
年間がその全盛時代であつた。元久二年新古今集の撰進
に與り、貞永元年單獨で新勅撰集撰進の命をうけたが、
内々の奏覽のみで御裁可をうけない前に後堀川上皇の崩
御にあひ、その草稿は焼却した。天福元年出家して明靜
といひ、仁治二年(一九〇一)に歿した。享年八十。歌
風は、新古今風を最もよく代表し、絢爛・瑰麗な技巧と
幽遠・玄妙な情趣とにより特色づけられてゐる。尙、そ
の歌論に即していへば、俊成の幽玄の極致を完成した有
心體を理想とし、意圖的に内容 形式を整へ、その融合

から生ずる複雑な情趣と餘韻・餘情とを庶幾した結果、
主智的・技巧的傾向が著しいが、その勝れたものは象徴
の域に達してゐる。晩年には、連歌にも親しみ、更に學
究的方面として、定家假名遣を設定し、三代集・伊勢・
土佐・源氏・更科等、老大な古典校勘の事業をなした。
勅撰集に入つた歌は、千載集八首・新古今集四十六首
を始とし、以下の勅撰集にも多い。家集に拾遺愚草・
拾遺愚草員外があり、その歌数は長短合はせて三千八
百八首に及ぶ。歌論書として、近代秀歌・詠歌大概・
毎月抄等があり、その他假託の書多く、更に十九歳か
ら七十四歳までの日記に明月記がある。又小倉百人一
首は定家の撰であると傳へられる。

【旅人の歌】 峯のかけはしを秋風に袖を吹きかへされな
がら旅人がゆく。秋の夕日がそのあたりを照らしてい
かにもものさびしい光景である。(卷十、羈旅歌)

題詞に「旅の歌とよめる」とある。建久七年九月十
八日、内大臣(良經)家百二十八首歌のうちの一。

定家三十五歳の作。

【吹きかへす】(一)吹き驟す。風が吹いて驟す。(二)風が吹いてものを元へ戻す。(三)風筋を變へて吹く。こゝは(一)。

【かけはし】懸橋 (一)梯子。(二)山崖から山崖へ連ねて板や木の枝などを渡した橋。棧道。閣道。棧閣。

(三)假橋。こゝは(二)。

【見わたせばの歌】眺めわたすと、花も紅葉も野山を飾るものは何もない。浦の苔茸の小屋を中心としての秋の夕暮は誠にさびしい情景であるよ。(卷四、秋歌上)

題詞に「西行法師、すゝめて、百首歌よませ侍りけるに」とあるが、拾遺愚草には「二見浦百首、文治二年圓位上人勸進之詠百首和歌」とある。定家二十五歳の作。

【浦】(一)海や湖の陸地に入り込んだ所。(二)海邊。

【苦屋】トマヤ 苔茸の小家。海人の住む家などといふ。とまのや。とまやかた。

「苦」は、菅や茅で編んだ藁こものやうなもの。和船の上
部や、屋根を覆ふに用ゐる。とば。

【藤原家隆】フヂハラノカリユウ・フヂハラノイヘタカ
鎌倉時代の歌人。壬生中納言光隆の子。保元三年(一八一八)に生まれ、寂蓮の養子となり、後、俊成に師事した。後鳥羽天皇の殊遇を蒙り、從二位・宮内卿まで進み、世人壬生二位又は二品と稱した。建久の頃から歌人として顯れ、新古今集の撰進に與つた。この頃が彼の最も活動した時期である。承久の亂後は失意の境にあつたが、依然として後鳥羽上皇の殊寵を蒙り、詠草を隱岐に贈り参らせ、上皇亦家隆の歌合に判詞を賜はるなどのことがあつた。嘉禎二年出家して佛性と號し、三年(一一九七)歿した。享年八十。その聲名は、定家と併び稱せられ、且相互に尊敬し合ひ、勵まし合つた。歌風は定家に比し遙に自由で、技巧を弄ばず、平易・率直の趣がある。多作家で、頓阿の井蛙抄には、詠歌六萬といつてゐるが、散逸多く、現存のものは二千八百餘首に及んでゐる。

てるうみ」「にほのみづうみ」などともいはれる。

【や】こゝでは、感動の助詞。

【うつろふ】映るふ「映る」の延言。光が映る。影がうつる。

【浪の花】浪がしらの白いのをいふ。

【志賀の浦やの歌】志賀の浦に打寄せる波は、岸の方が次第に凍つてゆくにつれてだん／＼岸から遠くなつてゆく。その遠くなつた波の間から、氷え／＼と凍つたやうなつめたい光を放つて、有明の月がのぼるよ。(卷六、冬歌)

題詞に「攝政太政大臣家歌合に、湖上冬月」とある。後拾遺集六冬「小夜ふくるままに汀や凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」が本歌である。

【志賀の浦】シガのウラ 滋賀縣滋賀郡の湖畔。琵琶湖の西南岸である。

【志賀】は、志賀・磯鹿なども書き、現滋賀郡の地である。勝景の地で、景行・成務・仲哀の第三代は高

勅撰集に入つた歌は、千載集五首・新古今集四十二首、以下の勅撰集にも收められた歌は数多い。家集に壬二集があり、一名玉吟集ともいふ。歌論に和歌口傳がある。

【鴉の海やの歌】鴉の海に秋の月の光が照り映えると、浪がしらの白さに秋らしいけはひが見える。

古今集五秋歌下の「草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける」を本歌としてその反證をあげたやうな趣の歌である。(卷四、秋歌上)

題詞に「和歌所歌合に、湖邊月といふことを」とあるが、家集には「仙洞にて當座の御會に」とある。

【鴉の海】ニホのウミ 琵琶湖の古稱。語源に就いては諸説あるが、普通には、日野川(蒲生河)の下流を、邇保郷(現滋賀縣野洲郡兵守村の北里村あたりであらうといふ)を流れるに因つて、仁保川(邇保川)といひ、更にその琵琶湖に流れ入るあたりを邇保の海といつたのが、やがて琵琶湖の總名になつたのだらうといはれる。和歌などに多く用ゐられ「には

穗穴宮を、天智天皇は大津宮を皇居とせられた。
 「凍りて出づる」 月光の冴えて寒げなのを形容すると共に、沖の方の凍らうとする趣を暗示してゐる。

【藤原秀能】 フヂハラノヒデタフ 鎮守府將軍藤原秀郷の後胤、河内守秀宗の第二子。壽永三年（一八四四）生まれた。初め土御門内大臣通親の祇候であつたが、十六歳の時、和歌を以て後鳥羽上皇に召されて北面となり、堂上を許された。十八歳の時、和歌所寄人に加へられ、後正五位上・出羽守兼左衛門尉に至つた。承久の亂に大將軍として出陣し、亂後、熊野に於て出家し、如願と號した。仁治元年（一九〇〇）歿、享年五十七。後鳥羽上皇をめぐる幾多の歌人中、身分の低い方であつたが、建保三年水無瀬殿の清撰の御歌會の時には、末代までの面目を施した由が増鏡に見えてゐる。新古今時代の歌としては、比較的平明であつて、特に敘景の歌に勝れてゐる。勅撰集に入つた歌は、新古今集の十七首を始として、全部で七十九首ある。家集に如願法師集がある。

州の附近には、蘆が叢生して難波の景物をなした。後、人工的の改修によつて島と陸地とを接続せしめ現大阪平野を成すに至つた。

〔あし〕 蘆・葦 禾本科、よし屬の多年生草本。水邊に自生し、地下莖は長く横走する。莖は直生・剛強で竹に似た節を具へ、高さ一・五米内外。葉は披針形・鋭尖頭で、全形はすゝきに似、秋日莖頂に大きい穂を出し圓錐花序をなす無数の小花を著ける。異名よし・はまをぎ・たにはぐさ。

【月すめばの歌】 月が澄みゆくにつれ、あちらこちらに漂うてゐた浮雲もすつかり消え去つて、今までは雲の動きによつて空をゆくのが見えてゐた嵐も、唯深山がくれをとよみゆくわい。（卷十六、雑歌上）

題詞に「熊野に詣で侍りし時、奉りし歌の中に」とあつて、秀能の歌二首あるうちの後の一首。

〔み山がくれ〕 深山隠れ 山の奥深くかくれること。又、山の奥深きところ。

【夕月夜の歌】 宵月の光に照らされて夕潮が満ちて來らしい。この難波江の汀のあしの短い若葉をひたくと白波が越えて後から後から寄せてくるよ。（卷一、春歌上）
 題詞に「詩をつくらせて歌にあはせ侍りしに、水郷春望といふことを」とあつて、左衛門督通光のと二首あるうちの後の一首である。元久二年六月十五日の所謂元久詩歌合の歌である。秀能二十二歳の作。所謂切繼によつて奏覽の後に加へられた歌である。

〔夕月夜〕 ユフヅクヨ (一) ゆふづきよ。夕月のある日暮がた。夕方にだけ月のある夜。(二) 夕月夜の頃の月。夕月。こゝは(一)。

〔難波江〕 ナニハエ 今の大阪城の在る上町一帯の丘陵（洪積層）以西は往古殆ど海面に没し、大阪丘陵の北端は所謂難波江の崎といひ、その内側を難波江と稱して深く灣入してゐた。それが神崎川、武庫川等の運ぶ土砂による沖積作用と緩漫な陸地の隆起との爲に灣内に多くの浮洲を生じ、これを八十島と呼んだが、砂

【攝政太政大臣】 セツシャウダジャウダイジン 藤原良經。九條兼實（月輪關白）の第二子。嘉應元年（一一八二）生まれた。後鳥羽上皇に重用せられ、建仁二年に攝政となり、元久元年に従一位太政大臣となり、建永元年（一一八六）急死した。享年三十八。死因について後世種々の臆説を生じ、刺客の手に斃れたとも傳へられる。和歌を俊成・定家に、詩文を藤原親經に學び、書畫の道に通じ、殊に書道に於ては、後京極様の祖と仰がれる。和歌には非常に熱心で、殊に建久四年張行の六百番歌合は名高く、新古今集の撰進にも力を致し、その假名序は彼の撰である。歌風は平易で、しかも感情が流露し、清新の氣に富んでゐる。自然觀照の歌に長じ、殊に落莫たる情景を得意とした。

新古今集に入つた歌は七十九首で、本集中第三位である。家集の月清集は式部史生秋篠月清集の略稱で、式部史生はわざと卑官を名告つたもの、秋篠月清はその雅名である。漢文日記に殿記があるが、散佚して傳は

る所は少い。それを抄出したものに除目抄がある。
【吉野山の歌】 櫻花の散つてしまつた故里の吉野山は、今は人跡も絶えて、花もない枝にさびしく春風が吹いてゐる。(卷二、春歌下)

題詞に「残春のころを」とある。建久四年、六百番歌合の際の作である。

【吉野山】 古くは芳野山とも書いた。吉野群山の最北端大峯山脈の一支脈で、北方吉野川畔から起り、南方青根峯まで峯脊一〇軒餘の尾根の稱である。山上は峯に沿うて道路開け、今吉野町を形成してゐる。山川の清き地、又櫻花の名所として、吉野朝皇居址として、大海人皇子・源義經・護良親王・村上義光父子等に關する史蹟として、或は更に「峯入り」の順路として、上古以來、史上に、又文藝の上にその名をくりかへされ、我が國民生活と深い關係を有し來つた。櫻の名所としての吉野山は吉野川の南岸に互る山脈の一部で、南は遙に大峯山に連なり、尾根溪谷に群生、散生、點

在してゐる。櫻は悉く白山櫻で、花色も多くは純白であるが、淡紅色のものも見うけられる。
「花のふるさと」 花の散りはたあとの里の意に、吉野は古く離宮などもあつた所であるから、故京の意をかねていつた句。

【人すまぬの歌】 年を経て關守も住んでゐなくなつた不破の關屋は板廂もすつかり荒廢してしまつて、その後にはたゞ秋風のみが吹き荒んでゐる。(卷十七、雜歌中)
題詞に「和歌所歌合に、關路秋風といふことを」とある。建仁元年八月三日、影供歌合の際の作である。

【不破の關屋】 フハのセキヤ 岐阜縣不破郡關ヶ原町松尾字大木戸坂に關址がある。創設の年代については一代要記は白鳳元年(一三三三)とし、帝王編年記は白鳳二年としてゐる。伊勢の鈴鹿・越前の愛發と共に三關と稱せられた。平安奠都以後、近江の逢坂の關が設けられてからはさほどの必要がなくなり、延暦八年(一四四九)に廢止された。今大木戸坂の南に藁葺の

小屋と板廂に圍まれた三坪程の庭園があり、園内に故關碑並びに「秋風や藪も昌もふわのせき」の芭蕉の句碑等がある。

【板廂】 イタビサン 板葺のひさし。

二 評釋

【なごの海の歌】——「入目をあらふ」は特異な句であり、繊細な心持を表す句であり、且この歌の要核でもある。はなやかで優雅な調べが感じられる。從來、上句は下句よりも劣つてゐるといふ批難があるが、それはやゝ散文的な所がさう感じられるのかも知れない。或は又「ながむれば」も動作が平易に詠まれてあつて、調べがたるむと考へられるのかも知れない。併しそこが餘り緊縮すれば、「入目をあらふ」がもつと際立つていけないであらう。第二句の「霞のまより」の「より」は、「に」であるといふ説もあるが、これは古今集の「やま櫻霞のまよりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」(紀貫之)より來てゐるのであらう。

【またや見むの歌】——初句の据ゑ方は當時にはしばしば見られる用法であるが、結句の名詞止と相應じて一首の調べを整へ得てゐる。「櫻がり」の「狩」と、「花の雪」の「雪」とは關聯があり、狩の頃は冬であるからといふ意味を下においた作歌だといはれてゐる。さうした巧みが巧みとして表面に目立たない徳が、この一首にはあるやうに思はれる。同時に一首の結構にも内容にも特殊なものは殆どみとめられないのであるが、やはり作者の老練・精緻の技巧が、一首の詞句の連続に隙のない手堅さを與へてゐるのだと考へられる。

【駒とめての歌】——山吹の花の雫の川水におちるのを見て、その艶に心惹かれて、しばしたゆたふ心持を詠んだもので

「廂」は、こゝでは、母屋から外側に差出した片流れの小屋根。窓・縁側・出入口等の上に設けて、日や雨を防ぐもの。

あらう。随つて「なほ水かはむ」の「なほ」は、そのたゆたひ心を示すものとして軽く解しておいていゝのではあるまいか。一・二句の如きをまづ措いて、結句を名詞止にしたのが、前の歌と同様、堅くして、みだれぬ風格を持してゐるのであらう。「花のつゆそふ」の句の如き、心こまかな言ひ方であるが、一首全體としての風格には、やはり念の入つた技巧の跡がうかゞはれるやうに思ふ。

〔山ふかみの歌〕——この歌は上句は深きあはれをいひ、下句には幽かなる艶があり、歌の心は主観的で表現は具象的と評されてゐるが、一首を通じてやはらかな語感があつて、姿が苦澁でないからさうした見方が生じ來るのであらう。たゞ「山ふかみ春とも知らぬ」の概念的な修辭とか「松の戸」の縁語とかに價値をみとめず、むしろ批難する方の評價が生じて來たときには、平坦な作風と見られるに至る歌と思はれる。

〔夕立の歌〕——一首全體が澁滯がなく、さらりと詠んであつて、所謂餘情・餘韻をこめたらしくみえないでゐて、夏日やうやく秋に近づくすゞしさを想はしめる所がある。「雲もとまらぬ」は平叙で外に意をふくめた所がないであらう。「も」と「とまらぬ」の語意によつて、「夏の日もとまらぬ」の意味をふくめたやうに考へる説もあるが、さうでない方がよい。併しさうした第二義的の解釋を生ぜしめるだけ、この一・二句は面白く優にいひ得たやうで、結局はよわい所があるのであらう。

〔くれてゆく歌〕——「みなと」と「舟」とは縁語として上下相應じてゐる。春の擬人視がげばくしく目立たぬのは、作者の作歌環境が作者の心理に滲透してゐる故であつて、下句の幽麗と應じて一種器用な又はなやかな調べを成してゐる。「知らねども」といつて、霞の中をこぎ下る柴舟を眺めてゐる心持を、一・二句のゆくへ知らぬ春と象徴的に通ぜしめた趣は巧緻である。たゞこの「知らねども」のことわりに俗調を感じる人はあるであらう。

〔さびしさはの歌〕——上句は巧みを凝らした句であり、それに「横立つ山の」と何気なしにつゞけた所が哀調をかもしてゐる。上句の技巧は反省的な意圖ある技巧であつて、根柢には繊細に洗練された感情がある。直截・簡明といふわけにはゆかないが、「その色としもなかりけり」の幽美は短歌史の上にやはり特徴あるものとしてみとめられてよい。「色」はそのまゝに取つて、「色彩」とみてよいであらう。「にほひ」乃至は「けはひ」、さびしき環境の一切であるとの説もあるが、「その色」といふ明瞭な指示的な言ひ方は、必ずしもさうした情趣的な感じを主として作歌に従つたのではあるまいと思はれる。なほこの歌は新古今集に西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の夕ぐれ」と次の定家の「見わたせば」の歌と三首併載され、且三夕などと併稱されてゐる。

〔旅人の歌〕——繪畫的な構成の歌であつて、線がほそく象徴的なにほひがある。「秋風に夕日さびしき云々」の連続の技巧には苦心の跡があると思ふ。主観的な句が餘りなく、客観描寫の如くみえるのであるが、實は作者の寂しさを表さうとする意圖、餘韻をたもたせようとする下心は十分にうかゞはれる。その點前出「夕立の雲もとまらぬ」の歌などよりは歌に骨がある。

〔見わたせばの歌〕——「花も紅葉もなかりけり」は、目に立つもののない寥廓たる風致をいつたので、「花もいらぬ紅葉もいらぬ」とか、花と紅葉を象徴的の意にとつていつたのではなく、比較的平明な具體的な詠み方である。だから、花・紅葉のうつくしさと比較して、秋の夕暮の寂寥をよしとする、いはば哀れ・寂びを尊重する心持を、この上句にみとめようとするのも考へすぎであらう。たゞ作者の歌が、この歌も又前の歌も秋の寂しさを詠み、それがすぐれた技巧歌の域に入つてゐることはたしかである。さうしてそれが新古今集の中に在つて、佳作の部に入るべきこともたしかである。

〔鳩の海の歌〕——自然を詠んで平靜に明淨に、しかも繊細なる情緒を把握してゐる。定家の「秋風に夕日さびしき」などよりも「浪の花にも秋は見えけり」の方が穏な調である。「浪の花」の「花」に意味をもたせた「秋は見えけり」であることいふまでもない。さうした點が或は一首としての色彩がやゝ褪せる原因になつたであらう。

〔志賀の浦やの歌〕——一・二句は「とほざかりゆく」がやゝ唐突にみえるが、これは後拾遺集「さ夜更くるままに汀や凍るらむ遠ざかりゆく志賀の浦波」(快覺法師)より來てゐる。本歌取としては巧みな用ゐざまでである。「凍りて出づる」は眼目であり、またよく生きてゐる句である。從來、敘景歌の心體を得たる巧みな歌とか、哀れさ・寂しさの身に沁む幽玄歌とか稱せられてゐる。一首の聲調としては、「鳩の海」も「志賀の浦」もやゝ平穩にしてよわさがひそむのではあるまいか。

〔夕月夜の歌〕——一首の體にくせがなく題材もすがすがしいものである。そして何處か艶なる趣がある。但しさういふ點を除けば普通の題材内容であつて、すでに評されたやうな千鈞の力ある、迫力にゆたかな歌ではない。「難波江の」あたりに題詠臭味があることも新古今集の歌の特質の一つとして注意していかと思はれる。

〔月すめばの歌〕——「月すめば」と詠み出して「よもの浮雲空に消えて」とつゞけた工合は、巧みを弄したもので、むしろ正常なる敘法でなく、奇手、人の心をとらへる點である。つまり平敘ならば浮雲のきえた空に月の澄むといふ風にいふ所である。「空に消えて」の「に」も用意をもつて用ゐてある。「空に消えて」より「み山がくれ」への連続も、空に雲なく山に嵐の音あるの心持、すなはち空と山との點出が單なる點出でない所に、新古今的な作歌態度の一面がみえてゐる。さういふ用意と照應、用語の美麗さを短歌批評の標準とする人にとつては、風情いふばかりなき作品とみとめられるのである。第三句の一音の字あまりの爲に、下句がよわく感ぜられる。

〔吉野山の歌〕——かうした詠みぶりの歌としては起伏があつて、風韻ある佳作とすべきであらう。

〔人すまぬの歌〕——不破の地名をとつて、破れざるといふ關の宿の板廂も荒れたと言葉の取合はせ上の面白味をいひ、「ただ秋の風」は初句の「人すまぬ」に應じて人と風との對照の面白味をねらつてゐる。さういふ點が單なる敘景の歌とはちがつた興味を與へる所がある。併しこの歌はさうした技巧の興味より來るもの以外に、秋風寂寥の趣をねらつた歌として、當時の作品中氣品に富む一首であるに相違なく、詞句の聯關にも下品・粗野な影がなくていゝと思はれる。

三 批評

新古今集の作品の特色は優美とか幽玄とか華麗とか纖巧とかいはれてゐる。本課に抄した作品はそれらいつれの評語にもあたるべきものを見出し得る。それから象徴的・客觀的・音樂的・繪畫的ともいはれる。さういふ性質も本課の作品から見出し得る。更に又修辭上では本歌取・三句切・體言止の各項がかぞへられる。これも本課からその適例を拾ひ得る。本課所收の作品が新古今集の根幹をなす代表的作家の作品によつてみたまされてをり、古來秀歌と推され、佳作・傑作とみとめられるもので充滿してゐるから、さうした批評語にあたる各作品が在るのは不思議でない。又一面、新古今集の内容の案外に單一色であることを證してゐるのではなからうか。

新古今集は萬葉集・古今集以外に立つて、獨得の作風を成したことから、和歌史乃至は文學史の上に不滅の存在とされる。さうして後世に對しては幾多の影響を與へ、江戸時代の歌人の一部にまで、根柢ふかき感化を與へてゐるのである。更に明治以後現代に至つても、前時代の如く著しくなくとも、とにかく萬葉集に對立する一歌風としてこれを論じこれを崇ぶことは遂に絶えない。そこに否定することの出來ぬ新古今集の魅力がある。

併し新古今集のおのづから有する薄弱性は多々存する。さきにあげた各性質でもわかるやうに、現實的な迫力がない。その殆どすべてが寫實でなくて題詠であること、作歌の標準の幽麗に在つて、假令寂びといつても象徴といつても、現實に即して徹し來つたものでないこと等が因由となつて、人間感情の繊細な一部に應ずるのみで精神力の根柢にふれるものが少いのである。本課の作品としても、佳句とされる「入日をあらふ」「花の雪散る」「はなのつゆそふ」「春とも知らぬ松の戸」「春のみなとは知らねども」「秋風に夕日さびしき」「浪の花にも秋は見えけり」「花のふるさとと絶えて」など比々皆然りである。新古今集にいふ風韻・餘情・餘韻が、結局迫力の足りない概念化にあるやうに思はれ、結局一技巧が人の眼もあやに映する作品を生んだのかと思はれる。當時の作者等は現在我々の感ずるやうに、それを技巧の末とは思はなかつたのであらう。又追隨者も同じくさうは思はなかつたのであつて、そこに様々な示唆を有するのである。

三 備考

一 指導の問題

新古今集はすでに本巻に於て學習した萬葉集・古今集よりも後の時代の所産であるにも拘らず、一首の意義の解釋には却つて困難を感ずるのである。それは批評に述べたとほりの性質であるが爲に、直截・簡明な情緒よりは、一度技巧を経、反省的・意識的に制作せられたものであるから、すでにかやうな雰圍氣から遠くなつた我々には、障りなしに受取る部分が少くなつてゐるからであらう。隨つて生徒の理解の第一歩としては、熟誦のうちに語義の解釋に入つた場合、一首々々に於ける新古今的な急所を擷んで、語義以外の氣味あひにまで暗示的に言及すべきである。一首全體の意義からさうするのも必要であるが、一語一句の場合がもつとも効果的であらう。一體に所謂調子はいゝのであり、一讀の感じは流麗であ

るから、それだけのものとして素通りしやすい。そこをもう一度注意させて、はたして我々の感情に會得出來てゐるかどうかを考へさせたいと思ふ。つまり作者等が苦心をしてかういふ作品にまでいたつた経路を辿らせてみることである。純粹な藝術的の見方によれば、新古今集に往々みられる瑣末な情感に忠實に即くことは戒めらるべきであらうけれども、作品自體を理解せしめる上には止むを得ない方法である。その場合は從來註釋者或は一般文藝批評家が用ひ慣れてゐる、幽玄・餘韻・風情・纖巧・華美の如き評語そのものを以てせず、平易に説明してゆくがよい。生徒は、さうすると、現在の感情にうとい制作の標準、たとへば本歌取・縁語・掛詞の如きに逢著して理解につまづき、それらの價值如何の問題にも觸及するものではないかと思はれる。その用意には制作の雰圍氣が、時代によつておのづから異なることの説明から、新古今集の文學史的な地位が、理論からだけでなしに指示出來て來はしないかと思ふ。

二 參考資料

(一) 新古今集の歌風についての窪田空穂氏の批評を新古今和歌集評釋から左に引用する。

新古今集の歌は、餘情幽玄といふ語で評せられて、それがやがてこの集の歌風のやうにははれてゐる。新古今集を、それより前の七代集に比較すると、まさにさう評し得られる。抒情であると共に客觀的であることは、抒情の心をもつてした自然描寫といふことになつて行く。これは、語として含蓄と聯想とが、やがて餘情である。又、一方では、榮華に馴らされて來た貴族が、俄に苦難の生活を強ひられた結果、彼らは初めて現實を直視することを覚えさせられた。更に、寂寥そのものの中に救ひを求め、それに住することを知り得るに至つた。幽玄といふことは意味の廣い語であるが、俊成によつていはれたのは、これに近いものだと思はれる。これに言ひ添へるべきは、俊成の子定家のいつたところの妖艶である。定家の新古今集における指導的地位の幾何のものであつたかは定め難いが、作者としての位置は高いものである。彼のいふところの妖艶は、俊成の強め深めようとした艶とあはれの、その艶のみを推進めて、これを氣分としようとしたものと思はれる。定家の俊成よりうけたこの影響は、やがて當時の作者の大部分の、同じく俊成よりうけた影

響を暗示してゐるものと思はれる。

(二) 新古今和歌集の数字的概観

1 大別歌數

(1) 四季歌(卷一―六)

七〇七

春 一七四 夏 一一〇 秋 二六七 冬 一五六

(2) 賀・哀傷・離別・羈旅歌(卷七―一〇) 二八二

(3) 戀歌(卷一一―一五) 四四六

(4) 雜歌(卷一六―一八) 四一八

(5) 神祇・釋教歌(卷一九・二〇) 一二八

2 修辭的特徴としては本歌取・三句切・體言止の三つが數へられてゐる。

三句切は、古今では一・四割、拾遺では一・九二割であつたものが新古今では過半に達してゐる。

又、體言止は、萬葉では〇・三八割、古今では〇・四七割であつたものが、新古今では二・五割に至つてゐる。以て新

古今調の修辭的特質を窺ふことが出来る。

(三) 新古今和歌集の主要な註釋書を左にあげる。

東常縁 新古今集聞書 四卷

加藤盤齋 新古今増抄 二十卷

北村季吟 新古今集抄 二十卷

本居宣長 美濃の家つと 五卷

石原正明 尾張酒家苞 五卷

鹽井正男 新古今和歌集詳解

鴻巣盛廣 新古今集遠鏡

窪田空穂 新古今和歌集評釋 二卷

一六 中世の文學

岡崎 義 惠

一 解 題

一 本文

「日本文藝思潮」の三「中世」の前後を省略した抄録である。「日本文藝思潮」は岩波講座世界思潮(第二回)の第九冊(第一回の時は第十冊)に掲載せられた論文で、一 原始時代、二 古典時代、三 中世、四 近世、五 現代の時代區分の下に、日本文藝思潮の記述と分析を試み、その發展を跡づけたものである。(世界思潮 全十二冊、岩波書店發行)

二 作者

岡崎義惠。國文學者。明治二十五年十二月高知市帶屋町に生まれた。四十三年三月高知縣立第一中學校を卒業、第三高等學校を歴て東京帝國大學文科大学國文學科に進み、大正六年七月卒業。八年九月同大學文學部講師となり、十二年四月東北帝國大學法學部助教授に轉じ、十三年十一月留學を命ぜられ、翌年渡歐、英・獨・佛各國に遊學して歸朝、昭和二年一月更に教授に任ぜられ、以て今日に及んでゐる。新しき見地と方法とを以て日本文藝に於ける美的價値の體系的史的開展を究め、各種専門雜誌・講座等に發表してゐるが、その主要なるものを纏め「日本文藝學」として單行した。本文を含む「日本文藝思潮」もその中に採録せられてゐる。

三 採擇の趣旨

中世文學を概観させる爲に掲げたものである。上代文學及び平安朝文學の概観は、「大和國原」「平安京」の如き、その期の文學の發生し生長した地域に即して試み來つたのに、こゝではこの期の文學を根本的に規定してゐる文化精神に於てしようとするのは、この期の文學が上代や平安朝のそれに比して、地域的契機が複雑で、文化精神に基調することがより濃厚であると考へた爲に外ならぬ。文藝的教材であり、文化的教材であることはいふまでもない。

二 教材としての研究

一 註 解

【中世】 チュウセイ 日本文藝思潮の歴史的展開を原始時代・古典時代・中世・近世・現代の五つの時代に區分した第三の時代。年代的な區分は示されてゐないけれども、大體、大和朝廷時代・平安朝時代・鎌倉室町時代・江戸時代・東京時代の如く區分する場合の鎌倉室町時代に、又上古・中古・近古・近世・現世の如く區分する場合の近古に當る時代である。政治史の上では政權が公家から武家に移つた時代、文化史の上では新佛敎が興つて僧侶が文化の指導的地位に立つた時代である。

【文藝に於ける中世的なもの】 作者は原文に於て、中世の

文藝に、(一)前代から流れ來つてゐる古典的なものと、(二)この時代に興り、この時代の意義をなしてゐる中世的なるものと、(三)次の時代の萌芽となつた近世的なるものとの三つの契機を認め、その交流し、消長する所に、中世の文藝が存立するとしてゐる。こゝはその(一)をさすものであることはいふまでもない。

【文藝】 プンゲイ (四二頁を見よ)

作者は「日本文藝學」に於て、文藝を、外面的には言語を表現媒材とする藝術の一部門として規定し、内面的には想像様式の藝術として規定してゐる。

【僧侶】 ソウリョ 中世に於ける僧侶は、鎌倉時代に勃興

し、室町時代に於て社會の各層に浸潤した新佛教と共に、分化の各分野にめざましい活動をなした。例へば、政治方面に於ては幕府の顧問となつて内治・外交の樞機に參與し、文藝方面に於ては新興文學を發達せしめ、謡曲・狂言・草子類・隨筆・日記等にも直接・間接に働きかける等中世文化の各分野に於て指導的地位に立つた。就中その中心的地位にあつたのは所謂五山の禪僧である。禪は孝徳天皇の朝以來屢々我が國に傳へられたが、未だ流行の機運には至らなかつた。然るに鎌倉時代榮西・道元の入宋によつて傳へられるに及び、當時の武士の氣風に投じた爲、大いにその信仰を得、室町時代にかけて隆盛を極めた。かくして鎌倉時代には鎌倉五山が、室町時代には京都五山が榮え、幕府の保護の下に人材鬱然として集り、これらの禪僧は單に禪學のみならず、儒學を極め、詩文に長じ、或は政治に參與し、使節となつて外交の手腕を揮ふ等、時代の指導

的勢力をなした。

【武士】 ブシ 平安朝時代に於ては、貴族階級の手足となつてその利益の爲に利用されて來たが、まづ地方に於て隠然たる勢力を獲得し、その末葉以後次第に中央に據頭・進出し、遂に當代に至つて政權を獲得し、貴族に代つて社會の支配的階級となつた。文藝方面に於ては、藝術的能力を持たなかつた爲、直接その創作に與ふことは比較的少かつたが、その武士的精神は當代文藝に深く浸潤し、佛教的精神とともに眞に中世的なものの契機となつた。

「武士的精神」とは、前代の中葉以來、地方、殊に關東に住んだ豪族の主從間に興り、多年の軍陣生活の間に成長し、陶冶された精神であり、武家の勃興とともに彼等が我が文化史上に齎した力強い澁刺たる一つの素樸的精神である。前代の享樂的・文飾的・感傷的・靜的な貴族的精神と好箇の對照をなし、苦行的・實踐的・意力的・動的等の特質を有してゐる。もと體驗そ

のものの生んだ精神であるが、教育の普及につれて、

佛教（殊に禪宗）・儒教等の影響を受け、次第に純化・精鍊せられて、所謂武士道を形成するに至つた。

【動力】 ドウリョク (1) motive force (英)の譯語。「起動力」ともいふ。一の物體が他の物體からある條件によつて拘束せられて運動を起すとき(この運動を束縛運動といふ)、その運動を起す力をいふ。(2) power (英)の譯語。「原動力」ともいふ。機械を運轉させる爲のエネルギーの工程。又は單にその種類を指定する爲にも用ゐられる。こゝでは單に、活動を起す力、の意。

【直接行動】 チョクセツカウドウ 規範・制度等に束縛されず、直接的な方法、即ち暴力等に訴へてなす行動。労働運動上の用語としては、言論・宣傳等の合法的手段を用ゐず、罷業・怠業・暴力・革命等の行動に著手すること。

【實踐的意志】 ジッセンテキイシ 實踐しようとする意志。實際の行爲・動作を伴ふ意志。

【實踐】 實際に履行すること。行爲にあらはし出すこと。

〔意志〕 理智及び感情に對して、何かを爲さうとし、若しくは爲すまいと努める心の働。總べての行意・動作の原動力である。心理學的にいへば、動機から始り動機の満足に終る生理的・心理的過程を總稱する多義の概念である。狹義には有意作用、廣義にはその外に衝動をも含める。衝動若しくは動機の決定によつて外部動作が開發されるやうな意志活動を外部意志活動といひ、然らざるものを内的意志活動といふ。

【原始人】 ゲンジン 原始時代の人。太古の蒙昧な人類であるが、こゝでは、我が上代の國民をさす。作者は原文の中で「果敢なる行爲、決斷に富んだ意志、其明快さ、激烈さは、原始人の著しい特性である」といつてゐる。

【野人】 ヤジン (一) 田野にある人。田舎者。(二) 民間の人。在野の人。(三) 粗野な人。粗暴な人。(四) やばな人。

無骨者。(五)無教育な人。こゝでは、教育・修養等によつて洗練されない、素樸な人、といふほどの意。

【爛熟】ランジュク (一)果實の熟しすぎる事。實がいりすぎてうみたゞれる事。熟爛。(二)度を越えた程に熟知すること。よくのみこむ事。(三)物事の熟達して、やゝ盛りを過ぎること。こゝは(三)。

【貴族文化】キゾクブンクワ 貴族によつて生まれ培はれ保持せられた文化。

我が國に於ける貴族文化は、王朝時代京都に發達し、その消長は藤原氏と運命を共にした。その特性は、唯美的現世享樂主義とも稱すべきもので、文藝に於ても主情的傾向著しく、宗教も道德も、現世肯定をその主なる目標とした。歴史的には、弘仁・寛平頃に略成長し、延喜・天曆頃に完成し、寛弘・長保の頃に爛熟の頂點に達し、以後次第に頽廢・凋落の途を辿つた。

【貴族】もと「貴顯の家」の義。今日では、一定の社會組織に於ける上層特權階級の稱。我が國では普通に

は華族の別稱。又貴族院の場合は法制上一定の規定がある。歴史的には、王朝時代以來宮廷を中心として社會生活を營む公家の汎稱。具體的にいへば、上古の大・大連・卿大夫・臣・連及び國造・伴造の特に勢力のあるもので、天武朝に真人・朝臣・宿禰・忌寸等の高級の姓を賜はつた者、及びその後功績又は家柄が特に著しい爲にこれらの姓を賜はつた氏である。豪族と對立し、武家擡頭後に於ても武家は貴族に含めなかつた。

【文化】(二五頁を見よ)

【缺】ケツ 缺けたところ。不足なもの。こゝでは、藝術的乃至は文化的能力の缺乏をさしてゐる。

【原始時代】ゲンシジダイ 日本文藝思潮の歴史的展開を五つに區分した、第一の時代。年代的な區分は示されてないけれども、普通に「大和朝廷時代」「上古」「上代」と呼ぶ時代に略相當する。

作者は原文中で、「此處は未だ文化の様々な分野が境

界を明かにしない世界であつて、文藝の自立も認められず、他の文化現象と不可分に結合しながら、實際的な目的の爲に驅使されてゐた」といつてゐる。そして更に、原始文藝に(一)「國家的崇高への要求が總てを犠牲にする以前のもの、殘骸」としての滑稽的・喜劇的な美と、(二)「國家的崇嚴に向つて異常に高められた」精神、即ち崇高壯大な美と、(三)「次に來るべき一層人間的な『古典時代』の曙光としての純情的・悲劇的な美との三つの契機を認め、そのうち眞に主導的・中樞的なものは(二)で、「力の偉大に存する愉快と畏怖、即ち崇高なるもの(しかし此處では主として肉體的・物質的・外面的・外發的な美)」であるとしてゐる。

【培養】バイヤウ (一)草木をつちかひ養ふこと。(二)もとの根柢をやしなひそだてること。こゝは(二)。

【現世的享樂】ゲンセテキキヤウラク 現在の世界に於て現實的なものを樂しむこと。

王朝時代の貴族が現世的享樂に専心したことは、例へば光・色・音・形・にほひ等の感覺美が異常に發達し、詩文・和歌の會、探題・探韻・探勅・韻ふたぎ・篇つぎ・詩合・歌合・花合・前栽合・根合・扇合・謎合・繪合・香合・具合・艶書合・あて繪・扇ひき等の勝負事が夥しく案出され、龍頭鶴首の舟遊、笛・琴・琵琶・和琴・箏・笙等の合奏、今様・朗詠・讀經あらそひ・猿樂・田樂等の聲樂及び舞樂等の流行したこと等によつても知られる。

【現世的】行動・思想・感情等が現世を主とし、現世を超越した世界に及ばないこと。

【古典時代】コテンジダイ 日本文藝思潮の歴史的展開を五つに區分した、第二の時代。年代的な區分は示されてゐないが、凡そ「平安朝時代」「王朝時代」「中古」等と呼ぶ時代に相當する時代。

本來ヨーロッパの文藝史上に於ける用語で、文學史上典型となるべき偉大な作品を生み出した時代をいふ。

ヨーロッパ全體でいへば、ギリシヤ・ローマ時代、各國についていへば、イギリスではシェークスピアを出したエリザベス時代、フランスではモリエール・ラシニスを出したルイ第十四世の時代、ドイツではゲーテ・シルレルの時代、イタリアではダンテの時代等で、一般に情緒の奔放な動きよりは理智による統制を重んじ、形態の整調・諧美を尊重する。こゝでは、それを我が國に於て、後世永く文藝の典型として尊重され顧みられて來た萬葉・古今・源氏の三大代表作を生み出した時代といふ意味で用ゐた。

作者は原文のその項の中で「原始時代の後を承けて、奈良朝に於て隆まり平安朝に於て漸次低落の途を進んだ文藝思潮の流れを認め、これを『古典時代』と呼ぶならば、『古典時代』は『原始時代』に於て建設の事業を完成した國家の地盤の上に、生活の最初の享樂が行はれ、人生の美的莊嚴が現出した時代である。(中略)原始時代の理想を實現し了ると共に最早其實踐的目標

を前途に失つて、總ての行爲が遊戯化されて來た世界である。(中略)苦しんで探求するのでは無く、易々と出來上つて來る姿を楽しみ愛撫せんとするのである。遂に文藝の諸形態も固定され、逆に其様式を以て實生活の様式を規定して行かうとする傾がある」といつてゐる。更に古典文藝の契機として、(一)前時代から繼承されて次第にその力を失ひつゝある國家的崇高感即ち崇高壯烈な美と、(二)平安朝の文藝を通じて次第に形成され、永く日本文藝の古典的潮流として生き残つた地上的愛・個人的感情の脆弱性の上に成立する「物のあはれ」と、(三)その消滅を促す根本的な動力としての中世的崇高の萌芽とを認め、それらが次第に起伏・消長するのであるが、勿論その内面的骨格となつたものは(二)であるとしてゐる。

〔古典〕 英語の *classic* に當る。(一)昔の儀式又は法式。(二)古代の書物又は記録。(三)古代の文藝。權威ある古代の作品。或はその國民の文藝上最も全盛時代

の代表的作物。

【驅使】 クシ 人をおひたてつかふこと。又、人に使はれること。

【本領】 ホンリヤウ こゝでは、(一)もとからの領地。ほんち。(二)特色。本質。特質。(三)領地として賜はること。こゝは(二)。

【轉換期】 テンクワンキ うつりかはりの時期。ある時代から次の時代に移り變つてゆく時期。こゝは、古典時代から中世への轉換期をさす。

【猪突的】 チョトツテキ 猪の突進するやうに向ふ見ずに一直線に進むさま。左右を顧みずに事をなすさま。まっしぐら。

【蒔く】 マク こゝでは、うゑつける、の意。

【統一】 トウイツ (一)一つにすべること。(二)箇々のものを根本的な原理に隨つて、一定の組織的系統の下に整へること。こゝは(一)。

【渾沌】 コントン (一)天地開闢の初の物事の判然しない

状態。(二)物事の區別の判然しない状態。こゝは(二)。

【清澄】 セイチョウ きよらかにすむこと。こゝでは、現世的な關心から生ずる總べての濁濁したものを淨化し統一した、宗教的・内面的な調和の境地を意味してゐる。

【崇高】 スウカウ (一)けだかくたふといこと。尊嚴なこと。(二)人間の普通の理解力では理解することの出來ない驚異・畏敬・偉大等の感を與へるもの。(三)美的様式の一。宗教的意識が美的對象の内容をなす美的様式。優美・悲壯・滑稽と區別せられる美。自然の崇高、人格の崇高、道義的崇高等がある。こゝでは「外部に向かつて力の煥發される素樸にして粗野な崇高」即ち原始的な崇高(寧ろ壯大とか壯烈とかよばるべきもの)に對して、精神的に深化され、純化された内面的崇高を主として意味してゐる。

【未完成】 ミクワンセイ 未だ完成しないこと。未だその建設の過程にあること。未成。

【古典的なもの】

作者は現世の人間の立脚地から観られるといふことが古典時代の理想の歸着点であり、その理想に適合したものととして、總べての古典的・貴族的なものが成立する、随つて「それは總べての未完成、不均衡なるものの反對、あらゆる異常なるもの、度外れなるものの反對である。原始的な粗野・激烈・壯大・威嚴に反對なもの——即ち優婉典雅なるもの」であり、「優美・愛・平和・女性的・人情・同情・地上的等」を特質としてゐる。

〔古典的〕 コテンテキ *Classico* (英) (一)ギリシヤ風の明朗・典雅な。(二)第一義的。典型的。(三)主知的・合理的直觀を原理とした、典雅・壯重な形式を有する。(浪漫的の對。)

〔對蹠〕 タイシヨ 「たいせき」の誤讀であるが、現在専ら行はれてゐる。正反對。

〔蹠〕 セキ あしのうら。

〔傾向〕 ケイカウ 一方にかたよる現象。きはだつて流行

する現象。かたむき。

【原始的】 ゲンシテキ 原始の性質を持つてゐるさま。作者は、原始性は、生命が原型のまま露出・直射するところに成立するもので、「極めて本能的に發して來る意志決斷の力で何事をも見直し聞直し、押片附けてゆく」といふ趣を持つて居り、反面には粗野混沌もあるが、後代のやうに生命が「様々な服飾と姿態との洗鍊の中に埋もれて、却つて健在を疑はれるやうな憂愁なる不安」はなく、根源的・素樸的・本能的なるが故の公明率直・明るさ・強さ・朗らかさ・爽やかさ等の諸特性を持つてゐるとしてゐる。

【復活】 フククワツ (一)死んだものが復び生きかへること。(二)不用にしたものを再び役立たせること。(三)基督教で、死者の肉體が再生してその靈魂と一緒になるといふ信仰。こゝは(一)で、一度滅びたものが、復び生命をもつてくること。

【中葉】 チュウエフ なかごろの世。時代のなかごろ。

〔葉〕 こゝでは、世、世代、時代、の意。「末葉」「累葉」

【生命】 セイメイ こゝでは、物事の成立・維持される力の意。

【調和】 テウワ ととのひやはらぐこと。矛盾又は衝突なく互に程よく合すること。心理學的には、感覺内容相互の性質の間に、一定の法則によつて主觀的に一種の統一關係が成立し、快適の感を生ずる場合をいひ、美學的には、美的形象の形式相互間にかゝる關係の成立する場合をいふ。

【優婉】 イウエン やさしく美しいこと。

〔婉〕 (一)したがふ。親しむ。従順である。(二)しとやか。しなやか。すなほ。わかい。うつくしい。

【典雅】 テンガ 正しく品のよいこと。おもくしくみやびやかなこと。

〔典〕 (一)つかさどる。(二)のり。(三)みち。つね。

(四)ふみ。

【塗抹】 トマツ 物をぬりつけること。ぬりけすこと。なすりつけること。抹殺。

【歩一步】 ホイツポ 一步々々。一足々々。漸次。徐々。

【擡頭】 タイトウ (一)かしらをもたげること。(二)上表などで、文中の敬ふべき語を次の行へ送り、欄より上へ出して記すこと。こゝは(一)。

【中軸】 チュウヂク (一)物體の中央にある軸。(二)轉じて、中心。こゝは(二)。

【意志的明快】 イシテキマイクワイ 意志に基づく明快。意志の強さから生ずる、さつぱりとした明らかさ。

【争鬭的混濁】 サウトウテキコンコン 争鬭に基づく混濁。争ひ、戦ふことから生ずる混濁。

〔混濁〕 まじりみだれること。いり亂れること。

〔濁〕 にごる。みだれる。けがれる。

【本能的素樸】 ホンノウテキソボク 本能に基づく素樸。意識的努力によつて求められる素樸さでなく、本能として自然に持つてゐる素樸さ。

【本能】 生後の經驗又は教育によらないで、自然に要求し、自然に行動する先天的性能。先天的である點に於て、智能と區別し、意識的作用であり、且統一的・全體的機能である點に於て、反射運動(局外的であり、又必ずしも意識的でない)と區別する。普通、自己保存の本能、種族保存の本能、團體本能、適應本能等に分類される。

【素樸】 (一)人為・人工なく原始のまゝであること。(二)虚飾なく天眞のまゝであること。いつはりやかざりのないこと。質樸。

【隱忍】 インニン 苦痛をこらへて、表面にあらはさぬこと。心に秘めてこらへしのおぶこと。

【對立】 タイリツ 相對して存在すること。對峙。

【主題】 シュダイ (一)主要な題目。(二)藝術上では、作品に於て作者が表現しようとしたもの。即ち文學に於ては、作品の筋・情景・人物等の素材を驅使して描かうとした中心目的、音樂に於ては、作品全體の基調となる節。

國民文學としても代表的なものである。

【保元物語】 は、作者未詳。平治物語の姉妹篇として同一人の手に成つたと見られる。 成立年代未詳。大體鎌倉幕府創立後と見られる。 保元の變の顛末を敘した三卷の軍記物。

【平治物語】 (三九六頁本文及び作者を見よ)

【平家物語】 (三七二頁を見よ)

【源平盛衰記】 は、作者未詳。成立年代未詳。大體鎌倉時代中期から末期までの間と見られる。 平清盛の榮華を中心として主として平家の興亡盛衰を敘した四十八卷の軍記物。平家物語の異本の一種とする説がある。

【太平記】 は、小島法師(傳未)の作。成立年代未詳。大體興國の末から正平の初めにかけた數年であらうといはれる。 花園天皇の文保二年から後村上天皇の正平二十二年まで、凡そ五十四年間の戰亂の様子を敘した四十卷の軍記物。

【美】 ビ こゝでは美學上の用語で、廣狹二義ある。(一)廣義には「美的」即ち「美的なるもの」と同義に用ゐられ、美的判斷の對象たり得るもの一切をさす。かゝる美

こゝは(二)。

【軍記物】 グンキモノ 戰爭を主としてある歴史時代を取扱つた敘事的文學作品の總稱。軍記物語。戰記物語。

廣義には、先驅をなした將門記・陸奥話記・奥州後三年記・承久記・承久軍物語・承久兵亂記等の戰亂記録、或は後の義經記・曾我物語等の個人的物語も含めるが、狹義には保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記の五種を稱するのが普通である。平安朝時代の假構物語・歴史物語が、鎌倉時代に於て、武士の活動や戰爭を寫す敘事的文學として展開し、貴族文化と武家文化との融合・調和によつて産み出されたものである。語物といふ特殊の用途を有し、その成立の事情も、ある特定の個人によつて一時に創作されたといふよりは、むしろ多數の人々によつて、順次に成長していつたものと認められ、當代の中心層を形成してゐた代表的な社會を反映してゐる點に於て當代(主として前期)の代表的な文藝であり且敘事文學並びに

的對象は何等かの内容を持つときに始めて具體的な美的様式として現實化せられる。例へば宗教的意識が美的對象の内容となるとき崇高美が、道德的意識が美的對象の内容となるとき悲壯美が成立する如きである。一般に、美的様式は、崇高・悲壯・優美・滑稽等に分類せられる。(二)狹義には、美的様式の一としての「優美」のみをさす。感官的快感を美的對象の内容とする美的様式。主として婉柔・暢和・流麗等の趣を持ち、優しいといふ感じを與へる美。こゝは(一)。

【關心】 クワンシン (一)心にかゝつて忘れられぬこと。(二)interest(英)の譯語。價值ある對象に注意し、これを肯定し又は否定する關與的態度をとること。關心が主として快・不快の對象に向けられる場合を興味といふ。 自然的欲望の對象に對するものと、眞・善・美等の理想的價值に對するものとに區別し得られる。こゝは(二)。

【人間的】 ニンゲンテキ 人間らしい。人間としての。

【超人間的】 人間とかけはなれたやうな。人間以上の。

